
鎖川零時の日常！！！！

髭伯爵

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

鎖川零時の日常！！！！

【Nコード】

N4728E

【作者名】

髭伯爵

【あらすじ】

やたらと秘密を持っている高校生・鎖川零時。彼と校内随一の危険人物である剣野舞歌との出会いが、これからの彼の高校生活を大いに騒がしい物へと変えていく。「神様なんで俺を見捨てたんですか……………！！！！！！！！！！」

ブログ：始まりです。(前書き)

新シリーズスタートです。

もう一作品書いてるので更新は遅いと思いますが、気長に待っていて下さい。

プロローグ：始まりです。

人生とは何が起こるか分からない。

俺こと鎖川零時さかわれいじは非常に困っていた。

今日学校の部活を適当に嘘をでっち上げて（理由無しだと次の日酷い目に遭うんだよ・・・）近所の本屋に漫画の最新刊を買いに来ていたのだが、その本が売っている場所にとんでもない奴が陣取っていたのだ。

綺麗に整えられたショートヘアの髪にロングスカート、そして俺の通っている西京高校の制服を着た女子・・・、剣野舞歌つるぎのまいかがいるのだ。彼女はうちの高校で最も危険な人物と言われている。

いわく、この辺りの暴走族チームを全て全滅させたのだ、ヤクザの事務所に入り込んで皆殺しにしたのだ、野良猫を捕らえては晩飯にしてるのだ、とにかくヤバイ噂が絶えない。（最後のはアレだが・・・）

しかも学校では気に入らない相手なら先輩だろうが教師だろうが皆ぶちのめすので（目撃証言多数）皆恐れて近寄らない、そんな奴なのだ。

（くそ、せっかく部長に嘘ついてまで休んだつのに・・・。早くどいてくんねえかな・・・。）

俺の心中など知らず剣野は黙々と刊年ジャプを読んでいる。
・ちよつと意外。

とその時、ようやく俺の心が通じたのか剣野がその場から離れようとする。

俺はチャンスとばかりにお目当ての漫画を手に取る。すると、反対側から物凄い力で漫画を掴まれ、俺は掴んできた相手に抗議しようとした。

「おい、ちよつ・・・!？」

しかし、抗議の声は途中で止まってしまった。

何故なら、俺の目の前で漫画を掴みながら滅茶苦茶睨んでいる（何か殺気っぽいのが混じってる気が・・・）奴が、剣野だったからだ。

私、剣野舞歌は目の前で口をパクパクしながら必死に何かを言おうとしている相手を睨みつつ（相手は汗が凄く勢いで流れている）、本を掴む手の力が緩んでないのに気づき舌打ちをする。なんだ少し睨めば離すと思ったのに。

「今なんか物騒な事考えたる!!」

・・・中々鋭い奴みたいだ。

「うるさい、いいから早く手を離せ。」

「無視しやがった!! くそ、こつなつたら意地でも離さねえ!!」

「!」

「・・・殺すぞ。」

「ひいひい!!! 目がヤバイデスヨ!? ここは話合いで収めましようお願いですからだからその拳を収めましようぞ!!!!!!」(半泣き)

あまりにもうるさいので仕方なく拳を下ろす。良く見るとそいつは私の通っている学校の学ランを着ており、私はどうしてこいつがそんなに驚いた顔をしたのか納得した。そうか同じ学校の人か・・・なら別に殴っても・・・。

「待て、何を考えてるのか知らんがそれはやめろ!!!!」

・・・本当に鋭いな。

「で、取り合えず話合いつて?」

「ああ。この本は俺が先に取ったんだから俺の物だと・・・すいません馬鹿なこと言いましただから拳を収めてください。」

こいつは危機感知能力に優れているようだ。私は再度上げていた拳を下ろす。

まったく、これじゃ全然話が進まない・・・。

そしてようやく、私は彼が誰なのか気づき、心の中で死ぬほど驚いた。

私は心中の動揺を悟られないよう気をつけつつ交渉を続ける。

「取り合えずコレ下ろさねえか? さっきからすごいミシミシいってるんだが・・・。」

「そんな事言つて私が離れたらそのままレジに持ってく気だろう?」

「しないしない。多分会計済ます前に追いつかれる。」

良く分かったな。もし実行してたらスペシャルコースで地獄行きの特急列車に乗らすのだが……。

「また物騒なこと考えただろ!!」

「……それが何か?」(ギロリ)

「何でもありません……。」

取り合えず(さっきからこればかりだ……。)私とそいつは漫画をその場に置きどちらが買うかで話し合いを始めた。

……心の中で笑みを浮かべながら。

「俺今日のために小遣い貯めといたんだけど……。」

「他の本を買え。」

「この本のために貯めたんだけど……。」

「知らん。貴様の都合などいちいち付き合ってられるか。」

「いやお前の都合もこっちは知ったことが」

「何か?」(ギロリ)

「何でもありません……。」(涙)

剣野は俺の都合などお構いなしに話を進め、最終的には睨みつけることで反論を抑えてしまう(俺はこの日初めて目線だけで人を殺せそうな人物を知った)。

俺はこのままでは勝ち目は無いと思いつんでもないことを言ってしまう(後になってかなり後悔する)。

「頼む!!何でも言うこと聞くからどうか譲ってくれ!!!」

こうして、この瞬間から俺の平和な日常は終わりを告げ、俺と剣野の騒がしい日常が始まる。

何度も死に掛けて、でもどこか楽しい、バカみたいな日々が。

プロローグ：始まりです。（後書き）

今回はコメディ路線で行きます。

・・・上手く書けるかすげえ不安だ。

第1話：罰が当たった。
(前書き)

今回は新キャラ登場です。

第1話：罰が当たった。

悪いことをしたら罰がある。

剣野舞歌に爆弾発言を言われた次の日、俺は所属している弓道部の朝練に出ようと学校に来ていた。

只今の時刻6時30分。非常に眠い……。 (休日は11時まで寝ているほど朝は弱いのだ)

「しかし昨日休んじまったしな……。朝練くらいしっかりやんねーと。」

そう思い俺は思い切り体を伸ばす。ん〜今日も良い天気ですなあ。しかし頭の奥には昨日の問題をどうやって解決するか、それが離れなかった。

結局昨日の剣野のとんでもない発言にパニックってしまった俺はその場から全速力で逃げ(剣野が目を点にしてたよ……。)そのまま帰宅。家に帰った後も心ここにあらずといった感じで家族が怪訝そうな目をして俺に話しかけようとはしなかった。

正直有難かった。あの時何を聞かれてもまともな答え返せそうになかったし……。結局一晩経つてもなにも思いつかずこうして学校に来てしまったのだ。

まあいつまでも考えてたつて仕方ない。今は部活に集中しよう。俺は一旦考えるのを放棄し、部室である弓道場のドアを開けた。

「おはようござ……。え、なにこの殺気!? 俺2日連続で殺気浴びてんだけど!？」

道場に入った瞬間俺は体中に悪寒を感じ、それが殺気だと昨日の経験により気づいた。

恐る恐る靴を脱いで中に入ると、道場の真ん中に正座している道着を着た一人のポニーテールの女子が目に入った。……。うん、殺気は彼女からだ。(泣)

「え、え〜と、どうしたのでしょうか香奈先輩……。」

俺は西京高校2年生にして弓道部部长、飯田^{いじたかな}香奈に話しかける。彼女はゆっくりとこちらを向いた。

香奈先輩(名前で呼ばないと何故か俺だけ怒られる)はにっこりと笑いながら(額に青筋っばいものが……!)(口を開く。

「零時くん、君サボったよね?」

バレとる……。!!!!!!? な、何故!? どうしてだ……。!!!!!!

「な、なんの事でしょうか? アッシにゃあさっぱりで……。」

「昨日日本屋で君を見たつて証言があるけど?」

「すいませんサボりましたごめんなさい。」

「用意はいいかしらあ？」

『オ~~~~~!!!!!!』

香奈先輩の声に弓道部員全員（俺以外）が大合唱を返す。

「それじゃ行くわよ。」

香奈先輩が射位に入ると皆一斉に静かになった。彼女の雰囲気が変わり、完全に集中している状態になったので皆邪魔にならないようにしたのだ。

俺は迫り来る恐怖と必死に戦いつつ、僅かに頭をずらした。

香奈先輩が引き分けに入ったところで俺は目を瞑った。

この状態になるといつも思う。・・・ぜってえ殺す気で射っている
と。

そして先輩が離れをして矢を放すと矢が真っ直ぐ俺の方に飛んできて・・・。

それから先は聞かないでくれ。アレをやられたら大概の奴は矢が飛んでくるときに恐怖で気絶しちまうんだよ・・・。

しばらくして俺が目を覚ますと、視界に香奈先輩の顔が飛び込んできた。俺は香奈先輩に膝枕をされているようだ。

・・・アレ？

「何この夢のようなイベント!？」

俺は素つ頓狂な声を上げて体を起こす。

香奈先輩を見ると、俺の反応がおかしかったのだろう、先輩はくすくすと笑っていた。

・・・いかん、この人の笑顔は綺麗過ぎる。

俺は自分の顔が赤くなるのを自覚しつつ、とりあえずもう一度謝っておいた。

「サボってしまってますんません・・・。」

「次からはしないようにね?」(ニコリ)

・・・もうしません。

俺は心に誓う。すると先輩はあることを尋ねてきた。

「ねえ零時くん。昨日って何で休んだの?」

? 何でそんなことを聞くんのだろ。いつもなら「今日はしっかりね。」とか言って練習再開すんに・・・。

俺は疑問に思いつつ昨日の用件が漫画だと伝えた。

てつきりそこでまた説教(という名の脅し)かなと思ったが、先輩は別のことで聞いたようだった。

「実はね、零時くんがサボってることを伝えてくれた子の様子が変わったから。」

「変?」

「うん、まるでとんでもないものを見たような感じだったんだよ。

サボり程度じゃああはならないだろうし、ちよっと気になったんだよ。」

「.....」

「昨日の告白の返事を聞きに来たぞ。因みに拒否権は無しだ。」

俺はこの時確かに聞いたんだ。何かが崩れていく音を……。
俺の日常が崩れていく音を……。

第2話・乙女達の喧嘩(前書き)

今回はちょっとアクションでいくので笑いがあまり無いです。

第2話：乙女達の喧嘩

力のあるものが正義。

『告白――――！！！？？』

弓道部員全員の合唱に俺は耳を傷める。驚くのは分かるがうるせえ。ちらりと剣野を見ると平然とした様子でした。むしろなにをそんなに驚いてるのか分からないといった風だった。いやお前の所為ですよ。

「そうだが、それがどうかしたか？」

剣野は普通に返してきました。・・・めっちゃ驚くつちゅうねん！！

俺もまだ驚いてるよー！！

「つーか何でここに・・・。」

「君の友人に聞いたら快く教えてくれたが。」

・・・誰だ教えた奴。まあ剣野に話しかけられたんだし、仕返しは

無しにしとくか。

剣野は俺に近寄ると顔をこれでもかと近づけてきた。うお、いきなりなんだ？

「それで返事は？」

「拒否権無しって言ってたような気がすんだが……。」

「ああ間違えた。拒否したら殺すだったな。」

「何で物騒になってんだよ！！！！ しかもあんまり変わってないし脅迫だし！！！！」

「気にするな。いいから“YES”と言え。」

「もはや単なる脅迫じゃねーか！！！！」

俺はもう剣野の噂などは一切忘れて突っ込みを入れていた。

周囲の部活仲間が離れた場所から「すげえ！！あの剣野に突っ込みを！？」とか「剣野の彼氏か〜、ナンマイダブナンマイダブ……。」とかほざいていた。後で吊るし上げてやる。

バン！！！！！！

その時、ずっと沈黙を保っていた香奈先輩が突然床を思い切り叩いた。

「……あれ、何か殺気が、すごい殺気が……！！！！」

「……あなた、何様のつもりですか？」

あの剣野に対しここまでけんか腰になれるのは凄いと思ったが、幾らなんでもやばすぎだろう。俺は止めに入る。

「あの、香奈先輩落ち着いて」

「零時くんは黙ってて下さい！！！！」

・・・すいません、何で俺が怒られるんでしょうか？
すると剣野も自分を睨んでいる香奈先輩を睨む。・・・やべえ、逃
げてえ。けど逃げたら殺されそうだよ2人に。

「零時くん？ 随分馴れ馴れしく彼を呼ぶのだな？」

「別にあなたに関係ないでしょ！！」

「いや大いに関係がある。彼は私と付き合うのだからな。私より親
しい女がいてはダメだ。彼は昨日から私の物だ。」

速攻で物扱い~~~~いえ~~~~じゃねえ!!!

俺は現実逃避を止めるとしっかりと現実を見ようとし・・・逸らす。
だって先輩の殺気がどんどん吹くらんでんデスヨ!!!? 直視でき
ません。怖くて。

先輩は周りが完全に引いているのにも関わらず迸る殺気を隠そうと
もせず(何か背中に竜と思しき形のオーラが・・・!?) 剣野の前
に立つ。

身長では剣野が勝っているが、剣野は香奈先輩を見下すような目は
せず、それどころかまるで好敵手を見つけたかのように嬉しそうに
笑みを浮かべる。

「彼は私のモノなんです。あなたなんかには渡しません。」

「私も臆病者に彼を渡す気は無いな。」

「!?!?.....く.....!!」

・・・何か、俺は完璧に置いてけぼりですね。つーか俺の意思はナ
ツシング?

微妙にいじけていると2人が口論を止めていた。あれ、もしかして
和解し

「このままではらちが明かないな。どうだ？表で決着をつけないか？・・・ああ、ちゃんと手加減はするぞ？」

「そつちこそ大丈夫？ 弱いものいじめばかりで実力は無いんじゃないの？」

「・・・言ってくれるな。」

「そつちもね。」

「・・・てねええええええ！！！！ てか暴力沙汰になつとる！！！！

周りからは「止めるよ。」「みたいな視線が送られるんだけど・・・、無理っす。死ぬっす。剣野は説明不要だし、先輩も空手とか合気道とか習つてたらしいし、俺じゃ無理だ。」

そうこうしてる間に2人は外に出ていた。俺は慌てて2人を追いかけて外に出る。

「・・・もう何か臨戦態勢なんですけど。やけに空気が、空気が怖いですけど・・・！！！！

「どつちが死んでも恨みっこ無しだ。」

「その台詞、そのまま返すわ。」

いつの間にか殺し合いになつとる！？

2人は拳を構えると、互いにゆっくりと相手に近づいていく。

いつの間にか話し声すら消え去っていて、その場には2人の移動する音しかしなくなった。

そして互いの間合いに相手を捕らえた時、二人は同時に動いていた。

2人は目にも止まらぬ勢いで攻撃を繰り返す。

『！？』

後ろで野次馬が驚いている雰囲気がある。

2人は剣野が香奈先輩へ右のミドルキックを、先輩が剣野の腹に掌

打を寸止めした状態で固まっていた。

2人は互いに笑みを浮かべるとゆっくりと互いに体勢を整え、すぐに再開する。

剣野の高速のラッシュを先輩が空手で覚えた「回し受け」という技で捌く。剣野は小技は効かないと気づいたらしく、ラッシュを止めて一発のスピードを上げる。

流石にこのスピードは捌ききれないと判断したのか、先輩はパンチを避けるようになる。

中々当たらないのにイラついてきたのか剣野の攻撃が粗くなっていく。

先輩の顎を狙った大振りの右を先輩が避けると剣野に小さい、けれど致命的な隙が出来た。

先輩がそれを逃す筈も無く、剣野のボディに先輩の一撃が決まる。

「ぐっ!!!」

これは効いたのだろう、剣野は体をくの字に折り動きを止める。先輩はそのまま追撃に入ろうと剣野に近づく。

その時、俺は見た。

剣野の顔に、獰猛な笑みが浮かんでいるのを。

先輩は止めを差そうと剣野に向かって必殺のバックハンドブロー、ようするに裏拳を繰り出す。

「これで終わりよ!!!」

誰もが先輩の勝利を確信した。・・・俺以外は。

「・・・ふ。」

剣野は薄く笑うと、ダメージを受けていたのが嘘のように香奈先輩の裏拳を避ける。

「!?!」

「戦闘で勝利を確信するのは相手を倒したときだけだ。覚えておけ。」

「そう、剣野の行動は全てこのための布石だったのだ。」

わざと攻撃を大振りにしていき、自分がわざと攻撃を受けて隙を見せて相手の大技を誘う。そしてそれを回避すれば・・・今のようになる。

「はあああ!?!?!」

剣野がお返しとばかりに先輩の腹に右の拳を叩きこむ。

「ぐぐう!?!?!」

先輩が後ろに吹き飛ぶ。かなりの威力だったのか膝をつくが、目はしっかりと剣野を睨んでいた。

剣野も追撃しようとはせず、拳を構えたまま様子を伺う。

「演技はやめておけ。当たる直前に後ろに飛んで威を殺したろう。」

「.....」

ゆっくりと立ち上がる香奈先輩。周囲は完全に入ったと思っていたらしく、かなり驚いていた。こんなのでいちいち驚くな。俺にはキチンと見えてたぞ。

「さっきの言葉は訂正しよう。君はかなり出来るようだ。」

「そつちこそ噂以上の強さね。正直、少し楽しいわ。」
「同感だ。」

2人がお互いを認め合っているようだ。しかし俺はあることに気づき、仕方なく止めに入ることにした。

「2人ともストップ。そこまでだ。」

「邪魔をするな。顔面を割るぞ。」

「そうですよ邪魔しないで下さい。」

「なんでこういうときは団結すんだよ!!!???」

俺は理不尽な2人の攻めに突っ込みつつ、2人を止めた理由を述べる。

「いや、そろそろHR始まるんだけど。」

「……え?」

キ~~~~ンコ~~~~ンカ~~~~ンコ~~~~ン

間の抜けた鐘の音ともに2人の呆けた表情を見比べ、俺は大きくため息をついた。

結局放課後また集まるということ場でその場はお開きとなった。
教室に着いた俺が担任にしばかれたのは、まあ余談だ。

第3話：飯の時間だー！！

飯は誰かと外で食うと一番美味くなる。

昼休み。

ようやく訪れた安息に俺は安堵しつつ、鞆から弁当を出す。この弁当は俺の手作りだ。

「おっす。今日はずいぶんと酷かったなあ。なんかあったか？」

俺が弁当を出すと同時に声をかけてきたのは俺の友人でクラス内でも有数のお調子者と言われている（実際そつだ）小野博史だ。

「・・・気にすんな。」

ホームルームでは時間に遅れたため担任の三上先生にしばかれ（出席簿の角は痛いんだよな・・・）、その後の授業では昨日あまり寝れなかったからか毎時間居眠りをしてしまい何度も怒られる羽目になった。

・・・もう疲れた・・・。早く飯食って昼寝でもしよ・・・。

「それより、お前あの噂知ってるか？」

「あの噂？」

嫌な予感がする・・・。

俺はそう思いつつも話を聞くことにした。

「何でもあの剣野に彼氏が出来たらしいぜ・・・って、どうした？
顔がすげえこわばってるぞ。」

「ナ、ナンデモナイヨ？」

「何で片言になってんだよ。」

もう噂になつとるー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！？？？

早ええよ畜生！！！ 部活のヤツらか？ 通りすがりか！？ まだ
俺だとはばれてないみたいだが・・・。

俺は内心の動揺を必死に殺しつつ（実は手が震えているのだが）弁
当を入れ物から取り出そうとする。

その時、教室のドアが勢い良く開かれた。・・・何故だ、何故ド
アが開くだけで皆の声が一斉に止まるんだ。何故俺は汗が止まらな
くなるんだ・・・！何故凄い勢いで小野が離れてくんだ・・・！！
俯いている俺の前に誰かが立っている。俺は誰だか分かりきってい
たが、現実を直視できないため、顔を上げようとはしなかった。

「一緒に食べるぞ。」

俺の前にいる剣野は無言を言わせぬ口調で告げた。

よし、脅迫が無かった！！ これなら・・・。

「ちなみに抵抗すれば処刑する。」

「一緒に食べましょいういや食べさせてください!!」(涙)

・・・無理でした。だって目がマジなんだよ・・・。

「そうと決まれば移動するぞ。」

「えっちよっ・・・。」

俺は突然襟首を掴まれ引きずられていく。慌てて弁当を取りながらクラスメイトに助けを求めようとしますが・・・、だめだ、あいつら写メとか撮ってやがる。何人かは「頑張れー!」とか「さようならー!」とかほざいてるし。・・・後で全員覚えてる。

そして俺は死刑台に連れて行かれる死刑囚の心境で引きずられていった。

数分後。

俺は学校の屋上に来ていた。(てか連れて来られた)屋上への扉には鍵が掛けられていたが、剣野は平然と扉を蹴り開けてしまった。・・・扉には足の跡がくつきりと残っていた。こええ・・・。

剣野は適当な場所に座ると自分の横を指で叩き、俺に座るよう無言で命令する。

俺はもはや吹っ切れた(ヤケクソとも言う)ため、直に座る。すると剣野は俺の前に自分の弁当を差し出してきた。・・・食えってことか？

「料理はしたことが無いからあまり自身が無いのだが・・・。」

・・・あれ、何か俯いて顔を赤くしてんだけど・・・。やべえ、可

愛い……。

俺は普段聞いている噂からは想像できないような剣野の可愛らしい行動に鼓動が早くなるのを実感しつつ剣野手作りの弁当を開ける。

……なんていうか、混沌カオス？ いやこれは地獄絵図か？

何か玉子焼きの色が紫だしウインナーが動いているしサラダから変な煙が出てるし米なんかやけに汁っぽいし……！！

俺は泣きそうになるのを堪えつつ剣野に尋ねる。

「え〜と剣野、これってどうやって作ったんだ？」

「普通に作ったが？」

「……味見つてした？」

「家族にしてもらったのだが何故か何も言わなかったんだ。だから大丈夫だろうと……。」

何でそこでそう思うんだよおおおおお！！ あと何で何も言わないんだよ！！ 頼むから止めておいてよお願いだからあ！！！！俺は心の中で叫びつつ、しかし剣野の厚意を無下にすることも出来ず、異様な雰囲気（微妙に殺気が漂ってるような……）を出し始めた弁当から玉子焼きを取り、意を決して口に運ぶ。

……すげえ味だ。

よくもまあ玉子焼きをこんなにも素晴らしい味にできるもんだな。ゲフ！

「……正直に言えば。」

「い、言えば？」

「コレ食って出直して来い。」

俺はバツサリと切り捨てて自分の弁当を渡し、残りを食べていく。

剣野は俺が差し出した弁当をしばらく持っていたが、やがて弁当を取り出し、食べ始めた。

「どうだ？」（う、ちょっと米がきついかな・・・？）

「・・・美味しいな・・・。」

「そいつは光栄だ。自分で作ったからな。」（何でウイナーが口
ん中で動いてんだ。）

「本当か!？」

剣野はえらく驚いていた。

俺の家族はよく出張とかでないの（昨日はたまたま休みだった）
自分で飯を作らなければいけないんだ。

「そうなのか・・・。」

「ああ・・・ごっそさん。」（く、サラダのとてつもない苦味
が、まだのこつとる・・・!）

俺はなんとか弁当を食べ切り（結局まともな味はしなかった）、空
の弁当箱を返す。

「・・・まずくなかったか？」

剣野が不安そうに聞いてくる。やめるそんな不安そうな顔をするな
可愛すぎだろこれはだめだ・・・。

俺は何とか彼女の誘惑に耐えつつ答える。

「別に食えないってわけじゃないし、わざわざ作ってきてくれたの
に残すのは失礼だろ。」

別に見栄やかっこつけではなく、本心から言っている。

昔から他人に対して失礼なことはいらないようにしてるんだ。数少な
い自慢だ。

「……ありがとう。」

剣野は少しだけ、多分心の底から笑っていた。

俺はそれを見て不覚にも、綺麗だと、そう思ってしまった。

あんなにも苦手に思っていたのに、俺は何を思ってたよ……。

心の中で毒づきつつ俺は携帯を見て、そろそろ放課が終わるのに気づいた。

「そろそろ放課終わるし、教室に戻ろうぜ。」

「む、そうか。仕方ないな……。」

流石に剣野も止めることは無く、俺達は教室に戻ろうとした。……だが安心するには早かった。

「待ちなさー……い……い……!!!!」

……香奈先輩が扉を吹き飛ばしてたよ……。

俺は迫り来る危機を（またはとばかりを）想像し肩をがっくりと落とした。

この後、俺は授業に行けなかったよ……。やっぱり騒動が起きちまってな……。

第3話：飯の時間だ！！（後書き）

作者：今回からあとがきで作中のキャラと話をしたいと思います。
じゃあ一番手はモテ男くんの鎖川くんです！！

鎖川：・・・もててねえよ。てか次ぜつてえ修羅場じゃねえか。

作者：まあまあ。この先もつと酷くなるんだし、気にすんな。

鎖川：・・・え、何で!?

作者：まだヒロイン増やすからな。2、3人くらいじゃ馬を出すから、頑張れ。（満面の笑み）

鎖川：ちよっ、ふざけんなよてめ、あ、おいどこに行くんだよ！！
頼むから戻ってこい、いや戻ってきてくださいお願いだから頼むからああああああ！！！！

作者：こんな作品ですがよろしくお願いしマース。（ペコリ）

第4話：変な奴が現れた。

昨日の敵は今日の友。

屋上。

えゝゝただいまワタクシの目の前には、目をきらんきらんに光らせた香奈先輩と、静かに殺気を伴っていく剣野がおります。・・・誰か助けてゝゝゝゝゝゝ！！！！！！

「あなた、こんなところで何をしてたの・・・？」

「別に？ 彼と一緒に昼食をとっていただけだが？」

「ぬあんですつてええええええ！！！！！！????」

剣野の一言で香奈先輩の背後に黒いオーラが出現する。

・・・やばいよ怖いよ逃げてえよでも逃げたら2人に殺される・・

俺はお化け(もっとこええよ・・・)に怯える子供みたいに震えながら立ちすくんでいた。

「それに私の手作り弁当を食べて貰ったし、代わりに彼の手作り弁当を食べさせてもらった。」

「ちよつ・・・何て羨ましいことを・・・。」

そこで先輩は俺を射殺さんばかりに睨んできた。

言いたいことは分かります。ですが睨むのは止めて・・・!!!

「零時くん!! 明日私にもお弁当作ってきなさい!!!」

「え、いや・・・。」

「何か!?!?!」

「分かりました・・・。」

俺昨日から自分の意見言えてねえよ。

自分でも情けなく思いつつ、俺は明日の献立をどうするか考える。

「ふん、自分では作ってこないのだな。」

「うるさいわね!!! 私は料理が苦手なのよ!!!」

先輩料理苦手だったんだ・・・。。 意外だ。何でも出来そうない

メージなのに・・・。。

さて、ここからどうなるかな・・・。。 そろそろ鐘が鳴ると思うん

だけど・・・。。

キ~~~~ンコ~~~~ンカ~~~~ンコ~~~~ン。

案の定授業のチャイムが鳴った。よっしゃあ!! これでなんとか。

・・・。

『しるわい』

2人は屋上に取り付けられているスピーカーカーを粉々に破壊した。

・・・ハイサボリ決定。そして俺は逃げられな〜い。(泣)

「丁度いい。ここで決着をつけるか。」

「望むところよ。今度こそあなたをこの世から消し去ってあげるわ。」

「その台詞、そっくりそのまま返そう。」

・・・やべえよ何か周囲に2人の闘気が渦巻いてるよ。

このままだと2人とも怪我じゃすまないし、あゝもう!!!
俺は2人を止めようといつの間にか必殺の間合いに近づいているのにも気づかず、無用心に突っ込んでいく。

「2人ともストツ・・・。」

これ以上は言えなかった。2人が渾身の一撃を繰り出し、俺は丁度それに挟まれる形になってしまった。

ああ・・・、俺死ぬのか・・・。

前後から来る即死攻撃に俺はもはや抵抗する気も起きなかった。

「フハハハハ!!! 待ちたまえ君達!!!!」

その時、突然何者かの声が響いた。俺はこの声に聞き覚えがあったので誰だかすぐに気づいた。

・・・めんどくさい人が来たな〜。

2人も突然の乱入者に動きを止め、ようやく2人は自分達の攻撃が俺に向いていたことに気づいたらしく、慌てて俺に近づいてくる。

「大丈夫!? 怪我は無い!?!」

「すまない・・・。私としたことが我を忘れて君に大変なことをしようとする。」

「いいよいいよ。別に怪我とかしなかったし。」（身体にはな。）
ていうか2人とも近いんですけど……。ほらなんか柔らかいもの
が両腕に当たってんだけど
そっぴいや2人ともスタイルいいって誰か言ってたような……。
俺が何とか青少年殺しの誘惑と戦っていると、忘れ去られていた男
がようやく動き出した。

「君達、そんな奴の心配よりこの私の傷ついた心の心配をべきゆあ。
」
男の言葉は剣野のローリングゴバット（顔面ヒット。）と香奈先輩
の正拳突き（やっぱり顔面）で強制的に終了した。……。死んだか？

「死んでない！！！」

俺の心を読んだのか謎の男……。西京高校用務員にして学校
一のナルシスト（または変態とも言う。）の鎖川さかわけんたろう健太郎が勢い良く
起き上がる。
しぶといな……。

「何してるんですか叔父さん。」
「なに、美少女が屋上で言い争いしていると聞いたのでな。つい
でにその原因でもある我が甥っ子の様子も見に来たのだ。」
「……。今日の晩飯作りませんよ……。」
「くっ、卑怯な……。そこにいる麗しき姫君達よ！！私にこの悪
魔を倒す力を分けてくれぶごお！！」

健太郎さんはさりげなく助力を請おうとしたが、まあ普通にぶちの
めされて終わりだった。

いい気味だ。

「知り合いなのか？」

「ああ、俺の父さんの弟で、たまに飯作らされるんだ。お陰で料理が出来るようになったんだ。・・・変人だけだな。」

「・・・そうみたいね。」

2人は下に転がっている隼太郎さんを汚い物でも見るかのような目で見ている。

「・・・すみませんフロー出来ません。だって何かもぞもぞ動いて気色悪いし、どうせすぐに復活するし（ちなみに生命力は台所に出る黒い帝王以上）。」

「・・・やれやれ、何だか気が抜けてしまったな・・・。」

「アタシも・・・。」

隼太郎さんの奇行により2人が矛を収めたようだ。良かったよホントに。じゃあ隼太郎さんもう帰っていいですよ。用済みなんで。

しかしこの人がこれで帰るはずもなく、さらに奇行をエスカレートさせる。

「大丈夫だよマイハニー!!! 私 SEKUSHI でビュリポーなデイナーで君達のハートを高ぶらせてあげよボオオ!!!」

突然脱ぎ始めた隼太郎さんに剣野が瞬時に近づき、ボディブローを叩き込み行動を中断させる。

そして体を折り曲げた隼太郎さんの両肩を香奈先輩ががっしりと掴み、自分を中心にして回し始める。

おおっと!?! 香奈選手凄いい回転です!!!! これは高得点の期待が掛かります!!!

ああつとついに手を離れたあああ！！！！ ボールは「ぎゃあああああああ！！！！」という叫び声を残してグラウンドに飛んでいく！！！！

ここで記録が出ましたあ！！！！ 記録は100メートル！！！！高得点です！！！！！！

アシストした剣野さんも額の汗を拭い「いい仕事をした。」と言っておられます！

落下地点には紅い花が見事に咲き乱れております。あつと客席のみなさん近づかないでください！！ 血が付きますよ！！ ああつ吐かないで下さいグラウンドが汚れます！！！！

「あなた、いいパンチだったわよ……。」

「そちらこそ素晴らしい投げだった。」

「……彼に迷惑をかけるのもアレだし、一時休戦にしましょ。」

「そうだな。恋敵と友情を育むのも悪くない。」

そう言つて2人は固い握手をする。……うん、2人が仲良くなるのは良い事のはずなのに、何で嫌な予感しかないんだろ……。俺は最強タッグの誕生にこの先の未来を想像してみる。

……俺の未来予想図は酷い目にしか遭つてなかった。(泣)
頭から最悪の未来を必死で消し去りつつ俺は2人にこれからどうするかを尋ねる。

「今は授業中だし、教室に戻るのも何だし……。」

「ならこのままサボってしまうか？」

「いいわねそれ。それじゃあサボっちゃいましょうか！！！！」

「いや俺は……。」

「何？」

「喜んでお供しましょう！！！！」

やっぱり俺には逆らうことは出来ないようだ（目がマジこええんだ
って!!）。

こうして俺は珍しく学校を逃亡^{フケ}することになった。

まあこの後ハプニングが起きるけどな。

第4話：変な奴が現れた。（後書き）

作者：今回も鎖川に来てもらいました！

鎖川：またかよ……。他の奴は出さないのかよ。

作者：女性陣はまだ全員出してないし、男性陣も少ない。お前に来てもらうしかないんだ。

鎖川：……。あそこの地面が盛り上がってんのはなんでだ？

作者：ああ、お前の叔父さんがあんまりにも「私を出せ！」とかうるさいから埋めといたんだ。

鎖川：もう生き返ってたのか！？ ミートソースみてーになってたんだぞ！！？

作者：大丈夫だ。きっちり止め刺しといたから。

鎖川：人の叔父に止めを刺すな！！

作者：それじゃあ今回はこの辺で。さいなら〜〜。

鎖川：待て逃げんなあ！！！！

第5話：突撃！！お宅訪問！

他人の家ってたまに変なものがあるよな。

鎖川零時視点。

俺は今臆太郎叔父さんの家に向かっている。

今町を出歩くとおまわりに見つかって補導されるだろうから、誰かの家に行くことになり何故か真っ先に俺のウチが上げられたのだ。無論言っただのは香奈先輩と剣野だ。すぐに抗議したのだが、

「別に2人の家でも……。」

「君の家がいいんだ。拒否権は無いぞ。」

「私もです。これは部長命令です。」

2人が物騒なオーラを出して脅迫してきたので抵抗できませんでした。……もう慣れたよ。

そこで俺は妥協案として週に3・4回は泊まりにいつている叔父さんの家を提案したのだ。

これには2人とも渋々ながら賛成してくれたので、俺達は叔父さんの家に向かうことになったのだ。

因みに2人の手によってミートソースみたいにされた叔父さんはあの後救急車で運ばれていった。・・・どうせ夜の7時ぐらいには帰ってくるだろうけど。

俺は玄関を開けると2人を招き入れた。

「どうぞ入ってくれ。」

「お邪魔します。」

「ここが鎖川の住んでいる家か・・・。」

「休日は親の家に帰ってるけどな。」

そんなことを話しながら2人は中に入ってくる。2人は家の中を物珍しそうに見ていたが、廊下に飾ってあるモノを見て目を丸くする。

「ねえ零時くん。あそこに飾ってある虎の頭は・・・。」

「ああ、あれ俺の父さんがお土産だつてどっかから持ってきたんだ。何故かその時は体中怪我してたけどな。」

「あそこにある牛みたいなの角の生えた頭骨は何なんだ・・・。」

「あれは俺がここに始めてきたときにはもうあったな。なんかどっかの珍しい動物のヤツらしいぜ。」

「あの絵さつきからこつちを見てるような気がするんだけど・・・。」

「怪しい奴以外には何もしないから大丈夫。」

廊下の様々な装飾品に2人が僅かに顔を引きつらせている。

まあ俺も始めて来たときはびびったしな。あの時は突然動き出す物もあつたけど、俺が泊まることが多くなってきたらいつの間にか無くなつてたよ。俺もすぐ慣れたし。

そうこうしている内にリビングに辿り着いた。俺はまず2人をソフ

アーに座らせ、何か飲み物を持ってくることにした。

「おい2人とも、何か飲みたい？」

「あ、じゃあ私コーヒー。」

「私はコーラを。」

「おっけー。」

俺は2人の要望を聞くと台所に向かっていった。

飯田香奈視点。

零時くんが台所に向かい、私こと飯田香奈と剣野さんはリビングで待つことになった。

「……………気まずい。」

剣野さんは何故か一言も喋ろうとせず、仕方ないので私から話を振ることにした。

「ねえ剣野さん。聞きたいと思ってたことがあるんだけど、いいかな？」

「……………なんだ？」

「どうして零時くんに告白したの？」

ずっと疑問に思っていたことだ。零時くんはあの反応からして剣野さんと面識は無いのだろうし、どうして彼だったのか、全然理由が思いつかないのだ。

「……………聞きたいか？」

「すんごく。」

剣野さんはちらりと零時くんがいるであろう台所を見ると、とても楽しそうな笑みを浮かべた。

「秘密だ。」

「ええ〜〜?」

私はとても残念でたまらず、何とか聞きだそうと声をかけようとする。

「この野郎早く逃げやあー！ー！ー！！！」

突然台所から零時くんの大声がした。私と剣野さんはびっくりしながらも急いで零時くんの元に駆けつける。

零時くんは、台所のコンロの上に乗っている汁の入ったお鍋から二本の足が出ており、それが外に出ようとするのをお鍋のふたで阻止していた。

私は剣野さんと目を合わせ、多分おんなじことを考えたと思う。

・・・何コレ？

「あ〜〜ちよつとそこにあるスタンガン取って！！！」

零時くんは私たち2人に気づいて助けを求める。

「あ、ああ分かった。」

剣野さんが困惑しつつも置かれていたスタンガンを手渡す。

何で台所にスタンガンがあるの!?

「死ねオラア！！！」

零時くんは渡してもらったスタンガンを容赦なくお鍋に突っ込んで電源を入れた。

お鍋のなかに電流が走ると2本の足が凄い勢いで痙攣して、ぶくぶくと泡を出しながら沈んでいった。

「ハア、ハア、畜生疲れた……。」

「い、今の何……？」

「叔父さんの特製スペシャルスープ。」

「コレを飲んでいいのか!？」

「叔父さんだけな。俺は一度飲んだことあるけど、次の日生死の境を彷徨ったよ……。」

零時くんはお鍋に蓋をしてガムテープできっちり封印していく。
・あ、今「封」って書かれてる御札貼った。うん、これは正しい判断だよ。こんな最終兵器一刻も早く処分するべきだよ……。

「何で犬神家の一族みたいになつてたんだ？」

「あんなのまだマシだぞ。明日には河童とかサラマンダーとかイヤンクックとか出てくるから。」

「いや最後のは大きさに無理だろう。」

それ以外も普通無理だと思っただけ……。

結局零時くんは「封」と書かれた御札が貼られたお鍋を台所の奥に持っ^{デンジャー}ていき、「DANGER」と書かれた箱にそのまま入れてしまった。

「これでよし、と。」

零時くんはそのまま何事も無かったかのように飲み物を用意し始めた。
私たち2人はリビングに戻りました。・・・うん、色々聞きたいことはあったよ？でも何だかこわくて聞けなかった・・・。

鎖川零時視点。

俺は2人に要望通りの飲み物を配ると俺は自分の分のコーラを飲んだ。

「それで、何して遊ぶ？ 悪いけど俺ん家ゲームぐらいしか無いぞ。」

「むう・・・、私はTVゲームなんてしたことがないんだ。」

「それじゃあゲームはダメか・・・。」

なんとなく予想してたけど、ウチに来てもやることねーや。どうすっかな・・・。

「じゃあ何か意見のある人手挙げて。」

「はい。」

「はい香奈先輩。」

「カルタ大会なんてどうかな？ 剣野さんだってやれるだろうし。」

俺は何となく3人でカルタをやっているところを想像する。

「……やめよう。途中で2人がデッドヒートして床や壁や俺の手に甚大な被害が出ているのがリアルに浮かんできた。」

「カルタも無し。なんかやばいことになりそうだ。」
「む〜〜〜」

先輩が思いつきり不満そうにほっぺを膨らませた。あかんかわええわ……。

俺はなんとなく先輩のほっぺをつついてみる。先輩は少し驚いたようだが、すぐに幸せそうな表情で「えへへ……。」と呟いた。なんか癒される……。

「……いいな……。」

剣野が何かを呟いたようだが、俺には小さくてよく聞こえなかった。俺が聞き返しても「……何でもない。」と言っただけだった。心なしか少しふてくされていているような気がした。俺何かしたか？あいつはよく分からねえな。

「剣野は何かないか？」

もうこの時点で俺は剣野に偏見をもってはおらず、普通に話すことが出来た。

剣野は少し考え込むと、おもむろに答えた。

「トランプなんかどうだ？」

トランプか……。あまり荒事が起きる心配は無いし、この人数でもそれなりに楽しめるからな、トランプで良いか。

「よし、それで決定だ。」

「うん、それならいいかも。」

香奈先輩も賛成し、俺は早速トランプを持ってきてやることになった。

第5話：突撃！！お宅訪問！（後書き）

作者：ふ〜〜う何とか書けたか。

鎖川：なんか今回変な所で切ったな。

作者：いや、今回はなんか書けないというか、アイデアがこれ以上浮かばないんだ。

鎖川：もうネタ切れか？

作者：言わないでくれ！！

鎖川：どうでもいいが早く更新しろよ。でないとおそこの部屋にいる剣野とか先輩に殺られることになりかねん。

作者：・・・善処します。（ガタガタ）

第6話：ギャンブルは危険です。

トランプって修学旅行とかに一番役に立つよな。

零時視点。

俺は家の中を探してなんとかトランプを見つけてきた。
とりあえずなにをやるかな。俺は結構種類知ってるけど、知らない人ってほとんど知らねえんだよな……。
2人に何を知ってるか聞いて見た。

「私はそうだな……、大貧民にスピードは知っている。後はブラックジャックとポーカーぐらいか……。」
「私は剣野さんが言ったものの他に、7並べや豚の尻尾なんかも知ってるわよ。」

俺は2人が知っているものの中からやることにした。
うーん大貧民やるには人数が少ない気がするし、スピードは2人しか出来ないし、となるとポーカーかブラックジャックのどっちか……。
……ポーカーにするか。

「よし、じゃあポーカーをやろうぜ。」

「分かった。」

「いいよ〜。」

俺はトランプをよく切ると、2人に手札を配る。

ルールは俺が家に貯めてあった1円玉を1人30枚手持ちとし、1円玉が無くなった奴の負けというふうになった。

大体の準備が整うと、剣野がとんでもないことを言い出した。

「罰ゲームはどうするのだ？」

罰ゲーム！？ そんなのあんの!?

俺はそんなことは全然考えていなかったのだから驚いた。
てか剣野、そんなの先輩が許すと思ってるのか？

「じゃあ負けたら零時くんには2度と近づかないってゆうのはどうですか？」

「・・・なんだと？」

許しちゃった!!! ていうか火に油を注いでるやん!?

「あれ、もしかして私に勝つ自信無いんですか？」

「・・・いいだろう。貴様を永久に追放して彼を完全に私のモノにしてやる。」

ああっ、なんか俺の意思とは無関係に進んでくし、また2人から殺気が漏れ始めてるし、ってかこれだと俺には何のメリットも無いしさー！ー！ー!!!

「待った待った!!! それなら逆にしよーぜ!!!」

「……逆？」

「ああ。1、2時間程やって一番1円玉が多かった奴が一個だけ何でも命令できる。これならいいだろ!!!？」

俺の言った一言に2人の動きが止まる。

アレ？ 何だか2人とも邪悪な笑みを浮かべてるぞ？ 背後から欲望のオーラが出てるし、なんか怖いんだけど……。

しかし今から前言撤回すれば2人に殺されそうだからやめることもできそうにないなあ……。

俺は始まる前から不安を覚えつつ、ポーカーを開始した。

「じゃあ私が配るね。」

香奈先輩はそう言って俺からランプを奪い、きちんとシャッフルした後カードを俺、剣野、香奈先輩という風に配っていく。

俺は何気なく先輩が配るのを見ていたが、先輩が4枚目の自分カードを配ろうとしたとき不意にあることに気づき配るのを止めさせる。

「先輩、ちよつと待った。」

俺に突然止められ、先輩は体を「ビクッ!!!」と震わせ、明らかに動揺している声を出した。

「ど、どうしたの零時くん？」

「……今セカンドデイルしたでしょ……。」

セカンドデイルとは、山札の一番上のカードを配るように見せかけてその下のカードを配るテクニク。自分に来るカードを操作できる。もちろんイカサマ。

「そ、そんなことしてないよ？」
「……………」

俺は無言で先輩のカードをめくる。役はキングの4カードだった……。

ダメだ、この人は確実にカードの順番を覚えている。でなきゃこんなマネできっこねえ。

俺は先輩からトランプを奪い取った。

「……………今回は見逃しますけど、次イカサマやったら承知しませんよ。」

「……………はい……………」

俺は先輩に釘を刺すとカードを配ろうとするが、今度は剣野に取られてしまった。

「代わりに私がやろう。」

「……………お前が隠し持つてる予備のトランプを出したらな。」

剣野が先程の先輩と同じ反応をする。

お前が何かあったときのために持ってきた予備のトランプをさりげなく持つていつているのを俺は知ってるんだぞ。

俺が横目で睨むと剣野はゆっくりとトランプを取り出し俺に手渡す。

「……………次は無いからな。」

俺が低い声で脅すと剣野はコクリと頷いた。

……………何で2人もイカサマすんのかな？言っとくけど俺そいうのは絶対見逃さないから。何故なら俺がきちんとやってんのに他人が楽とかしてんの見るとむかつくから。

「甘いよ零時くん。こういうときはゲームから下ろすぐらいしなきゃ。」

「……じゃあ先輩も下りるってことでいいんですか？」

調子に乗り始めた先輩にもう一度釘を刺し、先輩が静かになったところようやくトランプを配る。1人5枚ずつ配ると山札を置き、それぞれのカードを見る。

俺の手札は……やべえ、速攻でブタかよ。

他の2人を見ると、2人ともカードを見て考え込んでいた。イカサマをしている様子は無く、俺はカードを3枚替え、何とか2ペアにすると1円玉を2枚置きコールをすると2人の様子を見守る。

「……2枚チェンジ。」

剣野がそう言ってカードを替える。剣野は俺と同じく1円玉を2枚置くとコールして終わる。

「1枚チェンジ。」

香奈先輩もカードを替え1円玉を2枚置くとコールした。

「それじゃ……。」

「待った。」

俺が勝負をしようとしたとき、先輩が突然待ったをかけた。何だ？コールをした後だからもうカードは替えられないし、なにかあるのか？

「あの言葉を聞いてないわ。」

「は？ あの言葉？」

なんのことだ・・・？ ！？まさか・・・あれか！？ ジョ ヨで使われたあの言葉か！？ やだよ俺は！

「・・・魂を賭けよう。」

あれえ！？ 剣野さんたら言っちゃったよお！？ もう少し躊躇おうよ自分の魂賭けるんだよ！？ 負けたら魂取られてコインか人形になるんだよって何で危険度が上がってんだ！？ 下手したら死人が出るようなことになってんじゃん！！

・・・あれ？ 何で2人して俺を見てるの？

・・・もしかして俺も言うの！？ やだよ魂なんて賭けたくねえよ！！ なに2人して「ノリ悪いなあ。」みたいな顔してんの！？ ノリで自分の命賭けたくないぞ俺は！！

その後しばらく俺は2人と無言で睨みあいをしていたが、結局剣野が拳で脅しをかけてきたので仕方なく言った。

「・・・魂を賭けよう。」

『ケツ下GOOD！！！！！！』

うるせえ！！ なんで2人して満面の笑みで言うんだよ！！ お前らはービー兄弟かよ！！

こうして賞品が命令権から魂に変わり、俺は早くもポーカーを選んだのを後悔しつつ手札を広げた。

・・・どうか無事に終わりますように・・・。

香奈視点。

うっ、あんまり差が広がらないなあ。

ポーカーを開始してから1時間。互いの1円玉の数はほとんど変わらず、一進一退の攻防が続いていた。

剣野さんは元々こういうのが得意なのか私よりも少し多い36枚。

零時くんは一度無くなりそうになったんだけど、そこから奇跡の追い上げを見せたのだ。

今は私より少ない22枚。

私と剣野さんは何度かイカサマをしようとしたけれど、零時くんがことごとくそれを見破ってしまうので、イカサマは出来なくなってしまうた。

「そろそろ終わりにしないか？」

剣野さんの提案に私は賛成した。いい加減この状況に飽きていたのだ。

零時くんが反論したけど、私と剣野さんとで睨みつけると渋々引き下がった。

最後の勝負は誰にでもチャンスがあるよう6枚から賭けていくことになり、零時くんにもチャンスが巡ってくるようになった。私としては零時くんまで気にしないといけないからメンドイんだけどなあ……。零時くんはブタが回ってくれないかなあ……。

「今なんかひどいこと考えてませんでした!？」

「考えてないよ。」

危ない危ない。零時くんてこういうのには鋭かったんだっけ。忘れてた。

その後、3人とも一通りコールするとその場に緊張が訪れた。この勝負で全てが決まるから、自然とこうなっちゃうのよ。

・・・でも零時くんは顔を抑えて「もうダメだ・・・」ってずっと言ってるけどね。

そして、決戦の時が来た。

皆で一斉に手札を見せる。零時くんは私の願いが通じたのかブタ。

私は土壇場の強運で4カード。もう勝利を確信していた。

勝ち誇った表情で剣野さんの手札を見ると・・・。

『5カード！？』

私と零時くんの声が見事に八モった。何故なら剣野さんの手札はポーカーでも一番出すのが難しいとされる5カードだったのだ。

口を開けて呆然としている私たち2人を見て、剣野さんが苦笑しつつ勝因を語る。

「私は昔からこいつに好かれていてな。」

そう言っつて剣野さんは「ジョーカー」のカードを手取る。ピエロの絵が描かれたそれがいつもより腹立たしく見えた私はなんとなく隣でまだ呆然としてる零時くんを殴った。気持ち強めに。

「いったあ！！　ちょ、何で俺殴られたんですか！？」

「気分よ。」

「いくら先輩でもそれは・・・分かりましたからもう一回殴ろうとしないでください！！」

零時視点。

俺は何とか先輩の横暴を止めると、剣野に向き合った。

「私の勝ち……。ということとは……。」

「ああ、何でも命令できる。流石に何回も出来るわけじゃないが……、まあ1回ぐらいだろうが妥当かな。」

俺の言葉に剣野は何を言うかしばらく迷った後、少し顔を赤くしながら口を開く。

「よし、決めたぞ。」

「ん、何だ。」

俺が内心どんなことを言われるかビクビクしていると、剣野は俺の予想をやはり裏切ってくれた。

「今度の休日私とデートしてくれ。」

……デートですか？

俺はあまりの衝撃にもはや二の句が告げれなかった。それと先輩、俺の腕を掴むのは止めてくれ。あんたの握力が凄すぎて俺の腕が壊れそうだ。

「……嫌か？」

くっ、そんな上目使いで俺を見るな。そんな目をされたら何も言えないだろうが。

そして先輩。爪を立てるのは勘弁してくれ。かなり痛い。

「・・・分かった。」

俺は香奈先輩を腕から剥がしつつそれだけ言うと、剣野はとても嬉しそうな笑みを浮かべた。俺って笑顔に弱いんだな・・・。
俺は顔が紅潮するのを自覚し、それを剣野に見られないよう先輩の方を向くと・・・。

「れ・い・じ・く~~~~ん？」

ギヤアアアアアアアアアア！！ コノヒトダレデスカ！？ 俺の知ってる先輩は背中にスタンドみたいなを着けてないですもん！！
後ろに黒いオーラなんて・・・これは出してた。

「あ、あの先輩？」

「い、一体どうしたのだ？」

この光景を見て怯えた剣野が俺の背中に隠れる。っておい！俺の服を掴むんじゃない！！

「こついうときに可愛くなるな~~~~~~~~!!!!!!」

先輩が意味不明の叫び声を上げて襲い掛かってきた。

「お、おい逃げるぞ剣野・・・!？」

先輩と互角に張り合える筈の剣野は俺の後ろであまりの恐怖に気絶していた。

なんでこんなときに気絶するんだよお!!!!!! 俺これじゃあ逃げらんねえよ!!!!!!

「ちくしょお!!!!」

俺は半泣きになりつつ襲ってくる先輩へと立ち向かっていった……。

ああ……、涙が止まらない……。

その後1時間死闘を繰り広げた俺と先輩は、俺の延髄蹴りが決まりなんとか先輩を気絶させたことにより終わりを告げた。

……家の中は凄まじいまでの荒れようで、剣野はまだ目を覚まさないため1人で片付ける羽目になったけどな!!

第6話：ギャンブルは危険です。（後書き）

作者：・・・なんで俺はここにいるんだ？

鎖川：片付けを手伝ってもらったためだ。

作者：やだよ！自分家なんだから自分でやれよ！！

鎖川：うるせえ！！物が多すぎんだからしょうがないだろ！？早く手伝わねえとあの鍋食わずぞ！！！！

作者：ギヤアアアア！！ やめて持ってこないでええええ！！

分かった手伝うから蓋開けようとしなくてえええ！！ 早く捨ててええええ！！！！

しばらく言い争いながら片付けをする作者と零時。

作者：まったく、なんで臆太郎はこんな物作ったんだよ。

鎖川：知るか。・・・でも叔父さんは平気で飲むんだよなあ・・・。

作者：イヤンクツクとか出てくんだぞ！？

鎖川：お前そのネタ友人に駄目出しされたる・・・。

作者：言わないで！！！！

鎖川：・・・ん？ おい、鍋の蓋が開いてるぞ。

作者：あれ、ホントだ。零時、ちゃんと蓋したのか？

鎖川：したよ！ ちゃんと札だつて貼つ・・・た・・・。

作者：アレ？なんでこつち見たら語尾小さくなってるの？ アレ？

肩を誰かに掴まれてる？ねえ、この人ダレ？ダレなの？

鎖川：・・・すまん。

作者：ちよつとおお！？ 俺はお鍋なんかにはいないってえええ！！

！ 誰か助けてえ！！！！

鍋の中に引きずり込まれる作者。

完全に吸い込まれた後、蓋を閉めて外に放り投げる零時。

鎖川：・・・さて、続けるか。

作者：どこだよここお！？ 何か凄い気配を感じるんだけど何で！
？ 暗いよ！ 怖いよ！ ヘルプミ~~~~~！！！！！！

第7話：突撃！隣の晩御飯！（前編）

剣野視点。

「う、ううん……。」

あれ、私は何でソファで寝ているのだ？

私は寝起きで頭が働かず、ここがどこで何故ここにいるのかも分からず内心かなり焦っていると、台所からいい匂いがしてきた。

い、いかん。口から涎が出てきそうだ……！

私が食欲と必死に戦っていると、台所から鎖川が出てきた。

「お、やっと起きたか。」

そうだ、私は鎖川の叔父さんの家に来てトランプをして、その後怒り出した香奈さんのあまりの迫力に気絶してしまったのだ。

わ、私は彼の前でなんて恥ずかしいことを……！！ ああくそ、さっきの私を殺さなきゃ、いや彼の記憶から消えればいいんだし、彼の記憶を飛ばせば……！！

「……何考えてるか知らんが、やめるよ。」

……何も言っていないのに感づかれた。なんで彼はこういうときだけ鋭いのだろうか。

私は不思議に思いつつ、何気無く横を見ると……。

「すっ、すっ……。」

……先程鬼のような迫力を出していた香奈さんが少し離れた場所

のソファで眠っていた。私はすぐに起き上がると台所に向かおうと
していた鎖川の後についていく。
鎖川は私を見ると、泣いている子供をあやすような優しい声で喋り
だす。

「大丈夫だつて。今は疲れてぐっすり寝てるし、多分起きたら謝る
だけだろーし。」

「む、無理だ！！ さっきのことが頭から離れないんだ！！ 頼む
見捨てないでくれ！！」

私は鎖川にしがみつく。

この人と2人きりだなんて無理だ！！ライオンと添い寝するような
ものなんだぞ！！

なんとか鎖川を説得し、私は彼と一緒に台所に向かった。

「あれ・・・、鎖川、この鍋なんでここにあるんだ？」

私は台所の入り口の床に置かれた「封」と書かれた御札の貼られた
お鍋を発見した。

確か鍋ごとゴミ箱に捨てられたはずでは・・・。しかも何故か小刻
みに動いている・・・。

「・・・。」

鎖川は無言で鍋を掴むと先程と同じ箱に鍋を入れ、箱に付けられた
スイッチを押した。

スイッチを押すと箱の中から駆動音らしきものが発せられ、何かの
叫び声も聞こえてきた。

「なあ、この声は一体・・・。」

「・・・気にしたら負けだぞ。」

それ以上は何を聞いても答えられなかった。
・・・私が気絶している間に一体何が・・・。

台所ではシチューが作られていて、既にいい感じに煮えていた。
しかし、何故シチューなんだ？もっと簡単なものを作ればいいのに・・・。

「今日は人数が多いからシチューにしたんだ。」

「？この後誰か来るのか？」

「お前らのことだよ。」

鎖川はそう言っただけでリビングの時計を指差す。

今は・・・6時12分!?

「もうこんな時間なのか!？」

「お前ら揺すつても何しても起きなかつたんだ。それで仕方なく寝かしてたらこんな時間になったんだよ。」

鎖川は特に気にしてないらしく、食器棚からお皿を出していた。

・・・寝ている間に何をやられたんだろうか・・・。

「しかし、迷惑をかけた上にご飯までご馳走になるのは・・・。」

「・・・その場合あそこで寝てる百獣の女王かなせんばいを起こしてもらおうぞ。」
「喜んでご馳走になります。」

私はすぐに降参した。・・・仕方ないだろう!!! もはやトラウ

マになっているんだ!!

零時視点。

ピピピピピピピピピピピピピピピピピポ〜ン。

俺はそろそろコンロの火を消そうとしたとき、チャイムがかなりの連打をされた。

・・・このアホみたいなチャイムの鳴らし方は・・・あいつか。

「・・・何だコレは？」

「・・・あるバカは来たとき絶対にこの鳴らし方をするんだ。」

俺は先程シチューに入れたジャガイモを炒めるときに使ったフライパンを持って玄関に向かった。フライパンはまだ高温を維持している。

・・・コレが必要な理由？ それは玄関にいるバカを懲らしめるためさ。

ピ〜ンピ〜ンピ〜ンピ〜ンポ〜ン。

・・・ウン。ぶっ殺そう。

「お、落ち着け！ そんな満面の笑みでフライパンを構えてはダメだ!!--!」

剣野は俺からフライパンを奪い取った。・・・仕方ない、剣野に免じて半殺しにしとくか。
俺は玄関を開けた。

「おせえよ零時〜。もつと早く開けるよ〜。」

「おい零時。なんで剣野がいるんだコラ？ アタシの許可も取らずに不純異性交遊か？」

扉の前に居たのは俺の友人の小野と、担任にしてお隣さんでもある三上可憐先生みかみかれんだった。

先生は叔父さんの家の隣に住んでいて、叔父さんの飲み友達だ。よくウチに飲みに来たり、俺に飯を作らせにきたりしているのでかなり親しいんだが・・・。

「先生、この時間だとまだ学校に居るんじゃない・・・。」

俺の言葉は先生のアイアンクローで強制的に中断することになった。先生はヤクザのような迫力を放ちつつ俺のこめかみを破壊しようとする。

・・・てか痛い痛い！！！！ 頭が、頭が割れる！！！！！！

「アタシが何しようが別にいいだろ？ アア？」

「も、もつともです！！！！ 俺が悪かったですから放してくれええええええ！！！！」

俺はこめかみにかかるあまりの力に俺は叫び声を上げた。ヤバイ、なんか川みたいなの見えてきた・・・！！

俺が軽く臨死体験をしていると、先生がようやく開放してくれた。

「だ、大丈夫か？」

剣野が床に崩れ落ちていると、剣野が心配してくれた。
あんなに怖いイメージがあったのに、今じゃ一番いい奴に見えるよ。
。。。

「大丈夫だって。コイツはいつでも先生にいじられてるから。」

俺の代わりに小野が喋りやがった。コイツには飯はやらん。

俺は小野への仕返しを考えていると、先生が鞆を投げてきた。

。。。あれ、これって俺の鞆じゃ。。。。

「アンタが忘れてったから届けるために早く帰ってきたんだよ。」

「え、マジですか？」

俺は屋上から直接下校したため、教室に鞆を忘れていったのだ。

剣野は置き勉をしているので鞆は滅多に持ってこないらしく、先輩は部屋に置いていたため2人は気にしてなかったのだ。

俺も明日取りに行けばいいと思っていたのだが。。。

「先生わざわざありがとうございます。」

俺はわざわざ学校を早く出でまで鞆を持ってきてくれた先生に感謝をすると、先生は豪快な笑い声を上げた。皆に「姉さん」というあだ名を付けられる原因となった笑い方だ。

。。。まあその通りの性格なんだがな。

「気にすんな。アタシもとっとと帰りたかったし、アンタの飯も食いたかったしね。」

前言撤回。この人は唯の面倒くさがりだ。しかも今日は飯を食いに来てる。シチュー多く作つといて良かったよ。

「ほら、早く中に入れな。アタシは腹が減ってしょうがないんだ。」
「俺も俺も〜。」

そう言うと2人はまるで我が家のように普通に家の中に入っていく。俺はため息をつくと剣野を伴って2人の後を追った。

「アレ！？何で飯田先輩がここで寝てんだよ!?!」

リビングに入ってすぐ小野がソファで気持ちよさそうな顔で寝ている香奈先輩を見つけて騒ぎ出す。やめろ、気持ちよさそうに寝てんだから騒ぐな。

剣野は先輩が起きるのではないかと思っっているらしく、俺の背中に隠れて怯えていた。

「先輩の寝顔ゲットお!!」

そんな事をほざきつつ写メを撮っている小野に段々イラついている人がいた。

俺と先生。

『うぜえぞバカ。』

俺と先生は同時に動き、先生が小野をネックハンキングツリー（相手の首を掴んで持ち上げて苦しめるプロレス技）をかまし、俺は小野の携帯を奪って思い切りへし折った。

「ぐお、いきなり何を・・・。」

『ウザイからなんとなく。』
「それひどい……。」

かすかに意識が薄れている小野が精一杯の反論をしたが、そんなんで先生が放すわけねえだろ？

俺は小野の処分を先生に任せ、2度と動かなくなった携帯の残骸をゴミ箱に捨て先輩を起こすことにした。

「先輩、起きてください。飯ですよ。」

「……ふにゆう。」

「起きてください！！！」

「みゆう……。」

揺すってみても大声で怒鳴っても先輩は可愛らしい声を出さずだけで一向に起きる気配はなかった。

「むう、起きないな……。」

「早くしないとシチューが冷めちゃうんだが……。」

俺と剣野がどうすれば起きるのか頭を悩ませていると、先生が顔が蒼白を通り越して白くなっている小野を捨ててこっちに来た。

床に下ろされた小野は身動き一つしなかった。なんか口から白いモノが出てるけど、いいか、こいつもそう簡単には死なないし。

「なんだ、まだ起きないのか。」

「何やっても起きないのですが……。」

「しょうがねえなあ……。」

先生は香奈先輩に近づくと、彼女の耳に何かを囁いた。

「ひゃあああああああ！！！」

すると、何をやっても起きなかつた先輩が、勢い良く起き上がった。

「あ、起きた。」

「はえ？ あれ、ここは？」

「私が起きたときと同じ反応だな。」

剣野が苦笑する。先輩はまだ寝ぼけていたが、後ろから肩を叩かれそちらを向くと、体を硬直させ、しばらくすると震え始めた。後ろにいたのは三上先生だった。

「人様の家でグースカ寝るなんていい度胸してるなあ？飯田？」

「……」

「いや先生もここで酔いつぶれては泊まっていけくじや……いえ何でもありません。だからアイアンクローをやめてください。」

俺は頭蓋骨を破壊される前に謝り、何とか小野の二の舞にならずにすんだ。

香奈先輩は先生と一切目を合わせようとせず、しかし先生は何故か香奈先輩にちよっかいを出していく。

香奈先輩は何故か先生に頭が上がらず、お陰で出会ったたびに先生におもちゃにされている。どうやら俺が部活に入った直後に何かあったらしいのだが、詳しいことは知らなかった。

「そんな悪い子には、零時に秘密をばらす刑に処する。」

「！？そ、それだけはダメです！！」

「いいじゃんいいじゃん減るもんじゃないし。」

「私の心が磨り減るんです！！！！！！」

2人の言い争いは終わりそうにないので、俺はため息をつきつつシチューの入った鍋を取りに台所へと向かった。

ちなみに小野はシチューの入った皿を前に置いたら復活した。

第7話：突撃！隣の晩御飯！（前編）（後書き）

鎖川：今回は作者が行方不明になってしまったので、俺と小野で話をすることになった。

小野：イエ〜〜イ！！ようやく出番が来たぜ！！

鎖川：扱いはアレだがな……。

小野：……じ、次回にはもっとマシな……。

？：（それは無いな。）

鎖川：！？この声は作者か！？

作者：（その通り！この俺がそう簡単にくたばると思ったのか！？）

鎖川：しかしどうやって……。

小野：なあ、なんで姿が見えないんだ？

作者：（実はあの鍋は別の次元に通じていたらしくてな。俺はもう3つの世界をワープしているんだ。今こっちの世界で友人になった人に頼んで声だけを行き来できるようにしてもらってる。）

小野：まじかよ！？

鎖川：つーか別次元に通じたのかあの鍋……。

作者：（まあ、色々な体験をしてるから、退屈はしないんだけどな。）

鎖川：時空旅行を満喫してんじゃねーか。

作者：（次回には戻れるだろうから、それまでよろしく〜。）

小野：消えたみたいだな……。

鎖川：……今度叔父さんが特製ジュース作るうとしたら全力で止めさせよう……。

第8話：突撃！隣の晩御飯！（後編）

零時視点。

午後7時。俺の作ったシチューは好評で、先輩にいたってはおかわりを何度もしたほどだった。途中小野が「ハヤシライスの方が良かったな。」などとほざいたため、鼻からタバスコを入れる刑を執行した。

鼻を押さえて床を転げまわる小野を見て全員が爆笑し、家の中に和やかな雰囲気満ちていたその時、三上先生がついに動いた。

「おゝし、そんじゃそろそろ飲むかゝゝゝ！！」

その一言に、俺は背筋が凍りついた。何でかって？三上先生は酔うととてつもなくやばいからさ！

俺がフリーズしている間に、先生は冷蔵庫にあった缶ビールをありっただけ持つてくる。

「ほら、アンタ達も飲みな！！」

先生はビールを香奈先輩や小野、剣野に投げ渡していく。いやあんだ先生なのに飲ませんなよ！！

「私、飲んだこと無いんですけど・・・。」

「んなこと知るか！！ いいから飲むんだよ！！」

「1番小野、いつきまーす！！！！」

「いい飲みっぷりだぞ軍曹！！」

小野がビールを一気飲みし、先生がはやし立てる。もはや收拾不可

・・・誰か止めて下さい。正直怖いんです。
先生と小野も悲惨なことになっていた。

「オラ飲めつつってんだろ。早く飲めよ。」

「む、無理。吐く・・・ウエツ。」

「アタシの酒が飲めねえってのか？アア？」

・・・完全にからみ酒だ。

小野は少し酒が強いだけなのに調子に乗ったのが悪かった。先生の酒の強さは底なしなのだ。段々と増えていくビールに降参しようとしたが、先生が逃げようとした小野の肩をがっしりと掴み、凄みをきかせた笑みを浮かべて「逃げたら殺す。」と無言のまま告げていた。

・・・無論小野には逃げる勇氣など無く、こうして今日で2度目の顔面蒼白になっていた。

「なんと言うか・・・凄いな・・・。」

「・・・今日は叔父さんがいないだけマシさ。あの人がいたら・・・
・・・言葉では言い表せないほどだ。」

俺が搾り出すように言うと、剣野は黙ってしまった。いやだって俺はいつつもアレに巻き込まれてるんだぜ？ いつの間にか知らない人が一緒になって飲んでるし、リビングにいくつもゲロがあるし、次の日俺が全部片付けるんだぜ？・・・最悪なんだよ・・・。

「おゝいお前ら、何アタシをほっぽって楽しそうに話してんだ？」

「おい、こつちに絡んできたぞ・・・。」

「諦めろ。逃げたら殺されかねん・・・。」

俺は逃げようと考えているであろう剣野に釘を刺しておく、もはや逃げるのを完全に諦めてビールを手取る。

「ほらほらぐいっといけぐいっど。」

「飲むしかないのか……。」

剣野が血でも吐きそうな声で何か言っているが、人間諦めが肝心だぞ？

俺の考えていることが分かったのか、助けを請うような目でこちらを見てくる。……すまん、俺では無理だ。諦めて一緒に逝こつぜ。

俺と剣野は同時にため息をつく、ビールを口に付けた。

午後10時。

俺は俗に言うお姫様抱っこで香奈先輩を1階の客間にまで運び、先に敷いていた布団に先輩を寝かせると、横で寝ている三上先生が布団を蹴飛ばしていたので直しておく、部屋から出た。部屋から出ると、リビングで片付けをしていた剣野がこちらに来ていた。

「ふあ~~~~。・・・先輩で最後か？」

「ああ。こちらも終わったぞ。中々ハードだった。」

眠そうに目を擦る剣野。

先生に絡まれた後、俺はこっそり家にあつた睡眠薬をビールに混ぜて飲ませ先生を強制的に眠らすことに成功した。・・・睡眠薬を見つめるまでに俺と剣野は1人10本近くは飲まされたけどな。お陰で2人ともフラフラの状態の後片付けに入ったよ・・・。

「この埋め合わせはきちんとしてもらうぞ・・・。」

「ああ、分かってるよ。」

・・・休日が来るのが段々怖くなってきた。

俺は生まれて初めて休日が来てほしくないと思った。

「・・・ドタキャンは許さんぞ・・・。」

「・・・ハイ。」

・・・思考を読まれたらしい。俺にはプライバシーは存在しないのか？

「それじゃあお休み・・・。」

「待て。」

俺はそろそろ睡魔が本格的に襲ってきたので自分の部屋に行こうとしたが、剣野が服の袖を掴んできた。

「なんだ？ もう眠いから寝たいんだけど・・・。」

「少しだけでいい。話をしたいんだ。」

俺は剣野の目を見る。その目はいつになく真剣で、ここで断るのは不可能だった。

剣野と俺はリビングから庭に出て、庭に置いてある椅子に座った。空には満月が輝いており、その光を浴びている剣野は無言のまま目を眺めていた。

「……月明かりでか？なんだか剣野がすげえ綺麗に見えるよ。しばらく目を眺めていた剣野は、急に俺の方を見ると、いつもの強気な態度からは想像出来ないような細かい声でとつとつと話し出した。

「……私がこんな感じに話したら……変……か……？」

「いや、いいんじゃないか？」

俺としてはそんな涙目で上目遣いされる方が気になるぞ？

「でも、いきなりなんで変えるんだ？」

「夕方のときもこうなっていたんだが……。」

「……あゝあんとときか。」

俺は先輩が怖くて泣きついてきたときの剣野を思い出す。確かに思い出すとこんな感じだったな。あの時可愛いと思っていたのは秘密にしておくか。

「私は本来臆病者なのだ……。」

「臆病者？ お前が？」

俺は信じられなかった。あれだけ凶暴な剣野が臆病だって？それなら鯨が陸を歩いた方がまだ信じれる。

「……私は他人が怖くてたまらないんだ。」

俺は一言も喋ることなく話を聞いていた。だってよ、目の前にいるヤツが泣きそうな顔してんだぜ？俺には話しを聞いてやるくらいしか出来ることが思いつかないんだよ。

剣野は俺が何の反応も示さないのにも構わず話を続ける。

「私は小学生の時いじめられていたんだ。」

「……ホントか？」

俺の言葉に剣野は微かに頷く。俺は心の中で少しむかついた。無論いじめた奴らにだ。

俺は昔からいじめとかが嫌いで、そういうことをしている奴を見つけたらボコボコにして2度としないようにきつく言っておくのだ。お陰で小中で俺は「正義の番長」なんてあだ名を付けられたがな。俺のイラつきが顔に出ていたのだろうか、剣野は少し困惑したような声で尋ねてきた。

「ど、どうした？」

「あゝ、気にすんな。続けてくれ。」

俺は適当に誤魔化すと剣野に先を促した。

剣野も深くは追求せず、続きを話すことにしたらしい。

「……中学に上がる時に親が私がいじめられているのに気づいて引越しをしてくれた。お陰で私はいじめから解放されたが、人を信じれなくなった。」

「んなことがあったのかよ……。」

誰か当時いじめてた奴ら教えてくれ。俺が因果応報ってやつを体で教えてやつから。

俺はそんなことを考えつつ剣野を見る。当時のことを思い出したのか、表情は暗かった。

「以来私は他人を寄せ付けないようにしてきたんだ。自分が傷つかないように……。」

ここで俺は1つ疑問が浮かんだ。

「じゃあ、何で俺は平気なんだ？」

「……。」

アレ、顔が真っ赤になってるんだけど……。何か変なこと言ったか？

俺が首を傾げていると、剣野が口を開く。

「5月の初め、君がしたことを覚えてるか？」

「今月の初め？……ああ、あれか。」

俺が5月の初めに行ったことは、いじめの撲滅だった。

その日の昼放課、俺は何気無く校内を散歩していた。その時、俺のクラスがある東校舎の校舎裏で1人泣いている奴を見つけたのだ。話を聞くと、クラスの不良どもにいじめられているとのことだった。その話を聞いて速攻でキレた俺は昼放課の間にそいつらを呼び出し、俺が得意としている「9割殺し」の刑を下したのだ。

（因みに「9割殺し」は相手を肉体的にも精神的にもボロボロにしようとする行為のことで、別に必殺技ではない。）

その後、「9割殺し」によって身も心もボロボロになったそいつらに土下座をさせ、いじめられてた奴に謝らせると、もう二度といじ

めをしないよう誓わせ、放してやった。

・・・因みにまたやったら必殺の「10割殺し」をかますと言って
おいたので、まず再犯の可能性は無い筈だ。たまに俺に会うと「兄
貴!」とか言っただけで近寄ってくるしな。
だが、何でそのことが出てくるんだ?

「私はその話を聞いて、とても驚いた。そんな人がいたんだと、そ
んな漫画に出てくるような人が身近にいたのかと、そう思ったんだ。」

・・・そんな風に思われていたのか? 確かにあれから校内でのい
じめが無くなったらしくて、校長から直々にお褒めの言葉を下さっ
ただけだな。あと、俺にまた「正義の番長」ってあだ名が付けられた。
それ言っただけはとりあえず殴ってるんで、言うやつは居なくなっ
たけどな。

「それで、私は一度だけ君の姿を見に行っただ。その時、一目惚
れしてしまったんだ。」

「・・・それだけで!?!」

それは流石に驚くぞ!? 幾らなんでもそんな展開は読めなかった
よ!!!

俺は心の中で突っ込みを入れつつ、しかし驚きを隠すことは出来な
かった。

俺の言葉に、剣野は少し不機嫌になったらしく、俺を睨みつつも話
していく。

「・・・仕方ないだろう。あの日、友人と一緒にとても楽しそうに
笑っている君を見て、私は君と一緒に居たいと、一緒に笑い合いた
いと、心の底からそう思ってしまったんだから。」

剣野の目は真剣そのものだった。全てを聞き終わると、剣野は立ち上がった。

「……私の話に付き合ってくれて、ありがとう。それじゃ……。」

「剣野。」

俺が突然話しかけたので、剣野は心底驚いていた。

剣野が立ち止まると、俺は一言一言ゆっくりと喋っていく。

「俺は、別に正義の味方でもなんでも無い。只の喧嘩が出来る高校生だ。……でもな、お前に何かあったのなら、迷わず俺に言え。何があるつと、俺はお前を救ってやる。」

「……これは俺の信念だ。自分の周りにいるヤツは、どんなことがあるつとも守る。そう決めている。だから、剣野だって例外じゃない。」

俺の言葉に目を見開いて驚いていたが、すぐに表情を緩めた。

「……ありがとう。」

そう言ったときの表情を、俺は忘れられそうに無い。

「……俺が見た中で一番の笑顔だったからな。」

「じゃ、じゃあ、お休み……。」

「ああ、そうだ。私のことは名前で呼んでくれ。」

な、名前で？それはちょっと恥ずかしいんだけどな……。つまあ、片付けを手伝ってもらった礼ってことにするか。

「お休み、舞歌。」

「ああ、お休みだ。」

そう言つて舞歌は家の中へと入つていった。

自分以外誰も居なくなつた庭で、俺はぼーっとしていた。

我ながら恥ずかしいことを平然と言つちまつたなあ……。ま、いいか。

俺はそろそろ寝ようと思ひ、2階の寝室に向かう。

明日も学校なんだよな……。何かまともな生活送れそうにないんだけど……。つーか先生どないすればええねん……。

頭の中で厄介ごとが多くなつていったため、最後の方が関西弁になつてしまつたが、考えたところで解決策が見つかるわけでもないの
で、俺はさっさと寝ることにした。

……。明日は平穩でありますように……。頼むから。

第8話：突撃！隣の晩御飯！（後編）（後書き）

作者：（おい！！零時大変だ！！！！）

鎖川：おわ、何だよ。もうねみいから寝かせてくれよ。

作者：（バカ野郎！！大変なんだよ！！）

鎖川：何が？（半ギレ）

作者（この小説の総アクセス数が1万を超えたんだよ！！）

鎖川：なんだとお！！！！

作者：（しかも先程確認したら1万4千ほどになっていた！ユニークアクセスも5千人を超えていたんだ！！！！）

鎖川：くっ、いかん。目から汗が止まらねえ！！！！

作者：（分かる、分かるぞその気持ち！！）

鎖川：読者の皆さんありがとうございます！！

作者：（ありがとうございます！ホントに！！）

鎖川：今回は作者が何も思いつかないのでこれだけですが、どうか応援よろしくお願いします！！

作者（感想なんかも待ってます！って何言ってるんじゃコリアー！！）

鎖川：それではこの辺で！！

作者：（待てえ！！！！）

第9話：静かな？朝

朝の二度寝は至福の時間。

舞歌視点。

「ううん……。」

眩しさを感じて目を開けると、窓の外からは朝日が差し込んでいた。
……ああ、もう朝か……。

私は朝になったとこにようやく気づき、布団から起きる。
横を見ると、香奈先輩と三上先生は未だに夢の中のような。
先輩からは規則的な呼吸音が聞こえてくる。

しかし、先生は寝相が悪いな……。布団は蹴飛ばしているし、口は開いたままだし、もう少ししっかりするべきでは？ 私はそんなことを思いつつ部屋を出た。

部屋を出ると、味噌汁らしき匂いが漂ってきた。その匂いに誘われてリビングに行く、零時が朝食の準備をしているところだった。
彼は私に気づくと手に持ったお椀を置きながら話しかけてきた。

「おはようさん。よく寝れたか？」

「ああ。先生に寝ているとき蹴られたかもしれないが……。」

「・・・まあ大丈夫だろ。多分・・・。」

後半の方がよく聞き取れなかったが、私もあまり気にしないことにした。

その後、朝食の用意が終わる頃になってようやく先生と香奈先輩が起きてきた。2人とも頭を抑えて辛そうにしている。

「あゝ頭痛い・・・。零時〜〜〜助けてくれ〜〜〜。」
「フラフラする〜〜〜。気分悪いよ〜〜〜。」

・・・俗に言う二日酔いだった。先生は当然だとして、先輩もか。あまり飲んでいるようには見えなかったのだが・・・。
先輩の言葉に零時が呆れた口調で言った。

「そりゃ先輩は15本は飲んでたんだし、当然だろ？」
「え！ 私そんなに飲んでたの!？」

私もびつくりだ！ 確かにあまり香奈先輩は見えていなかったし、いつの間にか寝ていたから何本飲んだか聞けなかったが、そんなに飲んでいたのか・・・。

零時は無言でリビングの隅を指差す。そこには資源ごみの袋に入れられた空のビール缶が置かれていた。袋は全部で5つあり、それぞれに名前が書かれていた。

「それぞれ書かれてる名前の方が飲んだ分入れといた。」
「小野くんの分が無いけど・・・。」

「あいつは5本でギブアップしたからカウントしない。」

私と香奈先輩は「先輩」と書かれた袋に入っている缶の数を数えてみた。

・・・何度数えても17本以下にならなかった。というか数えるたびに増えていく。

「・・・私こんなに飲んだっけ？記憶がいまいちはつきりしないんだけど・・・。」

あれだけ笑ってて記憶があったらそれはもうまともな人間では無いです。

私は首を傾げている香奈先輩を見てそう思った。

零時視点。

「零時〜〜気分悪いよ〜〜。」

「はいはい分かりましたから離れてください。」

俺は背中に引っ付いている三上さんに離れるように伝えると、冷蔵庫に常備してある二日酔い用のお茶を出した。叔父さんが二日酔いが酷い時に飲む代物で、効果は結構なものだ。ちなみに銘柄は「ザメハ」と書かれている。・・・ドラ エではないぞ。それを2つのコップに入れると、まだ呻いている香奈先輩と三上さんに渡す。

「ほら、これでも飲んどけ。」

「あ、ありがとう。」

「お〜〜サンキュ〜〜。」

2人は礼を言いつつ俺からザメ八の入ったコップを受け取り、中身を飲む。

しばらくして香奈先輩があることに気づいた。

「あれ？ 小野くんは？」

「そついえば居ないな・・・。」

「あいつならもう出てったぞ。」

俺の言葉に2人は驚きの表情を浮かべる。まあ当然か。

俺はその理由を知っているので2人に教えてやる。

「あいつはなんかの同好会に入ってるらしくてな、朝は早いらしいぞ。」

「・・・一体何の同好会に入ってるんだ？」

「それは教えてくれなかった。」

何故か同好会についての話題は避けられるんだよな。しかもこの前隣のクラスで変態って言われてるヤツと怪しげな笑みを浮かべてたし、正直引いたわアレ。その後2人とも殴っておいたけどな。

「そんなこといいから飯〜〜。」

「はいはい。」

ようやく復活した三上さんは子供みたいに飯をねだる。・・・たまにこの人が子供に見えてくる。慣れたけどな。

「2人もそろそろ飯にするから、数数えんの終わんな。」

「む、そうだな。」

「分かったよ。」

飯はそれほど時間が掛からず、気がつくと俺を含めて飯を食い終わっており舞歌が香奈先輩と一緒に台所で食器を洗っていた。

「あゝ悪いなやらせちまって。」

「かまわない。ご馳走になった礼だ。」

「私は昨日から何もしてないから、これくらいはやらなきゃ。」

「じゃあ洗ったやつはそこに置いていてくれ。自然乾燥させるから。」

俺は2人にそう言うと食器洗いを任せ台所を出た。2人ともしっかりしてるな。お陰で楽になった。

俺は少し機嫌がよくなり、しかしテレビの方を見て肩を落とす。

「それに引き換え……。」

「ん？何か言ったか？」

俺の声がよく聞こえなかつたらしく、三上さんが尋ね返してくる。ちなみに三上さんは朝のみさんを批判してからでないとかから出ないという変なポリシーがあるため、チャンネルは朝ズになっている。

「……三上さんも手伝いくらいしましょうよ。」

「メンドイ。もつすること無いしよ。」

……確かにその通りだ。食器洗いは舞歌と先輩がやってるし、洗濯は皆が起きる前に俺が自分でしたしな。でも何もなくていいわけではないですよ？

俺はため息をつくと制服を着ようと思いきや2階に行こうとする。しかし、リビングに付けられた時計の時間は6時40分とまだ早いので

仕方なく三上さんの横に座って話をすることにした。

「三上さん家に帰って準備しなくていいんですか？」

「ん〜特にすること無いんだよ。必要なものは向こうに置いてあるしな。」

「・・・学生じゃないんですから。」

先生が置き勉紛いのことをすんなよ・・・。

俺は呆れつつテレビを見ている。みさんがどっかの政治家の天下りを批判していた。正直俺にはどうでもいい。俺は目覚し今のわこを見るのを楽しみにしているからな。

ぼーっとテレビを見ていたら三上さんがみさんを批判し始めた。

「けっ、別にてめえは喋ってるだけだろ。偉そうにベラベラほざいてんじゃねえ。」

この人こういうのを見ると滅茶苦茶ガラ悪くなるんだよなあ・・・。三上さんの雰囲気がどんどん悪くなっていく。俺は今度こそ着替えに行こうとしたが、いつの間にか三上さんが俺の手を掴んでいて、しかも徐々に力が加わってきているので非常に痛い。台所に居る二人は楽しそうに談笑していてまったく気づいてなかった。

いや待て、2人とも妙に顔が引きつっているな・・・まさか俺は見捨てられたのか！？確かに分かんなくてもないよ気持ちはいでも見捨てるのは酷くない！？おい俺の視線を無視するな！助けてよ頼むから！！

「ああくそ、ダメだ。今日のはかなり酷い。やめだやめだ。」

三上さんはそう言うとテレビのチャンネルを変えた。同時に雰囲気も穏やかなものになっていく。良かった正気に戻った。ってオイ、

台所の2人。お前ら何もしてないくせにホッとしてんじゃない。
俺は後で2人に仕返しをしようと思いつつ、とあることに気づき三
上さんに尋ねる。

「あの、三上さん。」

「ん、何だ？」

「そろそろ離してもらえますか？」

「え？」

そう、未だに三上さんの手は俺の手を離しておらず、しかも手が潰
れるぐらいの力が掛かっているのだ。てか早く離してくれ!!!マ
ジで骨が碎ける!!!!!!

「あ、ああわりい。」

三上さんは僅かに顔を染めて手を離れた。何で赤くなってんだ？台
所からの視線が痛い、君達がレスキューしてくれなかった所為で
もあるんだけどな？

とりあえずそれは置いとくとしてと……。

「顔赤いですよ。どうしたんですか？」

「何でもねえ!!!」

「ガ!!!」

何故か心配したのに殴られた。しかもボディを思い切り。
常人なら一撃で意識が刈り取られる一撃を耐え抜いたが、まともに
立つ事も出来ずその場にうずくまってしまつ。

「だ、大丈夫か!？」

「零時くんしつかり!!!」

流石にこれはやばいと感じたらしく舞歌と先輩が駆け寄りてきた。全然大丈夫じゃありませんよ。もう少しで朝っぱらから気絶するところだったよ。

「わ、わりい。つい出ちまった。」

「……。」

俺は何も言いませんでした。ていっつか言えませんが。ダメージでかくて。

ピーンポーン。

その時インターホンが鳴り、来客を知らせた。

……誰だ？こんな朝っぱら訪ねてくるやつは？

俺は全く心当たりは無かったが、とりあえず対応することにした。俺は立ち上がるとダメージを全く感じさせない足取りで俺は玄関へと向かう。後ろから3人の驚きの声が聞こえてきたが、気にしませんが。痛みの我慢でいっぱいはいなんだよ。

「はい、どちら様で……。」

「ウチの娘はどこだ!!!」

「あなた、声が大きいですよ。」

……なんか大柄のおっさんと着物を着た凄い美人がいた。娘？

まあ結果としては俺の静かな朝は無くなったよ。あっはっはっは。
・泣きてー。

第9話：静かな？朝（後書き）

鎖川：さて、この小説も合計で10話もアップしたのか……。
小野：嬉しいことじゃないか。読者数も作者の予想を超えて増えるんだし。

鎖川：あれ？そついや作者はどこいった？いつもならすぐに声かけてくんの……。

小野：あれ？ここに置手紙があんぞ？

鎖川：えつと、「今回からキャラクターのプロフィールを乗せることにした。まずは零時から。」っていきなりだなオイ！！

小野：んじゃこいつのプロフィールをどうぞ〜。

登場人物紹介

主人公 鎖川零時

年齢 16歳

身体的特徴 短めの黒髪。身長172センチ。普段は見えないが、けっこう鍛えられた体つきをしている。

特技 料理・喧嘩・その場の流れに流される。

趣味 読書・クッキー作り（菓子はこれしか作れない）

備考 実は体にある秘密を抱えている。ここ数日女性陣に振り回されて少々疲れ気味。

小野：・・・とまあこんな感じだな！

鎖川：オイ待て。特技の欄で納得いかねえ部分があったぞ。

小野：次回は剣野舞歌さんの紹介を載せる予定らしいのでお楽しみ

に〜!!

鎖川：待て逃げんな！　ってかこのコーナー追いかけてっことが多すぎだ!!

作者：（・・・そっいやそうだな。）

鎖川：今気づいたのかよ!?

第10話：「両親はヤザ

親バカは無敵の力を持つ。・・・たまに。

零時視点。

ただいまこの家には客が来ている。俺の目の前でソファーに座っている、どこからみても893（ヤクザ）にしか見えないオッサンと、和服姿のオッサンの奥さんらしき人がそうだ。

ちなみにオッサンは俺に向けてあからさまに殺気を含んだ視線を送ってくる。・・・すいません怖いんですけど。

俺がそんなことを考えていると、奥さんが俺の気持ちを察してくれたらしく、オッサンに注意をする。

「あなた、威嚇するのはお止めなさい。失礼ですよ。」

「何故だ！こいつはウチの娘を誑かしたんだぞ古風こふう！？」

古風と呼ばれた人からの注意に大声で反論するオッサン。いや俺は別に誑かしてませんよ？

すると、俺の左横に座っていた香奈先輩がテーブルを叩いた。

ああ、今家に居るのは香奈先輩達3人以外には俺の右側に座って我関せずを貫いている剣野だけだ。先生は先に学校に向かったよ。

「父さん！私は自分の意思で来てるの！彼は悪くないわよ！！」
「ギヤアアアア！！ウチの香奈ちゃんが反抗期にイイイイ！！
何てことだアアアアアア！！！！」
「あなた、うるさいですよ。」

香奈先輩の言葉によって半狂乱になった夫を、古風さんは首筋に手
刀を叩き込むことで強引に黙らせた。

「ガッ！？」

オツサンは一撃で昏倒した。・・・何か手馴れてませんか？
俺は薄ら寒いものを感じ、この人に逆らってはいけないと心に誓っ
た。

オツサンが完全に昏倒していることを確認した古風さんは、何事も
無かったかの用に振舞った。

「さあ、続けましょうか。」

「え〜と、いいんですか、この人？」

俺は床に転がっているオツサンを指差して言う。てかピクリとも動
かないんだけど・・・まさか死んだんじゃ・・・。

「その人なら心配いらないわ。いつもはもっときつめにやってるか
ら、それぐらいどうってこと無い筈よ。」

「・・・さいですか。」

「そうよ、いつもだったら木刀とか釘バットとかで殴ってるもの。」

呆然としている俺に香奈先輩がさらに補足をする。なるほど、確か
にそれなら大丈夫かもな。

何故かひどく納得してしまう自分にこっさり嘆きつつ、俺はとりあ

えず先程から聞きたかったことを訪ねた。

「すみません、お2人って香奈先輩の……。」

「ええ。あなたの思っている通り、私は香奈の母の飯田古風です。床に転がっているのは私の夫で香奈の父親の飯田無限いいたむげんよ。」

やっぱりか。俺はそう思い、改めて2人を観察する。

無限さんはまだ起きてこないが、香奈先輩がキツイ目で無限さんを見ているので、多分起きたくても起きられないんだろう。

古風さんは落ち着いた雰囲気です座っているが、どうみても隙が無く、只者とは思えなかった。……まあ、旦那を殴って黙らせてる時点で只者とは言えないだろうけど。

すると、先程から一言も喋らなかつた舞歌がようやく口を開いた。

「しかし、何故ここに先輩が居ると分かったのだ？」

「先輩が連絡入れたんじゃ……。」

「私は『今日は帰らない』って言っただけよ？第一、この詳しい住所なんて知らないし。」

……ちよつと待て。じゃあなんでここに来たんだよ。そして何故ここに居ると分かってたんだよ。

俺達3人の疑念のこもつた視線を真つ向から見返して古風さんは真相を告げた。

「それはこの人が香奈に発信機を付けていたからです。ねえあなた？」

突然声をかけられ、体をビクリと震わせた無限さん。どうやら本当のようだ。

それを見て香奈先輩が拳を強く握り締めて立ち上がる。完全に怒っ

てんなこれは……。

「父さん！ またやったの!？」

またなんだ！ この人過去にもやってたんだ！それじゃあ嫌われてもしょうがないんじゃないですか？

「幾らなんでも過保護なんじゃあ……。」「
「何だと小僧！！貴様に何が分かる！！！」

俺がうつかり口を滑らすと、無限さんが勢い良く立ち上がり怒鳴ってきた。

「17年間大事に育ててきた愛娘が、どこの馬の骨に盗られたりしないよう頑張ってきたワシの気持ちだが、貴様に分かるか————
——！！！」

無限さんは自分の娘への思いを叫ぶと懐からドスを取り出して俺に向かつてきた。つてか真剣じゃん！！マジで殺る気だよこの人！！俺は助けを求めようとしたが、舞歌と先輩は突然のことについていけず呆然としていて救援は無理。一番頼りになる筈の古風さんは微笑を浮かべて高みの見物を決め込んでいる。

……ライフラインは無いのか——！！
そんなことを心の中で叫んでいると、目の前には目をぎらつかせた無限さんが迫ってきていた。どう見ても本気の無限さんの眼を見て俺は仕方なく戦闘モードに入る。

まず腹部を狙ってくるドスを左に移動して避ける。

「ちょこまかすんなあ——！」

無限さんは叫びつつしつかりと俺に向けて両手に握ったドスを構えてくる。俺は無限さんが方向転換をしている間に速攻で近づき、いきなり近づいてきた俺に驚いてる隙に顔面に左肘を叩き込む。顔面にモロに食らった無限さんはよろめき、僅かにドスを持つ手の力が緩む。

俺は後ろに下がろうとする無限さんに食いつきつつ、左腕を勢いをつけて伸ばし、ドスの峰を思い切り叩く。

力が緩んでいた手からドスが見事に弾き飛ばされる。

無限さんはそのことに驚きつつも俺の腹に膝を叩き込もうとする。

俺は体を右回転させつつ、右手でそれを止めると、左の裏拳を繰り出す。

「ゴツ!？」

裏拳は見事に無限さんの顎にクリーンヒットし、そのままうつ伏せに倒れ込んだ。やば、ちょっとやり過ぎたか？

「ぐ、けっこうやるじゃねえか……。」

と思っただけですぐに立ち上がりました。それなりにいい手応えだったんだけどな……。

「無限さんもタフですね。普通なら立つのもキツイでしょうに……。」

「ハッ。お前みたいな若造に簡単にやられるほどヤワじゃねえんだよ。……それなりに効いたがな。」

そう言った無限さんは拳を構えた。俺もこの程度では引かないことは予想済みだったので、警戒を解いていなかった。

俺と無限さんは無言で睨みあう。互いに相手が生半可な実力ではな

いと分かっているため、迂闊に攻めることができなかった。
最早舞歌や先輩も手出しが出来ず、ただ見守ることしか出来ずにいた。

香奈視点。

も〜どうしてこんなことに・・・。

私は目の前で睨み合っている2人を見て途方にくれていた。

最初は父さんと母さんの突然の訪問にびっくりしてたけど、別にそれぐらいならやりかねないとは思ってた。けど、どうして父さんと零時くんが戦ってるの!? 何で!?

私は混乱する頭を何とか抑えつつ、この状況を打破する方法を考える。

剣野さんは・・・ダメね。彼女も途方にくれてる。となると・・・。

「母さん!!」

私は自分が知っている人の中で一番に強いと思っている人に頼み込む。

私の大事な父さんと、大好きな人の争いを止めるために。

「お願い!!! 2人を止めて!!!」

母さんは私の言葉に微笑を浮かべた。

「残念だけど、もい遅いわ。2人ともどちらかが倒れるまで止めな

いわよ。」

「でも、母さんなら・・・!!」

「あなたは彼を信じてないの？」

「・・・!？」

私はその一言で何も言えなくなってしまった。

無言になった私を見て、母さんは剣野さんを指差した。

「彼女を見なさい。しっかりと彼を信じながら待っているわ。」

剣野さんは拳を固く握り締めていて、零時くんをじっと見つめていた。

それを見て私は自分を情けなく思った。彼女よりも零時くんの傍に居た筈なのに、どうして彼を信じようとしなかったのだろうか。

「あら、これで決まりみたいね。」

「え!？」

母さんの言葉を聞いて驚きつつ2人を見ると、父さんが零時くんに向かつて突っ込んでいた。私は今度こそ零時くんを信じて静かに見守ることにした。

零時視点。

俺と無限さんが睨み合っていると、後ろで香奈先輩の声がした。どうやら古風さんに事態の收拾を頼んでいるらしい。

俺は僅かに意識がそちらに向いてしまった。それは先程からチャンスを待っていた無限さんにとって待ちに待っていた瞬間だった。

「もらったあああああ！！！！」

叫び声とともにその大柄な体と年齢からは想像できないほどの俊足で突撃してくる無限さん。残像でも残りそうなのそのスピードは、構えている拳にさらなる威力と速度をもたらすだろう。

普通なら絶対に避けれそうにないだろう。……今の俺が普通ならな！！

無限視点。

もらった！！！！　ワシは勝利を確信していた。

ワシの十八番である高速移動からの渾身の一撃を食らって倒せなかったのは古風だけ。だからこそこの一撃に絶対の自信を持っていたワシは、空振りしたとき間抜けな声を上げてしまった。

「へ？」

そう、直前まで小僧がおった場所から、小僧が一瞬で消えていたのだ。驚いているのはワシだけでは無いらしく、周囲からも驚愕の声が聞こえていた。

「おい、オッサン。」

その時、ワシの後ろから小僧の声がした。驚きつつもすぐに後ろを振り向くと、そこには腰を沈め、右手を後ろに引いて右拳に左手を乗せているという構えをした小僧がいた。

「・・・崩拳。」

小僧は一言、技の名らしき言葉を言うと、まるで砲弾のような勢いで右拳を打ち出した。

小僧の拳は見事にワシの鳩尾に入り、ワシは激痛を感じつつ意識を失った。

零時視点。

ふう、手強いオッサンだったぜ・・・。

俺は目の前に崩れ落ちている無限さんを見てそう思った。ぶっちゃけく崩拳は俺の得意技の一つで、本気で無いと使わないのだ。一応手加減はしたが、全力で放つと確実に骨や内臓にダメージがいくから喧嘩の時でもあまり使わない。

それを使ってしまうほど、無限さんは強かった。

俺がそんなことを思っていると、突然拍手の音が響いた。俺はすぐに誰が鳴らしているか分かり、俺はその人へと振り向いた。

「凄いわね。一応あの人はその筋ではく鬼の異名を持つてるほどの実力なんだけど。」

古風さんは拍手をしつつ俺の実力を賞賛した。俺はそんなことは無視していい加減に話を進めることにした。

「で、肝心のここに来た理由をいい加減教えてもらえますか？古風さん。」

「ええ、構わないわよ。」

古風さんは拍手を止めると、近くにいた香奈先輩の頭に手を置いた。

「実は今日この子のお見合いの相手が来るから連れ戻しに来たのよ。」

「……お見合い？」

俺と舞歌の声が見事にハモった。

話を聞くと、香奈先輩の家は代々極道の家系で、高校生くらいになると家督を継ぐのだそうだ。しかし、香奈先輩は女性であるため家督を継ぐのは相応しくないと判断されたそうだ。そうなると家督を継ぐのは誰か、という問題が出てくる。

先輩の家は関東最大規模の極道組織の直系筋の組のため、跡継ぎに立候補するものは大勢いるのだそうだ。

その中で家督を継ぐものと先輩は結婚しなければならないのだそうだ。そして今日は跡継ぎ候補の1人とお見合いすることになっているという話だった。

「それは先輩なら普通に拒否すると思うんですけど……。」

「あら、やっぱりそう思う？」

「・・・先輩との付き合いはまだ数ヶ月程ですけど、それくらいは分かります。」

「つ、付き合い・・・！」

「・・・何か先輩が反応した。あ、やばい顔がどんどん真っ赤になってる。顔にだらしない笑みが、笑い声が浮かんでいつてる・・・！」

「先ば〜い、起きてください。せんば〜い。」

「えへへへ・・・ハッ、私は何を・・・。」

先輩を正気に戻すと、今度は先輩に話を聞いてみた。

「今の話って本当なんですか？」

「・・・本当よ。零時くんの言う通り、私は拒否してるんだけどね・・・。」

「けど、組の幹部連中はそんなことお構いなしに送りつけてくるのよ。どいつもこいつも自分のためにしか考えてないからダメだって言ってるのだけれど、これ以上この状態だと香奈が危ないのよ・・・。」

「・・・確かに、あまりこの状態でいると痺れを切らした連中が強引な手段を仕掛けてくる可能性がある。そうなると先輩の身が危ない。俺は事態がかなり危険な状況なのを知る。しかし、この状況を一番理解している筈の古風さんは全く真剣そうな素振りを見せず、しかも何故か俺を値踏みするようにじろじろ見てくる。正直、あまり良い予感がしない。」

古風さんは俺を見るのを止めると、困った様子で娘を見る。

「しかもこの子はもう心に決めた人がいるって言うし・・・。」

「えっそうなんですか先輩？」
「……。」

俺の問いに、先輩は耳まで真っ赤になってしまっただけで答えてくれなかった。しかも俺をちらちら見てくるし……なんで？

その時、話を聞いてからずっと考え込んでいた舞歌がある案を提案する。

「なら、その人を出してそいつらを牽制すれ……ば……。」

ん？語尾が小さくなってたなオイ。てか何で俺を指差して固まるんだ舞歌？ いつの間にか周りの人が皆俺を見つめてるし、これはちよつと耐えられませんよ皆さん。

俺は3人からの視線に耐えられなくなり、どうにかして視線を外そうと口を開いた。

「えっと、そんでその人はどこに……。」

「あなたよ。鎖川零時くん。」

……え？

「か、母さん！……！」

「良いじゃない。どうせあなたのことだから一度も告白してないんでしょ？ こういう所でもないはずと彼に知ってもらえないわよ。」

「~~~~~」

先輩が？ 俺を？ 何で？ いやいつから？

俺は突然の爆弾発言に思考が混乱してしまった。しかし、古風さんの次の言葉は俺の脳みそをさらに混乱の極みに陥れる言葉だった。

「そういうわけで、零時くん。あなたは今日のお見合いに顔を出してもらうわよ。」

『ええええええええええええ！！！！？？？』

俺、舞歌、先輩は一緒になって絶叫した。

因みに俺は反論しようとしたんだけど、古風さんが銃突きつけて「行く？それとも逝く？」とかいつて脅してきたんで泣く泣く承諾しました。

第10話：「両親はヤザ（後書き）」

作者：え〜前回予告したように剣野の紹介をしますが、その前にちよつと報告を・・・。

舞歌：待て。

作者：くおおおおお！！？ 肩が、肩が外れるから離してえええええええええ！！！！

舞歌：私の紹介が先だろう。

作者：いやこつちの報告を優先・・・痛い！！ 分かった！するから！！紹介を先にするから蹴らないでいてえ！！！！

登場人物紹介

ヒロイン 剣野舞歌

身体的特徴 身長165センチ ショートヘアで鋭い目つきをしており、大概のヤツは睨まれるとビビッってしまう。

特技 剣術（居合い切りなどの実戦的なもの）・睨んで黙らせる・料理という名の最終兵器

趣味 読書（主にライトノベル）

備考 前に住んでいた所でいじめを受けていた。零時に惚れた理由は彼の優しさと強さに惹かれたため。

作者：・・・とまあこんな感じだ。

舞歌：そうか。最後の備考の部分はいいとしてだ、他の部分でいささか不適切な部分があったようだが？

作者：・・・そんなヤクザも裸足で逃げ出すような殺気で脅したつて無駄だぞ！！　ここは作者として譲れない・・・ギヤアアアアアアアア！！！！

鎖川：・・・只今作者が舞歌によって殺られているので俺が報告をする。報告の内容は・・・。

小野：総アクセス数が2万を突破しました！読者の皆さんありがとうございます！

鎖川：・・・。

小野：アレレ？零時くん？何で<崩撃>の構えを？ちよつま・・・！！！！

小野、全力の<崩撃>を食らって遙か彼方へと吹き飛ばす。

鎖川：ああ、ちなみに<崩拳>には対象にダメージを与えることを重視した<崩撃・地>と、ダメージは軽めだが相手を大きく吹き飛ばせる<崩撃・天>の2種類がある。まあ、軽いと言っても骨折は免れないけどな。

舞歌：ふう、終わったぞ。

鎖川：・・・返り血を拭いてきたらどうだ？

舞歌：このあとがきが終わったら行く。

鎖川：・・・2万アクセスを記念して、キャラについての質問を受け付けたいと思います。皆さん、俺達に何か聞きたいことがあればどしどし感想フォームに乗せて下さい。

舞歌：こういうのはキャラの人気投票ではないのか？

作者：まだ・・・登場人物を・・・出し切っていないから・・・ダメだ。

鎖川：うお！？　大丈夫かよ！？

作者：そっちも・・・無理・・・。

舞歌：む、死んだか。

鎖川：まあ、次回には復活してるだろ。それじゃあこの辺で。
舞歌：うむ、また次回でな。

小野：俺を忘れるな〜！！！！

第11話：いざ！天竺と云う名のいろんな意味での修羅場へ！！（前書き）

作者はついに夏休みです。しかし就活があるのであまりゆっくり出来そうにないです。

第11話：いざ！天竺と云う名のいろんな意味での修羅場へ！！

リムジン「ヤザの法則。

「零時くん、早く！」

「もう少し！もう少しだけー！」

俺は部屋の外から聞こえてくる催促の声に回答すると、急いで学ラ
ンの中に仕込みを入れていく。ちなみに何のことは秘密だ。多分
後で分かる。

ようやく仕込みを完了すると、すぐに部屋から出て玄関に向かう。
玄関には舞歌と香奈先輩、古風さんがおり、家の前にはリムジンら
しきものが止まっていた。・・・運転手の顔に傷跡っぽいのがあっ

たのは気のせいにしてごう。

「遅いよ、零時くん。」

「女性を待たせるのは関心しないな。」

「・・・すみません。」

先輩と舞歌に非難され、俺は小さくなって謝る。非は完全に俺にあるし、反論することも無いと思ったからだ。

俺が何度も謝り、ようやく2人から開放されると、古風さんが手を叩いて全員の注目を自分に向けさせる。

「はいはい、叱るのはそれぐらいにして、早くお見合いの会場に向かうわよ。江崎、お願いね。」

「・・・分かりました。」

江崎と呼ばれた人はリズムジンのドアを開けてくれた。俺は彼に会釈をすると、中へと入る。俺が入ると先輩・舞歌・古風さん達も入り、江崎さんは全員が中に入るとドアを閉め運転席に戻り車を発進させる。

あ、無限さんはまだ昏倒していたのでトランクに簀巻きにされて放り込まれました。なんかドンドン叩くような音がするけど気にしない。気にしたら負けだ。

俺は気分転換に窓の外でも見ようかと思ったが、俺の左右には舞歌と先輩が座っているのであまり良く見れなかった。

しかも2人とも一向に喋らないのに妙な迫力を出しており、2人に挟まれている俺は非常に精神的にキツイ。

・・・どっかの漫画で沈黙は人を殺すつつつたけど、本当だな・・・。

俺はいい加減耐えられなくなり、古風さんに話題を振ることにした。

「そ、そういえば古風さん。今日お見合いする相手ってどなたなんですか？」

今まで俺がビクビクしているのを観察しているだけだった古風さんはすぐに答えてくれた。ってか見てたんなら助けてよ……。

「今日のお相手はウチと同じ直系筋の組であるく刃道組つばみちの若頭、伊川治五郎いかわぢごろうさんです。」

「わざわざ他の直系筋からですか……。」

「ウチは関東最大の極道組織きょくどうしゅうく極竜会きょくりゅうかいで一番の勢力ですから。口クデナシがわんさか狙ってるのです。」

「で、その口クデナシどもから香奈先輩を守るために、零時に偽の婚約者役をやらせるのか……。」

ここで黙っていた舞歌がようやく口を開いた。でも表情が完全に無表情。ていうか無理やり無表情にしているようで、目からは絶対零度の視線が古風さんに向けられている。めっちゃ怖い。

しかし古風さんは舞歌の視線を軽く受け止め、話を進めていく。

「そうです。今香奈に寄ってくる悪い虫を追い払うにはコレぐらいしかありません。……まあ私としてはこのままホントに婚約者になつてくれても構わないのですけどね。ね、香奈？」

「え！？ わ、私は……その……。」

突然話を振られた先輩は、顔を真っ赤にさせてごによごによと何かを呟いている。コラ、そんな上目遣いで俺を見るんじゃない。舞歌が俺に矛先を向けてきちゃったじゃん。俺は古風さんみたいに凶太い神経を持つてるわけじゃないからまじで怖いんだよ。

微妙に顔をずらして舞歌の視線から目を逸らす。冷や汗みたいなのが頬をつたつてくのは気のせいじゃないと思う。

「まあ今日のところは偽で構いませんから出てください。お願いします。」

そう言うと古風さんは頭を下げた。・・・ここまでされたら断れんな。・・・。

「・・・分かりましたよ。但し、俺はあくまで先輩を助けるために手を貸すんです。そこをきちっと分かつといてください。」

「ええ、分かつたわ。」

俺の言葉に古風さんは微笑を浮かべて了承してくれた。くそ、何か掌で遊ばれてるみてえだ。

「零時くん・・・。」

先輩が頬を紅潮させて俺を見つめる。やめてくれ。俺をそんなに見つめるな。恥ずかしいから。

「・・・全く、零時は本当にお人好しだな。」

舞歌が呆れた様子で呟く。さっきから向けていた視線もいつの間にか元通りになっており、俺へと向けられている目には、俺への信頼が宿っていた。

「・・・うるへー。」

気恥ずかしくなった俺は視線を下に向け、適当に返した。

それがよっぽどおかしかったのか、周りの3人は俺を見てくすくすと笑いだした。

「て、手前から笑うこたあねえだろ！！　おい、聞いてんのか！？」

・・・結局、先輩の家が見えてくるまで俺はずっと笑われていた。
ああ、そついやトランクからの物音が大きくなつてたけど誰も話題にしなかったな・・・。

「ここが我が家よ。」

車を走らせて20分。途中古風さんが誰かに電話を掛けていたが、それ以外では特に目立ったことは無く俺と舞歌と先輩で話しをしたりしていた。

・・・古風さんが「お願いねケンさん。」と言っていたのがすつげえ気になるんだがな。まさかな。ここで出てくる理由が無いもんなで、ただいま香奈先輩の家に到着した俺達は、車から降りて入り口を見ているんだが・・・。

「・・・門でか！！？？」

もう入る前から度肝抜かれています。だって目の前に7メートルぐらいの馬鹿でかい門があるんだぜ？　誰だって驚きますよ。

横で舞歌が呆然と巨大な門を見上げてる。あつちも言葉に出来ないくらい驚いてるようだ。

「別にこれくらいどうってこと無いでしょ？ 極竜会の本部はもっと大きいんだし。」

「さ、入りましょう。」

いやいやいやこれはどうってことないっていうレベルじゃないですよ？ 一般家屋にこんな門はないですよ？

しかし人の話を聞いてくれない母子は普通に進んでいく。こういうときは諦めが肝心だと俺の経験が告げていた。

「ハア……。行くか……。」

「そうだな……。」

俺と舞歌は揃ってため息をつくとき、2人の後についていく。ていうかトランク開けないんですか？ さっきから「開けるー！ 開けてくださいーい！」とか聞こえてくんだけど。段々懇願になってるし。

結局トランクはそのままにされ、俺と舞歌、古風さんと先輩はデカイ門の前に来た。

すると門が内側から開かれ、俺の視界にたくさんヤクザが整列しているのが飛び込んできた。

「す、凄いな……。」

舞歌もこの光景に度肝を抜かれているようだ。無理も無いか。視界に入るだけで5〜60人も数のヤクザが並んでいるのだ。普通の人はまずその雰囲気呑まれる。

俺は舞歌の横に並ぶとそつと耳打ちした。

「気をつける。こっからは少しの気の緩みが破滅に繋がるからな。」

なるべく堂々としていけ。」

「・・・分かった。心配してくれてありがとう。」

俺のアドバイスに礼を言うと舞歌は目を鋭くし、その場の雰囲気
に負けない程の威風堂々とした態度で進んでいく。

僅かな助言でその場の空気に順応した舞歌に舌を巻きつつ、俺も中
に入っていく。

中に入ると、並んでいた人たちが順に頭を下げっていく。

俺達は挨拶を返したりはせず、そのままドンドン邸宅へと進んでい
く。

映画に出てきそうな程の大きさの日本家屋を見ながら、俺は三上さ
んにいつ連絡を取ればいいのか悩んでいた。

「誰か出してくれーーーー！！！！！！」

・・・キコエマセーン。

第11話：いざ！天竺と云う名のいろんな意味での修羅場へ！！（後書き）

作者：ついに夏休みだー！！！！

剣野：良かったな。男1人で暑さに辟易しながら一切の出会いも無く過ごしていくのにな。

作者：。。。。

鎖川：あ、石になった。

古風：しかも今年は就職活動や宿題に追われますしね。

作者：。。。。

小野：石像から涙が流れてるぞ。

鎖川：えくと、それぐらいに。。。

香奈：そうよ！私の紹介が無くなるじゃない！！

作者：。。。。味方はゼロ。もう死のうかな。。。

香奈：死んでもいいから私の紹介をしなさい！！！！

作者：待て待て待て！？ 分かったやるからその振りかぶったバツ

トを下ろし。。。。ギアアアア！！！！

古風：作者さんが殴り殺されているので、代わりに私が娘の紹介をしましょう。

登場人物紹介

ヒロイン 飯田香奈

身体的特徴 身長160センチ 腰まである長髪をポニーテールにまとめてある。童顔で笑うと小動物のような可愛らしさを出す、零時ぐらいにしか見せない。

特技 弓術・合気柔術・殺気によって相手を脅す。主に零時が脅されている。

趣味 買い物（主に服など）・料理（壊滅的な腕前のため家族に禁じられている）・零時の観察

備考 アルコールが入ると壊れる。実家は由緒正しい極道の家系。

古風：こんなものでしょうか……。

鎖川：……趣味に妙なのがあったぞ……。

香奈：ちよ、お母さん!?

小野：零時の観察が趣味……。ちくしょおおおお!!!羨ましいぞこのヤロー!!!!!!

鎖川&香奈：『うるさい!!!』

小野：ぼげえ!?

剣野：……強烈なボディブローと回し蹴りにより小野は床に血反吐を吐いて転がった……。

作者：じゃ、今回はこの辺で!!!サイナラ……。

香奈：待ちなさい!!!

鎖川：自分がボコられることに気づいて逃げたな……。

剣野：途中で追いつかれるのに100円。

古風：釘バットで滅多打ちにされるのに1000円です。

鎖川：(……否定出来ねえ……。)

隼太郎：ふははは!!次回は私が復活するぞ!!!

一同：『え~~~~?』

隼太郎：不満そうな声を出すな!

第12話：本番前のサプライズゲスト（前書き）

作者：すいません。更新遅れました。夏休み中は今書いてるゾンビ物の小説優先させるんで、今後もちよつと更新遅れると思います。

香奈：ここか〜!!

作者：ぎゃあああ来た〜!!!!

零時：・・・まだ逃げてたんかい。

第12話：本番前のサプライズゲスト

舞歌視点。

私は今、香奈先輩の家に来ている。大きな日本家屋の中の一室で、零時と2人きりだ。

先輩と古風さんはお見合いの準備や着替えなどをするため出て行った。

本来ならばチャンスとも言うべきシチュエーションなのだが、零時は先程から携帯で担任の三上先生に欠席の連絡を取っているのだから、しかけることも出来なかった。

「ちよ、待つてくださいよ。俺だってドンドン話が進んでいくから対応が出来なかった・・・すいませんもう口答えしませんからドスの効いた声で脅さないください・・・。」

・・・電話口でこつてりと絞られているようだしな。

そのまま2〜3分程謝ったり少しだけ反抗して思い切りカウンターを返されてへこんでいたりしていたが、ようやく終わったのか携帯を仕舞う。

かなり精神的にダメージを受けているのか疲れた表情でため息をついている。それを見てついつい顔がほころんでしまった。

「・・・笑うな。」

「ふふっ、すまない。君の表情がおかしくてついつい・・・。」

今度は不機嫌そうに顔を歪めている。本当に表情がよく変わるな・・・。

「それでどうだったんだ？」

「・・・本日も酒宴が開かれることになった。しかも日本酒やテキーラまで振舞われる予定だから、昨日の比じゃねえぞ。・・・魔王が降臨する。」

よし、今日は絶対に彼の家には泊まらないぞ。私は心に誓った。

すると、和室となっているこの部屋の襖が開かれ、そこから先程と変わらない着物を着た古風さんと、花柄の着物に着替えた香奈先輩が入ってきた。

ともすれば子供っぽく見られそうな柄だが、先輩の着こなした風格が可憐さと同時に芯の強さを醸し出しており、正直同姓の私でも見惚れてしまった。

「えつと・・・、どうかな？」

香奈先輩が零時に尋ねた。零時は先輩の着物姿を見てからボーっとしていて、急に声をかけられると意識が戻ったかのような反応をしていた。

「あ、ああ・・・。似合ってるぞ。」

零時は先輩に見惚れて動揺しているのか少しどもりながらも返事を返した。むう、面白くないな・・・。

零時の反応を見て、香奈先輩は顔を真っ赤に染めて俯いてしまった。その場になんとも言えない空気が漂う。その空気を破ったのは意外な人物だった。

零時視点。

俺は香奈先輩を直視出来ず、適当に先輩の後ろを見ていた。すると古風さんとともに、とある人物が入ってきた。

「ハツハツハ！ 零時よ、青春をエンジョイしているかぶげえ！？」

・・・何が起こったか説明しよう。

俺は古風さんの後ろに居た臆太郎叔父さんを見つけると、一瞬だけ驚き、そしていつの間にか体が勝手に立ち上がったのだ。

そして叔父さんとの距離を一気に詰めると、天高く舞い上がりそうなアッパーを叩き込んだ。叔父さんは外へと吹っ飛び、玉砂利の庭に落下した。

着地した俺は止まる事なく叔父さんにマウントポジションをかまし、拳を叩き込んでいく。

「何でアンタがいんだよ・・・！！」

「ま、待てぶごー！？・・・ちよ、落ち着けガゴツ！？・・・は、話を聞ケベー！？」

叔父さんが何かを伝えようとしているが、そんなことは俺には聞こえていなかった。主に顔面に叩き込まれていくパンチにより、気が付くと顔がグシャグシャになった叔父さんが足元に転がっていた。後で手洗おう。

俺は肩で息をしながら、立ち上がって古風さんへ詰め寄る。

「ハアハア……。何であの人が居るんですか？　ここで必要になる人じゃないでしょう。」

すると古風さんは、にっこりと笑って叔父さんが居る理由を教えてくださいました。

「隼さんには護衛に来てもらったのよ。」
「護衛？」

舞歌と香奈先輩に聞かれたくないのか、小さな声で話していく。

「今日のお相手の方は野心家で知られています。だから万が一に備えて彼に来てもらったのよ。」

古風さんの目は真剣で、どうやら本当に怒る可能性があるようだ。

「……まあ叔父さんがいるなら心配ねえだろうけど……。」

よりもよって何でこんな日にくんだよ……。

「ハッハッハ！　無論我が可愛い甥っ子の晴れ舞台を見るために比べら！？」

「人の心を読むな。」

わざわざプライバシーの侵害をするために甦った叔父さんを黙らせると、俺はため息をついた。

……仕方ない。そういう理由なら諦めっか。

「それじゃあ叔父さん。護衛頼みますよ。」

「……。」

この野郎狸寝入りしてやがんな……。

「すみません。ちょっと起きないんでバット貸してくれませんか？」

「あら、それは私の仕事よ？」

そう言うと、古風さんはどこからか持ってきたのか、所々に赤い血痕が付いている釘バットを構えた。……あ、叔父さんから俺のような汗が。

古風さんは倒れたままの叔父さんに近寄って丁度真下に叔父さんの分身がある位置まで移動すると、釘バットを大上段に構えた。

……これはマジで潰す気だな。

ここでようやく危機的状况に追い込まれていることに気づいた叔父さんは、上半身を起こして古風さんを説得しようとする。

「ま、待つんだ古風！ 私は起きたから、というよりそんなところにそんなものを食らったらむしろ一生起きれなくなる！！」

臆太郎叔父さんの弁明を一通り聞いた古風さんは、バットを構えたままニコリと笑った。

あゝ。あれは殺る気だな。叔父さんの男としての人生を終わらせる気だな。

何だか目が据わってきた古風さんは、バットの先端が一番高い位置まで行くと、勢い良く振り下ろした。

「頼むから、頼むから止めて……ア、アアアアアアアアア
A A A A ! ! ! ! ? ? ? ? 」

……どうなったかって？ そんなこと聞かないでくれ。今全力で

おれおれしてんだからよ。

第12話：本番前のサプライズゲスト（後書き）

零時：え、作者はまだ香奈先輩から逃げ回っているようなので、今回のあとがきは作者抜きで行います。

小野：で？　今回は誰が紹介されんだ？

舞歌：ここに置手紙があるぞ。

隼太郎：何々、「今回のキャラ紹介は、お休みです。」だそうだ。

零時：……………。

小野：……………おい、そのサブマシンガン取ってくれ。

舞歌：こちらのショットガンの方がいいぞ。

古風：いえいえ、こういうときは刃物でじわじわと痛めつけた方がいいですよ。

零時：古風さん、日本刀はリアルに怖いんで止めときましようよ……………。

無限：バカモン！　男だったらこれだろうが！！

小野：ハッ！！　流石です師匠！！

零時：スレツジハンマーなんかどこにあっただよ……………。

舞歌：行くぞ！　めんどくさがりの作者に、天誅を！！

小野・古風・無限：オオ！！！！！！

（どこかへ突撃していく4人）

零時：……………ご冥福をお祈りいたします。

隼太郎：そうだな……………。

足元に線香を置く隼太郎。

香奈・舞歌・小野・古風・無限・待てえ
作者：なんで増えてんの~~~~~!!!???

第13話：お見合い・・・だったよな？

お見合いって大概成功してないところをよく見るよな。

零時視点。

今、俺はお見合いが行われる部屋に来ている。

そろそろ時間が迫っているとのことで、残念ながら叔父さんにお灸（止めとも言つ）を与えてやる事が出来なかったが、まあそれはいいとしよう。帰ってからボコればいいし。俺はさつきから気になっていることがあった。

「お見合いって制服のままでもいいのか？」

そう、俺は未だに学ランのままなのだ。いやまあこっちの方がいざという時に便利なんだけどな？ こういうところでこの格好するのはどうなんだろうか・・・。

俺の心中の疑問を先輩に尋ねてみたが、彼女も分からないらしい。まあ彼女も初めてなんだし、当然か。

「零時くんは、今回お見合いを破談にさせる目的で着てもらってるから、別に構わないと思うよ？ それに充分カッコいいし。」
「褒めてくれてありがとよ。」

うーん、自分がカッコいいかなんて普段気にしないからな。改めて言われると恥ずかしいな。悪い気はしないけどな。

「でも、さつき先輩を見たときはびっくりしたぜ？ 別人かと思うくらいに綺麗だったからな。」

「そ、そうかな・・・？」

「そうだって。普段も美人だけど、今は特に際立ってる。知らない奴が見たらその場で結婚申し込んでるんじゃないかねえか？」

「これは本心だぜ？ さつきはあまりの衝撃で見惚れちゃったしな。すると、香奈先輩は顔を真っ赤にしながら俺に質問してきた。」

「じゃあ・・・ここで私が零時くんにプロポーズしたら、結婚してくれる？」

「・・・今は、誰が言ってもダメだって言うと思う。」

「どうして？」

「・・・まだ、俺は自分自身に責任が取れるような根性を持ってねえから、誰かを幸せにできるかの自信が無えからな。それに・・・」

「

俺は一旦言葉を止めた。こっからのことを正直に話していいか、分からなかったからだ。

「・・・それに？」

先輩が俺の顔を覗き込んでくる。・・・ダメだ、言えそうにねえな。適当に嘘ついとくか。

「・・・まだ自由でいたいからな。」

それだけ言うと、俺は笑みを香奈先輩に向けた。先輩はなんだかはぐらかされたことに感づいている様子だが、あえて聞いてくること

はなかった。

「・・・それじゃしかたないか。告白はもう少し待ってる。・・・
けど、舞歌さんにはあげないからね。」

先輩は挑戦的な笑みを浮かべてそう告げると、今度こそ話を終えた。
俺もそろそろお見合い相手との対面が近づいているので真剣な気持ちに切り替えた。

10分後。

正座して待っていたので、そろそろ軽く足が痺れてきてしまいまだ
見ぬ先輩のお見合い相手に軽く殺意を覚えたとき、ようやくそいつ
は現れた。

戸を開けて現れたのは、オールバックノ黒髪にそれなりに高そうな
ヤクザ物のスーツ。あまり迫力の感じられない顔に笑みを浮かべた
男だった。

俺の第一印象は、取りあえず信用できない人物だと思った。

「ははは、すまない。少々予定が入っていてね。急いだんだが・・・
」

男は遅れたことを誤魔化すように笑い、いそいそと向かい側に座り
込んだ。

「構いませんよ。こちらこそ立て込んでいるのにわざわざこんなこと
をしてもらっているんですし。」

先輩は学校でも見たことがない、とても凜とした表情で挨拶をしていた。

「ありがとうございます。．．．ところで、そちらの少年は？」

男は礼を言ったが、今度は俺に注意を向けてきた。男．．．伊川治五郎は俺を値踏みするかのように見つめてきた。一瞬その目が鋭くなったのを俺は見逃さず、その直後ににこりと笑いかけてやった。伊川は僅かに面白くなさそうに目を細めると、先輩に向き直った。先輩は伊川がこちらを向くのを待っていたらしく、自分へ顔を向けた伊川へと微笑を浮かべた。

「彼は鎖川零時くん。私の婚約者です。」

「．．．本当ですか？ 今まで私には何の報告も．．．。」

「．．．彼がようやく身を固めてくれたのです。ですから、残念ながらこの縁談は無しということ．．．。」

「待ってくれ。」

このまま終わろうとしたとき、伊川がそれを制してきた。．．．やっぱいちゃもんつけてくるのか。メンドイな．．．。

「彼はまだ学生じゃないか。そんなのと婚約するなんて．．．。」

「黙りなさい。」

俺の格好から判断したのか、まだ俺が学生だということから切り込んできた。俺は別に気にはしなかった。ああ、アイツは結構小さい器なんだな〜とか思ったくらいだ。しかし、隣の香奈先輩はそうは思わなかったらしい。

明らかに怒っている。背中から炎のようなオーラが出てるし。

「彼は私が決めた婚約者なのです。侮辱することはこの私が許しません。」

「うっ……」

先輩の鬼気迫る気迫に気押される伊川。どうやら自分が彼女の逆鱗に触れたことに気づいたらしい。ま、これだけの迫力を出してたら誰だって分かるか。

「しかもあなたは相手が高校生だからこそ反論してきた。その証拠に私に真っ先に反論すべきなのに私には何も言わなかった。そんな小さい人間に、私がこの身を預ける気になるとでも？」

「くっ……」

これほどまで言われては、伊川には何も言えないようだった。しかも、先輩はさりげなくこの縁談を破談にさせている。これでこの男との縁談は無くなったわけだ。

すると、伊川は肩を震わせ、何かに耐えているような感じだったが、突然顔を上げた。その顔は完全に悪役の顔だった。主にやられ役の。

「このクソガキ……。人が下手に出てりゃいい気になりやがって……」

伊川は先ほどとは打って変わって汚い言葉で先輩の罵る。おっさん知らねえのか？ そんな台詞を言うヤツは大抵破滅するんだぜ。

もちろん伊川には俺の心の声なんて聞こえてる筈も無い。伊川は外に向かつて怒鳴った。

「オイ！ 手前ら！！」

すると、襖を破って10人ほどのチンピラが入り込んできた。全員鉄パイプや大小さまざまな大きさのドス、果てはマカロフなどを手に持っており、どうみても穏やかな雰囲気では無かった。

「やれやれ・・・こんなチンピラ集めて、何するつもりだ？ 皆でキャンプファイヤーでもするつもりか？」

「そうそう僕らは皆くいてきているくいてアホかあ！！！」

おお、乗り突っ込みですか。中々の腕前ですな。

「じゃ、合コン？」

「ヤクザが合コンなんかするか！！ しかもこんな面子でやれるか！！！！ 女の子びびるわ！！！」

「んじゃ誰かの誕生日パーティーか？ おめでとさん。」

「そうなんですよ・・・。」

「って違うだろーが！！！」

おお、部下まで乗ってくれたよ。しかしさつきから伊川の突っ込みが実にいいね。誰かとコンビ組んで吉本にでも行けよ。絶対ブレイクするから。

あ、伊川のイメージが崩れてるとか言うなよ？ これコメディーなんだからこれくらいの方がいいんだよ。

俺が心中で読者の皆さんに釘を刺していると、突っ込み過ぎてハアハア言ってる伊川がようやくよく本題を話し始めた。

「ハアハア・・・。いいか！ 俺は今日貴様の両親である飯田無限と飯田古風を殺しに来たんだ！」

「アンタみてえな貧弱くんじゃ半殺しにされて返り討ちにされんのがオチだろ。」

「黙れ!!! 俺とて真正面では勝てないことは分かっている。だから貴様に協力してもらおうのだ。」

「・・・私を人質にするつもり?」

先輩はこいつ等の狙いが分かり、完全に呆れていた。

ま、その反応は正しいわな。先輩を人質にするなんて、水中で鮫をおびき寄せるといふようなもんだぞ。まず確実に食い殺される。

この場合は・・・古風さんに無限さん、それから叔父さんに俺も鮫役になるか。

・・・五体満足で死ねると思うなよ

勿論目の前の身の程知らずはそんなことには全く気づかず、勝手に勝ったつもりで偉そうにしていた。

「フフフ・・・。あのく赤鬼青鬼を討ち取れば自動的に俺の組が直系筋で一番の勢力になる。そうなれば直会長の座も・・・。」

「あのよ、ちよっといいか?」

もういい加減こいつの夢物語を聞くのに飽きてきた。そろそろ夢から覚ましてやろう。

「何だ? ああ、貴様は必要無いからな。とっとと始末するか。・・・おい。」

伊川が目で合図すると、俺の近くにいたマカロフを持っていた男が俺の頭に銃を突きつけてきた。・・・えーっと、銃を持ってるのはこいつを含めて3人か・・・。

「ちよ、零時くん!! 逃げて!!!」

「逃げる? それは必要無いな。俺は先輩を守るんだからな。」

先輩が慌てて俺に逃げるように言って来たが、俺は耳を貸さなかった。

「ハハハ！ 随分と威勢がいいな。やれるものならやってみろ！」
「じゃ遠慮なく。」

俺はそう言うと、男が持っているマカロフを男の手ごと握り、そのまま握りつぶした。

まるでトマトでも握ったかのように銃は粉々になり、男の手もマカロフの破片と握りつぶされたことによりぐしゃぐしゃになっていた。

「ぎ、ギャあああああああ！！！！！！」

男は激痛のあまり、骨が完全に砕かれた手を押さえて床を転げまわっていた。

「な……！！？」

あまりの出来事に言葉が出ない様子の伊川。アイツの取り巻きも皆同じような顔をしてる。まあ、只の高校生だと思ってたら、いきなりこれだもんな。そりゃ驚くか。

「き、貴様一体……。」

「俺が何物か？ それは大事なことはない。今大事なのは……。」

俺はその場で立ち上がると、周りで戸惑っている敵に、笑顔とともに殺気を込めた視線を送ってやった。

そして、俺は目の前の屑野郎とそいつの所為でこれから怖い思いをしてもらう可哀相な奴らに宣言した。

「……手前らが俺の知り合いを傷つけようとした事実だ……」

私刑の執行を……。

第13話：お見合い・・・だったよな？（後書き）

零時：・・・え〜ついにこの作品が、ユニークアクセス1万越え、総アクセス数3万越えを達成しました。

小野：イエーイ！！ 読者の皆さんありがとうございます！！！

健太郎：ふむ、総アクセス数については明日にも4万を突破するかもしれんな。

零時：ホントに読んでくださる方々に感謝感激だ。

健太郎：・・・ところで、こういうときに一番喜ぶであろう作者はどこだ？先ほどから姿が見えんが・・・。

零時：・・・あいつならさっき十字架に磔にされてたぞ。

小野：俺さつき槍を刺して来たけど？

零時：大工のせがれだった救世主みてーな殺され方されてんな・・・。

健太郎：それでは復活は無理では？

小野：・・・花でも置いとこうぜ。

零時：・・・そうするか。

健太郎：では、今回のキャラ紹介を始めようか。今回は小野だ。

小野：俺の番だー！ Y E A A A H H H！！！！

登場人物紹介

メイン？キャラ 小野博史

身体的特徴 髪を茶髪に染めており、顔もそれなりにいいため女子にもてるが、下心満載なので長続きしない。

特技 不死身（回復が早いだけ）・お節介（何だかんだで親友を助けたりする）

趣味 エロ本などのモザイクを想像力で破壊する。脳内で。 零時

の不幸を見ること。

備考 校内の極秘サークルに所属しているらしい。かなり犯罪スレスレのことをやっているサークルのため、たまに風紀委員に捕まる。そのたびに零時が引き取って代わりに謝っている。

隼太郎：このような感じた。

小野：ちよ、俺の設定ヒドクね!?

零時：でも本当だろ。一体何してんだよお前……。

小野：それは言えん!いくらお前でもこれだけは言えない!!

零時：……まあいいさ。どうでもいいしな。

隼太郎：それでは今回はこれ位にしておくか。では。

零時：またな。

舞歌：先輩。槍をもう2本追加だ。

香奈：分かった。

古風：じゃあ私は予備を用意するわ。

作者：待ってくれ!! 確かに舞歌は出番が無かったし、古風さんも無かった! だが何故香奈がいる!! お前は出たる!!

香奈：んゝ何となく?

作者：そんなんで俺に槍を刺すなー!!!!……って待て、なんだその極太は!!! てか後ろに行くのは何でだ!!! あ、止める、そこは出すところで入れるところじゃ……アアアアアアアアアアアア……!!!???

零時：．．．南無．．．。

第14話：<審判者>と<死神>（前書き）

今回は話の都合上笑いが一切ありません。バトルのみです。
コメディなのに笑いが無いのはダメだろうとかは言わないで下さい。

第14話：<審判者>と<死神>

伊川視点。

・・・何が起こった？ 私は周りの惨状を見て呆然とする。
周囲には、私が連れてきたそれなりの腕を持つガキどもが全員倒れていた。そして、私の目の前には…………。

「さて…………神様にお祈りは済ませたか？」

実に楽しそうな笑みを浮かべた規格外の怪物が、飯田の娘を守るように佇んでいた…………。

な、何故だ…………。俺の計画は完璧だった筈…………なのに…………。

「い、粹がるんじゃねえぞクソガキ！」

「やっちまえ!!!」

あのガキが堂々と宣戦布告をかますと、すぐに他のチンピラが向かっていった。チンピラってのは舐められんのが一番嫌いな連中だ。あんなこと言われりゃ切れるのも無理ねえ。

俺はあのガキが袋叩きに遭うのをじっくり見てやるうと思っていた。

まず、一番最初に短ドスを持った奴がガキに近づいて、右手に持ったドスを左下から振り上げるように切りつけようとした。

「死ねやあー!!」

しかし、振り上げようとしたときに、ガキの片腕が掻き消えた。と思ったときには、ドスを振り上げようとしたまま固まっているチンピラの顔面に、ガキの拳がめり込んでいた。

チンピラがゆっくりと倒れる。どうやら鼻を折られたらしく、ガキの拳にはチンピラの血がこびりついていた。

その光景を他のチンピラは呆然と見つめていた。少し離れた場所で傍観していた俺ですらガキの拳の動きは見えなかったのだ。近寄っていたチンピラはかなり驚いているのだろう。

そして意識を刈り取られたチンピラが畳の床に倒れた瞬間、あのガキは消えていた。恐らく高速で動いたのだろうが、誰の目にも写ることの無いスピードで移動していた。

「あん!?!」

「どこだ!?!」

周りを囲まれていたにも関わらず、忽然と消えたガキをチンピラ達は周囲を見回して探す。

しかし、次の瞬間には全員がガキの居場所に気づいた。

「ごぼー!!」

「が!?!」

あのガキはこの部屋の入り口に立っていた、銃を持っている2人へと向かっていたのだ。

1人は既にやられており、体をくの字に曲げて、玉砂利の庭へと吹

き飛んでいた。もう1人はガキの上段回し蹴りにより、後頭部を蹴られて一瞬で気絶していた。

今度はチンピラ達の動じることは無く、ガキねと向かっていく。しかし、またもあのガキは高速で移動してチンピラ達の視界から消えた。

そして、一番近かったチンピラの腹に拳を叩き込んでいた。

「か・・・はっ・・・。」

恐らく鳩尾に入ったのだろうか、そのチンピラが崩れ落ちていく前に、ガキは自分の後ろに向けてバックキックを放っていた。

「ぐほお!!」

後ろから木刀で殴りかかろうとしていたチンピラは、血を吐きながら庭へと吹き飛んでいった。

ど、どれだけの威力の蹴りだ・・・。

俺が成人男性が軽く吹き飛ぶ威力の蹴りを平然とかましたガキに戦慄している間、残りの4人が一気に襲い掛かった。

「オラア!!」

長ドスを持ったチンピラが勢い良く振り回すが、ガキは軽く後ろに下がるだけで避けていた。

「くたばれえ!!」

ガキの後ろから、バットを斜めに振りおろしてきたチンピラは、振り下ろしたバットを片手で止められ、驚いている間に腹に膝を叩き込まれ、血反吐を吐きながら床に沈んだ。

「うおおおおお!!!」

両手に折りたたみ式の警棒を持ったチンピラは、両手の警棒を振り回し、ガキを部屋の隅に追い込もうとする。しかし、ガキはその場から一步も動かずに警棒を避けていく。

頭を狙われたら頭を僅かに動かして避け、胴体を狙われたら体を曲げたり、向かってくる警棒に僅かに手を添えて、ほんの少しの力を掛けて警棒を逸らしてしまう。足を狙っても、同じように手で逸らされてしまう。

段々と振り回すのに疲れて、警棒を振り回しているチンピラの動きが鈍くなっていく。

その時、残っていた2人のチンピラがガキの後ろから襲いかかろうとする。そのとき、俺は見た。・・・ガキの顔に、笑みが浮かんでいたのを・・・。

「<地震震>。」

ガキはそう呟くと、片足で畳を踏みつけた。・・・実際には、その足はまるで振動でも起こしているかのように小刻みに動いていたが、ガキが畳を思い切り踏んだ瞬間、部屋全体が揺れた。いや、ガキの一撃で揺らされたのだ。

足場を急に揺らされ、思わずチンピラ3人の動きが止まった。その瞬間を、ガキは逃さなかった。

正面で警棒を持ったまま固まっているチンピラにアップパーをかまし、チンピラを天井にぶつける。

天井にチンピラが当たり、落下する前に2人のチンピラに近寄る。

「<連刀脚>！」

ガキは片足を上げると、目にも止まらぬ速さの蹴りを連続で繰り出す。蹴りは、まるで刀のような鋭さで繰り出され、それぞれ顔と腹に2発づつ食らったチンピラ2人は、もう一つあった入り口の襖を突き破って外へと吹き飛んだ。

「一丁上がり！」

10人いた武闘派のチンピラは、かすり傷一つつけることすら出来ずに1分足らずで全滅に追いやられた。

俺はそれを、見ていることしか出来なかった。

零時視点。

さてと……、こいつはどう料理するかな……。

俺は香奈先輩の前に立ち塞がりつつ、目の前で驚愕と畏怖に満ちた目を向けてくる伊川の処分を考えていた。こいつは先輩を危険に晒したのだ。只では済まさない。

俺がそんなことを考えていると、突然何かを思い出したような顔をして、先ほどからの切羽詰った雰囲気から一転して余裕のある笑みを浮かべる。

ま、何かは予想がつくけどな……。

俺はこいつの最後の希望をぶっ壊すことにした。

「増援ならこねーぞ。」

「!? な、何だと!?!」

おーおー驚いてんな。無理もねえか。

「手前みてえな奴は、大概頭数を揃えるか強力な助っ人を用意するかのとつちかだ。もし後者なら既にここにいるだろうから、前者になるってわけだ。」

「だ、だがそれと増援がこないのとは関係ないだろう!」

んぐぶつちやけ関係は無いんだけどな。けどま、今回は運が悪いとしか言えないな。あの人がいるときに来たんだから。

「まあ、連絡でも入れてみるよ。多分後悔するだろうから。」

俺が親切にも言ってやると、伊川は携帯を出してどこかに連絡を入れ始めた。

後ろに居た先輩が心配そうに聞いてくる。

「ねえ、大丈夫なの？ もし増援が来たら……。」

「それなら多分大丈夫だ。もうあの人が終わらせてるだろうから。」

「……あの人って?」

伊川視点。

くそ、くそ、くそ!

まさかあのガキがあれほどの実力者だったとは……道理で婚約者選ばれたわけだ!!

こうなったら近くの廃ビルに待機させていた奴らを投入してやる……。

しかし、向こうに待機させている奴らのリーダーは一向に携帯に出

ず、俺は焦燥に駆られていく。
早く出る！この能無しども！！
俺が内心で毒づいていると、ようやく電話が繋がった。

「おい！ 何で早く出な『ハツハツハ、これはすまなかった。こちらも少々忙しかったのね。』」

な！？ こ、こいつは誰だ！？ こんな奴はいなかったはずだ！！

『ハツハツハ、随分と焦っているようだね。ああ、ここにいた君の部下達は全員半殺しにしておいたから、そちらに増援が行くことは無いぞ。』

俺の心中を見透かしたかのような発言をする謎の男に、俺は恐怖を覚えていた。

極道世界に身を置いて、何度か危険な目に遭ってきた。そのお陰で鍛えられた第六感が告げている。こいつは、バケモノだと。

「ど、どういうことだ！！」

俺は内心の恐怖を必死でかみ殺して、強気な発言をする。しかし、電話の相手は全く動じなかった。

『ふむ、なら証拠を聞かせよう。・・・おい、何か話せ。』
『ヒ、ヒイイ！！！？ く、来るなあ！！！！！！』

携帯から聞こえてきたのは、待機していた奴らの中でリーダーを務めていた男の声だった。事が始まる前は俺に対しても傲慢に振舞っていた男は、まるで怯えた子供のように悲鳴を上げていた。

『く、来るな、こないでくれ……!』

突然リーダーだった男の声が途切れた。そして次の瞬間、何かごとつもない力で壁に叩きつけられたような轟音が携帯から聞こえてきた。

『すまないな。どうやらやりすぎてしまったようだ。』

次に聞こえてきたのは先ほどの男の声だった。まるで何事もなかったような男の態度に、我知らず俺の背筋は凍っていた。

「き、貴様は……。」

震える声で何とかそれだけ出すと、電話口の男は平然と答えた。

『私はそこにいる飯田香奈の婚約者の叔父さ。まあ、昔はくジャツジメント>などと呼ばれていたがね。』

<ジャツジメント>。その言葉を聞いて、俺の思考は完全に凍りついた。

裏の世界とはある意味単純だ。簡単に言えば「力」を持つものが成り上げられる。権力でも腕っ節でも何でもいい。ともかく多くの他人を屈服させるだけの力を持つ者が実力者だ。

だからこそ、裏の世界では「鬼門」と呼ばれる奴らがいる。余りの強さを持ったため、刃向かうものは全て滅ぼされる。だから誰も逆らうことが出来ない。

その中で、<審判者>^{ジャツジメント}とは最強にして最悪の人物と言われていた。

「ば……馬鹿な……。」

それが、今電話越しにいる。絶望が具現化したような存在が、俺の敵となっている。

もはや、計画が成功する確率は0だった。

電話からは、相変わらず楽しそうな声が聞こえてくる。

『ハツハツハ。では私はそちらに戻るとしよう。君の処分は私の愛弟子が下すだろうから、私がそちらに着く頃には君の意識は無いだろうがな。』

それだけを告げると、電話は切れた。

そして、あのくジャツジメントの親戚であるガキの方を向くと、ガキは獲物を刈る狩人の目で俺を見ていた。

「さて、それじゃあ……逝ってもらおうか。」

その一言で、俺の理性は消え去った。

「う、うわあああああ！！！?????!?」

俺は叫びながら、服の下に隠していたトカレフを抜こうとするが、完全に銃を出す前に、いつの間にか近づいていたあのガキが俺の右手首を殴りつけていた。

ゴキリ、と鈍い音がして、激痛とともに俺の右手首の関節が見事に破壊された。

「がつ!？」

「覚えとけ。俺の名はく死神^{デス}。貴様に終わりを告げる者だ。」

ぞっとするような声で告げてきたく死神は、正拳突きを打つかの

ように両腕を引き、腰を落として構える。

「<浄滅拳>!!!!」

その言葉とともに、<死神>の拳は消えた。正確に言うなら見えなくなつた。

高速で打ち出される拳の嵐は、一発の外れることなく俺の体へ叩き込まれていく。その一つ一つがとてつもなく重い一撃で、次第に俺の体は拳の衝撃により宙に浮いていた。しかも全く止むことがないため、体は浮いたままだ。最早、意識を繋ぎ止めることは無理だつた。

香奈視点。

零時くんはラッシュは続いている。伊川はもう人形のようにされるがままだ。

そのとき、突然零時くんはラッシュを止めると体を思い切り引いて、右手を掌底の形にした。

「オオラアアアアア!!!!!!」

零時くんは一際大きな雄叫びを上げると、伊川へ掌底を叩き込んだ。神速のスピードで繰り出された掌底は、丁度落下していた伊川の胸に直撃して、伊川を家の塀まで吹き飛ばしていった。

塀にぶつかった伊川は、壁にヒビを入れるほどの力で叩きつけられた後、庭へと倒れた。

これで、このお見合い騒動はお終いだ。

「零時くん。ご苦労様。」

私は伊川を吹き飛ばした後立ったままでいる彼に近寄って、労いの言葉を掛けた。彼はこちらを向くと、少しだけ笑ってくれた。

「んじゃ、皆のところに行こうぜ。」

今はまだ、私は彼にとって特別ではないのだろう。その証拠に、すぐに皆の下に行こうとする。今はそれでもいい。まだ慌てることはない。けど、いつか……。

「うん、行きましよう。」

いつかきつと、彼にとってかけがえの無いものなってみせる。私はそんなことを思いながら、彼の後ろについていった。

第14話：＜審判者＞と＜死神＞（後書き）

零時：今回は疲れたな。

小野：作中で初めてお前が本格的な喧嘩をしたもんな。

舞歌：くっ、私としたことが、そんな場面を見逃すなんて……。

香奈：私はすっかり目に焼き付けて来たわ。もう凄かったわよ、チンピラ達が何人も吹き飛ばされたりして。

舞歌：くっそー！ー！ー！！！！

零時：……そんなに見たいもんか？

臧太郎：私も裏方で活躍していたぞ。

小野：2人とも裏の世界に関わりあったのかよ……。

零時：俺は叔父さんのせいだよ。「修行の一環だ。」とか言われて色々やらされたんだ。

臧太郎：まあ、ここであまり言うことは出来ないがな。

作者：その辺はまた書くことがあるかもしれないから、言わないでくれ。

舞歌：くそう……。どうにかして見なければ……。

零時：まだ言ってるのかよ……。

古風：舞歌さん。心配ありませんよ。

舞歌：古風さん……。一体どういうことだ……。

古風：ここに先ほどの戦闘シーンを撮ったビデオがありますから。

零時：どうやって撮ったんだよ！？

香奈：……。

零時：香奈先輩？ 何で手を上げてるんですか？って良く見たら着物を帯に隠しカメラがある！？

古風：さあ、いくら払いますか？

舞歌：1万！

三上：1万5千！！

零時：って三上さんいつの間にな！？ アンタまで買おうとすんな！！

三上：うるさい！！　こんなレアモノ、逃してたまるか！！　2万！！

舞歌：5万！！！！

作者：え〜と、競売が終わりそうにないので無視していきます。感想を書いてくれた皆さん、ありがとうございます！！　皆さんからのアドバイスはきちんと生かしていきますので、これからもよろしくお願いします！！

作者：次回からは零時達の学校を舞台にしていくので、コメディを強く出していく予定です！！

小野：それじゃあこの辺で！！

舞歌：7万5千！！！！

三上：9万！！！！

零時：お前らいい加減にしろお！！

第15話：零時の1日・前編

お酒の飲みすぎには注意しよう。

零時視点。

「・・・頭痛ええ・・・。」

只今の時刻、午前7：10。俺は二日酔い気味の頭を押さえつつ、4人分の弁当作ってる。・・・何で4人分かって？ それはね、先輩と舞歌の分と、三上さんの分も含まれてるからさ。

因みに三上さんはリビングで唸ってる。俺より酷い二日酔いに悩まされているんだろ。しばらく苦しんでくれ。

俺は弁当を作り終わり、エプロンを脱いでキッチンの入り口にあるハンガーに掛けておくと、リビングへと向かった。

三上さんはリビングのソファで頭を押さえながら苦しんでいた。まあ当然だろ。俺は床に大量に転がってる酒瓶を見て思う。

「う〜〜ぎぼぢわるい〜〜、零時〜〜助けてくれ〜〜。」

「昨日あんだだけ飲んだツケです。しばらくそうしててくれ。」

「鬼〜悪魔〜〜。」

何とでも言う方がいい。俺はロクに寝てねえんだ。このくらいの仕返しはさせてもらう。

昨日、先輩のお見合い騒動を終えた俺は屋敷内にいた先輩のところの組員の皆さんによってたかっってお礼を言われた。それも先輩を守ったことについては驚くほど少なく、寧ろ俺が先輩の婚約者ということに礼を言われることばかりだった。

何でも、組員の皆さんは先輩が高校生になっても恋人を全く作るうとしないのを心配してたらしい。・・・俺が言うのもなんだが、余計なお世話だろ。

そんなときに俺が現れたもんだから皆さん大分喜んだらしい。「お嬢をよろしくな！」とか「泣かしたら承知しねえぞ！」とか散々言われた。

その後、テンションが上がり続ける組員さんが、俺を昼間から酒盛りで点き合わせてきたのだ。

古風さんは面白がって止めようとしないうし、舞歌が止めようとしても無駄だった。聞いちやいねえ。

最後に先輩が止めようとしたけど、何か焼酎を一气飲みして出来上がっちゃってる組員さんに何かを耳打ちされると、顔を真っ赤にして黙ってしまった。あなたが最後の希望だったのに！！

んで、最終的には夕方に大量の空瓶と酔いつぶれたおっさんどもの死体が屋敷に転がることになった。

その後、途中で酔いつぶれた先輩は古風さんに任せ、舞歌と屋敷を出た。ああ、そういえば無限さんはずっとトランクに閉じ込められたままだったらしく、無限さんが閉じ込められているトランクからはすすり泣く声が聞こえた。・・・可哀相なんで鍵を開けておきました。

舞歌は俺を家まで送ってくれ、そこから一人で帰っていった。送ろうかと提案したのだが、何故か断られてしまった。何故？
そして家に入ると・・・。

〈回想〉

「ただいま……って酒クサ!?」

「む、遅いぞ零時! こちらはもう初めてしまったぞ!」

「零時……てめへおせへぞ……」

「ちよつと!? 何で叔父さんまで混じってんですか!? うお、み、三上さん体に絡みつかないでください!! 何か柔らかいものが!」

「うるへ……いいから飲みやがれ……」

「オラとつとと飲まんか!」

「待て!! 何で無限さんがいるんだ!! あんたさっきまで向こうにいたろーが!! 三上さんも離してくれ!!」

「ガハハ! 臆に呼ばれてな。たまには親友と酒盛りするのもいいかと思つての!!」

「というわけだ! 今日は何分にも楽しもうじゃないか!」

「アンタが飲むまで離さない!」

「明日学校だから!! ああもうちくしょー……!!」

〜回想終了〜

と、言うわけだ。あの後夜中まで付き合わされた拳句、俺1人で片付けをしたのだ。しかもまだ終わってない。鬱だ。死のう。

「零時……」

俺が鬱になっていると、三上さんが背中中に引っついてきた。ちよつと重いかな……。

「誰が重いつて〜?」
「ここで吐くよ〜?」

「止めてくれ頼むから!! 朝から俺の心を折るうとしないでくれ!!」

マジでそんなことされたら折れるから！ 何か精神的なものが！！

「じゃあ助けてくれ……。もうやばいんだ……。」

「はあ……。ちょっと待っててください。後人の心を勝手に読まないでくれ。」

この後、三上さんにザメ八を飲ませて二日酔いから回復させると、朝食を済まして学校に行く準備をした。え？展開が速いつて？気にすんな。そういうのは作者に言ってくれ。

んで、只今の時刻は8:00。今日は部活を休むつもりなので、もう少し遅くになってから登校するつもりだった。だっただよ……。

「オラ！早く行くぞ零時！！」

「三上さんだけでいいでしょう……。俺はもう少しのんびりしてから行きます。」

「貴様の意見など聞いておらん！！」

「痛い痛い！！ 耳引つ張らないで下さい千切れる千切れる！！」

こんな感じで、俺は無理やり三上さんと一緒に登校することになりましたとさ……。

「うっ……。耳が……。」

「あーもう高校生にもなつてうじうじすんな。過ぎたことなんだから忘れる。」

「まだ数分前のことですよ！ つーか血出てませんかコレ！？ 何

か耳の付け根が濡れてるんですけど!!」

「うるせえな。いい加減黙らねえとシメるぞ?」

「生意気言いましたすいませんだからヘッドロックを止めてくれ」

「!!! 頭が割れてしまっうー!!!」

三上さんはしばらく俺の頭を砕きかねない勢いで締め上げていたが、何とか離してくれた。ヘッドロックでギブアップが取れるよあの人アンドレ・ザ・ジャイアントかアンタは。

「ぐああ……。頭が……。」

「アタシに楯突いた罰だよ。」

「俺はまだ二日酔い治ってないんすよ……。」

俺はザメハが効かない体質なので、二日酔いは自力で治すしかないのだ。ああ、くらくらするよう……。

俺のHPは既に一桁。もう何食らっても一撃死だぜ。拳王様みたいに天に昇れそうだよ。

頭を押さえておぼつかない足取りで歩いている俺を見て、流石にやり過ぎたかと思ったのか横から支えてくれた。

「う……。すいません……。」

「まあ、アタシもやりすぎたみたいだしな。学校見えてきたけど、保健室行くか?」

「保健室は止めてくれ……。寝てる間に何やられるか分かったもんじゃねえ……。」

この学校には変わった特徴がある。それは、教職員に変人奇人が集まっていることだ。三上さんは実は教員達の中ではまともな方で、他の教師はさらに人格が破綻しているのだ。

んで、この学校の保険医は、残念ながら変人の部類に入る。特に、

俺は既に被害を幾度と無く受けているので、なるべくならお世話になりたくない。

「だが、こんだけ調子が悪けりゃ、後でどの道世話になるんじゃないか？」

確かに……。今の俺は正直ダウン寸前だ。三上さんに支えてもらわなければまともに歩くことすら出来ない。これでは途中で倒れる可能性が高そうだ。

「……じゃあ、舞歌か誰かに付き添い頼みます……。取りあえず1人では絶対行かない。」

「お前がそう言うならいいけどよ……。なんでそんなに保健室に行きたがらねえんだ？」

「……ノーコメントです。」

俺は三上さんの疑問を適当にはぐらかしつつ、校門へ近づいていく。すると、校門が少し騒がしいのに気づく。

「ありゃ、今日は風紀委員の一斉取締りがあつたっけ。」

「マジですか……。」

ウチの学校の風紀委員はかなり気合が入っている。何でも校内の迷惑生徒を全て取り締まることを目標にしているらしい。だったら先生方も取り締まってくれ。下手な不良よりやばいのがいるんだからこの学校。

まあ俺の心の声は聞こえることはなく、俺は三上さんに支えられながら風紀委員が検問を開いている正門に向かう。

「スカートが短い！ 減点！！」

「ピアスは校則違反だ。減点。」

「学ランの下はカッターシャツを着る！減点！！」

「漫画なんて持ってこない。減点だ。」

「えっと・・・このネクロノミコンって本は何？」

正門で通りかかる生徒を片っ端から減点しているのは、風紀と書かれた腕章をつけている2人の男女だった。ていうか待て。誰だ魔道書持ってきてる危険人物は。しかも危険度馬鹿みてえに高い奴。

「おゝす・・・。頑張ってたな。」

「あ！ 鎖川零時！！ あなたなんで三上先生と一緒にいるのよ！

！！」

「うるせえぞミーミー。頭痛えんだから黙れ。」

「その名で呼ぶなー！！！！」

俺は目の前でギャーギャー騒いでる、西京高校2年女子風紀委員である中野美弥なかのみやを鬱陶しそうに見た。

ウェーブの掛かった長髪にヘアバンドをつけている、いつも騒がしい印象がある彼女は、時々小野を捕まえるために俺に助けを求めてくる人物だ。今朝の検問のように、大変校則に厳しい人物で、俺もたまにこの校内一やかましい捕まることがある。

一応先輩なのだが、なんか敬語を使う気になれないのでタメ口聞いている。

「む？ 鎖川か。随分と調子が悪そうだが、生きてるか？」

「死んじゃいねえって。」

「じゃあゾンビか。あいにくと神父に知り合いはいないんだが・・・」

「生きてるよ！！ 何で死んでることを前提にして話すんだよ！！」

・・・ドモリすぎだと思っただが。ともあれ、いつまでももたれてるわけにはいかねえんだよな・・・。中野や永井にもこれ以上迷惑かけたくねえしな。しかし体はまともに動いてくれやしねえし、保険医に1人で会うのはごめんだしなあ。どうするか・・・。

「じゃあ中野。鎖川を保健室に連れて行ってやれ。」

永井が思わぬ助け舟を出してくれた。つてオイ、中野。驚いて両腕に力を込めるな。サバ折りになってしまう。

「え、ええ！？　で、でも検査が・・・。」

「俺1人で何とかしよう。それに・・・それほど弱っている鎖川を見捨てるのか？」

「わ、分かったわよ！　付き添えばいいんでしょ！？」

ヤケクソ気味に叫ぶと、中野は俺に肩を貸しながら、保健室に連れて行った。

第15話：零時の1日・前編（後書き）

零時：あれ、今回は舞歌とかのいつもいるメンバーがいねえな。

作者：あいつらが来るといつも俺が酷い目に遭うからな。今回ぐらい生き延びさせてくれ。

中野：で、何で私達がここにいるわけ？

永井：納得のいく理由を述べてもらおう。

作者：いやあ今回が初登場だからな。何となく出てもらうことにしたんだ。

中野：・・・予想通りで寧ろつまらない。

作者：なにおう！？ そんなこと言う奴は人物紹介しちまうぞ！？

じゃ、よろしく！！

永井：じゃあ中野の紹介を始めるか。

中野：ちよ、待ちなさいよ！！

登場人物紹介

ポジション不明 中野美弥。

身体的特徴 身長167センチ。ショートカットの栗色の髪に、少し濃い茶色の肌。つねに風紀委員の腕章をつけている。

特技 蹴り（高威力。主に小野が食らう。）・大きい声を出す（本気だと窓が割れる。）・隠されている物を見つける。

趣味 校則違反者を見つける・妄想（ちよくちよくピンク色になる）
・蹴りのトレーニング

備考 朝はある人物が写っている写真を20分ほど眺めている。家に帰っても眺めている。

永井：とまあこんな感じだ。ん？何だ中野？顔が真っ赤だぞ？

中野：な、何でこんなこと知ってんのよ！？特に備考の欄！！

零時：妄想なんてしてんのか……。意外だな……。

永井：もつと意外な事実があるぞ。実は……。

中野：止めて止めて言わないで……！！

永井：ま、待て！ぐああ……！！

零時：うっわ……。すげえ蹴りだな……。

中野：ハア……。ハア……。次は……！！

作者：わー待て待て待て俺は何も知らないからお前が「ピー」の写真をわざわざ写真立てに入れてるのは知らないから！！

中野：伏字だからって許すと思っただのか……！！

零時：……。あゝ中野と作者が追いかけてここを始めたので、ここらで切り上げます。今後ともよろしくな。

作者：感想・意見待ってま……す……！！

中野：待て……！！！！！！！！！！

零時：……。結局追っかけられてんじゃん……。

第16話：零時の1日・中編その1（前書き）

すいません……。夏休みの怠惰な時間が俺の創作意欲を……。

第16話：零時の1日・中編その1

中野視点。

どうも。風紀委員の中野よ。今日は月一の一斉取締りの日だったんだけど、思わぬことになったのよ。

私は今、体調が悪いらしい鎖川を連れて保健室に向かっている。別にそれだけなら平気なんだけど、い、今私と彼は体が密着してるのよ。どうやら相当酷いらしくて私が支えてあげないとまともに歩けないのよ。べ、別に邪なことは考えてないんだからね！？ 意外と筋肉が付いてるとか、安心するような匂いがするとか考えてないわよ！？

「悪いな。わざわざつき合わせちゃって。」

私が頭の中で誰かに弁解を述べていると、鎖川が謝ってきた。

「べ、別にいいわよ。困ってる人を助けるのは当然のことだし。」

「そっか……。サンキューな。」

彼からの礼を聞いた私は、気恥ずかしくなったのでそっぽを向いた。今の私は顔を真っ赤にしているのだろう。自分でも顔が熱くなっているのを自覚している。

そうこうしている内に、保健室の前に来ていた。私は大分疲弊している狭川に代わってドアをノックした。

「すみません。体調不良の生徒がいたので連れてきました。」

「どうぞ。入ってきて。」

ノックをするとすぐに中から妙に色っぽい声が返ってきた。保険医

の先生は去年新しい人に代わったらしいのだが、普段から保健室を利用しない私は新しい保険医の先生に会うのは初めてだった。私は「失礼します。」と言いながらドアを開けて、鎖川を支えながら中に入った。

中にいたのは、白衣の下に紫のブラウスを着込み、どうみても男を誘惑するためにしか思えないくらいに短いスカートを履いた美人の女性だった。

私が思わず見惚れていると、彼女は私が支えている狭川を見て苦笑した。？ 何で？

「あら、誰かと思えば零時くんじゃない。随分ときつそうね？ お姉さんが癒してあげましょうか？」

「うるせえ。ニューハーフに癒されるのはごめんだ。」

・・・え？

「今なんて・・・。」

「ああ、こいつは谷田優貴たにだ ゆうき。ニューハーフなんだよ。元は男だ。」
「いいじゃない。今はきちんと女なのよ？」

そう言うと彼女は自分の胸に手を当てた。その胸には確かにふくよかに膨らんでいて、本当に男だったのか疑わしく思うほどだった。それに、彼女は一つ一つの動作が洗練されていて、どうみても「大人の女性」と言った感じなのだ。男だったなんてどうしても信じられない。

「フフ、ビックリした？」

私が驚きの余り呆然としてみると、谷田先生が微笑を浮かべながら話しかけてきた。

「は、はい……。」

私はまだシヨックから抜け切れていないので、生返事を返すことが精一杯だった。

そんな私を見て、谷田先生は可笑しそうに笑っていた。

「可愛いわねえ。食べちゃおうかしら。」

「止めるって……中野、とつと椅子にでも座らせてもらえろとありがたいんだが。」

「え？ あ、うん……。」

彼に言われて、私は近くの椅子に彼を座らせてあげた。……ちょっと残念だか思っていないわよ！？ もうちょっと体温を感じてたかっただけよ！！

彼を座らせると、谷田先生が診察をするために鎖川の近くに寄っていった。

「さてと、それじゃ診察するわよ。」

「待て。何故俺の顔を驚掴みする。そして当然のようにキスしようとするな！！！」

「ちえ……。じゃあ今度は体温測るわよ。」

「よし中野。その体温計を取ってくれ。じゃないと額に手を当てるフリをして俺の目を隠しているこいつに何をされるか分からん。……おいボタンを外そうとするな。」

……これ診察の名を借りたセクハラでしょ！！

「せ、先生！！ 何やってるんですか！！！」

私はいつの間にか鎖川くんを押し倒して服を脱がそうとしている谷田先生に向けて叫んだ。谷田先生は不思議そうに首をかしげながら私の方を見る。

「ん〜と・・・ほら、据え膳食わぬは何とやらって言うでしょ？」

「あ、成る程・・・って何言ってるんですか！！！」

わ、私としたことが先生のペースに巻き込まれるなんて・・・。私は精神に深いダメージを受けてしまい、その場に手を付いてしまった。

「ちよ、おい中野！！ 気持ちは分からんでもないが出来れば早く助けてくれ止めるベルトを外そうとするなー！！！！！」

「いいじゃない減る物じゃないんだし。」

「減る！ 俺の中の大事な何かが減ってしまう！！！」

「んもう往生際が悪いわねえ・・・。あ、中野さん邪魔しないでね？邪魔したら・・・。」

そう言うと、谷田先生は未だダメージで呆然としている私に一枚の写真を見せた。こ、これ・・・！？

「な、何で・・・。」

「フッフ、秘密よ。」

色々と突っ込みたかったが、コレを知られては私にはどうしようもない。敗北感に打ちのめされつつ、私は保健室を後にした。

・・・鎖川の悲痛な叫びを背に受けつつ。

「お、おいどうした中野？ 何で出て行くこととするの？ねえちよっところち向けよおい！ 頼むからヘルプミー！！ ああ！ 行くな、

頼むから助けてくれ――！――！――！

ナニモキコエナイ。

第16話：零時の1日・中編その1（後書き）

作者：……すいません、何で俺簀巻きにされてんの？

三上：手前が折角の夏休みに話を全然書かねーからだよ。

零時：三上さん、背中から鬼のオーラが出てますよー。

小野：弓槻さんからお気に入りだって言われたんだから、はしゃいでるんだよきつと。

零時：秋の奴も言ってたしな。あいつ年上が好みか？

三上：何話してんのかな？君達は？

零時：いえいえいえナニモハナシテイマセンヨ！？ ホントダヨ！？

小野：恐怖で声が裏返ってるぞ！！

三上：丁度いい、作者は1週間放置の刑。お前らは……。

零時：（速攻で逃げ出す。）

小野：（逃げ出そうとして零時に足払いをされる。）

三上：私刑じゃー！！！！！！

小野：零時でめ……ぎゃああー！！！！

零時：すまん……俺のために散ってくれ……。

作者：すいませ〜ん、ほつとかないでくれ〜。俺は寂しいと死んじゃうんだよ〜。誰か〜……。

第17話：零時の1日・中編その2

誰にだって言いたくない過去はある。

零時視点。

「ハア・・・ハア・・・、いい加減にしろつての。」

「うっ〜零時がぶつた〜」。

今俺の目の前には頭に出来たたんこぶを涙目で押さえている谷田が床に座り込んで、俺はベットに上半身裸で座り込んでいる。

中野に見捨てられた後、俺は服を脱がされながら何とか保健室の戸棚にあつた、谷田特製の万能薬「加賀屋くんX」を取り出し体調をある程度回復させた。その後上半身を全部脱がせて今度はベルトに手を掛けようとしていたバカ谷田に拳骨をお見舞いしてやったのだ。ああ疲れた。結果的に二日酔いは治ったけど、その代わりすげえ疲れる羽目になった。

「うっ・・・なにも殴ることはないじゃない・・・。」

「うるせえ。体調最悪なのに無駄に体力使わせた罰だ。」

「だって折角のチャンスを逃すのはダメじゃない?」

「同意求めてくんない。」

・・・反省の色無し。

しばらくぐちぐちと言っていたが、やがて諦めた様子でため息をつくと、部屋の入り口まで行き内側から鍵をかけた。そして椅子を持つてきて俺のすぐ前に座ると、フレームにコードが繋がれている眼鏡を取り出して掛ける。

「じゃ、点検するから外して？」

谷田に言われ、俺は左手で自分の右肩を掴む。そしてそのまま背中側へと捻る。すると、俺の右肩からカチリという、どう考えても人体から聞こえる筈が無い音が聞こえ、俺の右腕が肩ごと外れた。俺は外した腕を谷田に渡す。谷田もこのことを知っているため特に驚くことは無く平然と俺の腕を受け取り、内部の透視や表面の細かな傷などをナノサイズで調べられる多目的センサーでもある眼鏡で俺の義手を調べていく。

「傷はあるけど・・・大してダメージは蓄積されてないか・・・。」

義手を調べている谷田の表情は、先ほどとは打って変わって真剣なものになっている。

実は谷田は裏の世界で有名な義体師（義手や義足を作る人のこと。）で、俺の義手を作っている人物でもある。性格はともかく腕は確かのため、俺は世話になりっぱなしである。

谷田が義手の点検をしている間、俺は特にやることも無いため、義手の外れた右肩を見つめていた。

腕が外れた俺の肩口は、硬質な機械の断面になっている。これを見ると、いつも俺は心の底から軋むような音が聞こえる気がする。まるで欠陥品のロボットが無理して動いているかのように。

俺は1年前に起きたある出来事により、右腕をこっさり失ったのだ。その出来事の全容を知っているのは叔父さんと親父、それから俺の

義手を作ってくれた谷田の3人ほど。家族は俺の右腕が義手なのを知っているが、どうしてそうなったのか詳しい理由は知らない。父さんが俺に気を使ってくれて聞かないように言ってくれているからだ。

正直ありがたい。この話は余り思い出したくないからな……。

「うん、それ程ガタはきてないわね。 <武器庫>も使っていないみたいだし、これならばらく交換しなくてもいいわよ。」
「そっか。」

俺は谷田から義手を返してもらうと外すときと逆の手順を行い装着する。装着した切れ目などは全く無く、義手だということを感じさせないこの辺にも谷田の技術の高さが現れている。

試しに拳を握ったり腕を振り回したりするが、特に違和感は無かった。うん、いい感じだ。

防弾・耐爆・耐熱性に優れたこの義手にはいくつかのギミックが仕込まれている。まあここでは言わんけどな。危険なヤツもあるし。さて、そろそろ教室に行くかな。舞歌達と話でもしたいし。

ふと、谷田がこちらを見てにやついてるのに気づいた。なんだ、そんなに俺の裸が好きなのか？

俺が怪訝な顔になったのを見て、谷田はさらに笑みを浮かべた。

「今、零時が凄く楽しそうな顔してたからついね。」

「は……?」

そんな顔してたのか俺……。

「笑顔ってわけじゃないけど、充分楽しそうだったわよ。何かあったの?」

「……別に、なんにもねえよ。」

何だか舞歌や先輩のことを言うのは気恥ずかしいので俺は適当にはぐらかす。しかし、谷田には大した効果はなかったらしい。服を着ようとした俺の背中に張り付いてきた。

「んふふ、いいじゃないお姉さんに話してみなさいよ〜」

「ごめん、未だに『お姉さん』と『お兄さん』どっち呼ぶべきか迷ってたんだわ。」

「お姉さんで。」

「・・・ダメだ言えねえ・・・。どんだけ頑張っても言えねえ・・・。」

「ちよつと、それはないんじゃないの？」

ぶーぶー、と顔を膨らませて谷田は俺に文句を言ってくる。まるで出来の悪い姉に絡まれてるみたいだな・・・。1年前、俺がく壊されたあの日から、この人はいつもこんな感じだった。

わがままでセクハラばかりしてきた、でもいつも俺を支えようとしてくれる。本当の家族のように接してくれる。

本当は感謝しきれないくらいの恩を感じてるけど・・・。

「どうせなら『おねえちゃん』で満面の笑顔で言ってくれればいいわね。・・・う、想像したら鼻血が・・・。」

・・・こんなハアハア言ってる怪しい人に感謝なんて言えません。

「んなこと誰がするか。」

あほなことを言っている谷田にはもう一度拳骨を落としてやり、「いったーい！」とか喚いてるのを華麗に無視して改めて服を着よう

とする。が、またしても着替えは邪魔されることになった。

「ん……？ 誰だ？」

入り口から何物かの気配を感じて俺は手に持ったシャツをまたベツトに置いた。少し集中して気配を探ると、どうやら2人ほど入り口に立っているようだ。ドアを開けようとしているが鍵が掛かっているため入ることが出来ず困ってるらしい。

かといって上半身裸の自分がこの状況で入られたら非常に困る。確実に良からぬ誤解をされてしまう。

「ーわけで、鍵は開けません。すまんがそこに居るお2人にはもうしばらく待ってもらおう。着替えを早くしないと。」

そのとき、俺は入り口のドアからカチリという音が聞こえた気がした。え、何その音？

俺が不吉な音を耳にして慌ててそちらを向くと、どうやったのかスライド式のドアを開けて見知らぬ女子とその女子に支えられて歩いている女子が入ってきていた。

「すみませ〜ん、調子悪いやつ連れてきたんだけど……。」

あゝ支えてる方の女子が俺見て絶句してる。もう片方は……。

「……お邪魔でしたか？」

盛大に誤解してらっしやる——————！！！！ 今日ヒットポイントは随分とHP
が消費されていくな畜生！！

俺は彼女達の誤解を解くためにどれだけの体力を消耗するか、それを考えて泣きたくなかった。

誰か助けてくれ——————！！！！

第17話：零時の1日・中編その2（後書き）

作者：いやぁもうすぐこの作品も20話か……。

零時：わりと続いているよな。

舞歌：そんなことはどうでもいい！！

香奈：なんで私達の出番が中々無いのよ！！

作者：いや、零時の学校での交友関係を書いていこうかと思ってたんだけど、ついノリで新キャラを……。

隼太郎：ふむ、これで友人から何か言われるのは确实だな。

作者：そうなんだよなあ……。

小野：しかも明日から部活の合宿なんだろう？ 執筆がまた遅れるな。

三上：何日行くんだ？ アア？

作者：2泊3日です……。

中野：休みなさいよ！！ 休んで私が活躍する話を書きなさいよ！！

作者：ま、待って……首絞まってるから……ぐええ……。

零時：……そこで潰された蛙が出すような声を出して死にかけている作者に代わり謝辞を言つてく。読者の皆さん、こんな作品を見ていただいてありがとう。

隼太郎：うむ。感謝するぞ。

舞歌：私のことを応援してくださった皆に感謝する。

三上：アタシを気に入ってくれた弓槻！ 応援してるぜ！！

香奈：こんな作者ですけど、見放さないでやってください。

小野：それじゃこの辺で！！

作者：こ、ここまで読んでくださり……ありがとうございます。

零時の不幸は……まだ続くので……温かい目で見守ってやってください……それじゃ。

零時：あ、死んだ。

第18話・零時の日常・一時間目の風景（前書き）

何だろう・・・・・・・・、最近自分の書きたいことが分からなくなってきた。

これがスランプというやつなのか・・・？

第18話：零時の日常・一時間目の風景

日常の中にこそ非日常はある。

零時視点。

「・・・疲れた。」

現在、俺は教室の机に突っ伏してます。疲労困憊です。朝なのに。保健室で誤解を受けそう担った俺は、咄嗟に入り口にいた2人の女子の鳩尾に拳を叩き込み眠らせ、保健室のベッドに寝かせておいた。後は谷田に任せて俺はこうして教室にて休息を取ってるってわけだ。無責任？俺にどうしろってんだ。催眠術なんか・・・ツカエナイヨ？ホントダヨ？

ま、谷田にも責任はあるんだし、別にいいだろ。

フーか寝かしてくれ・・・。マジ疲れてんだよ・・・。

「おゝす、随分と死んでんなあ。」

・・・バカが話しかけてきた。どうする？

話す

アイテム

攻撃

滅殺

とりあえず攻撃することにした。若干強めに。

「お、おい何だよ突然立ち上がって。アレ？何で握りこぶしを固めてるの？」

「てめーの敗因はたったひとつだけ小野……。たったひとつの単純な答えだ。」

「え？ あ、あの……。怒ってらっしやる？」

「……。てめーは俺を怒らせた。」

「よくわからんけどすいませんでしぎゃあああああー！
！！！！！！」

「……。スタープラチナは使えないけど、ラッシュは出来るんです。
俺。」

しばらくして、ホームルームの始まりの鐘が鳴ると三上さんが教室に入ってきた。あ、俺が血まみれなのは見逃してくれ。どうしようもないから。床の血？ 気にすんな。俺の安眠を妨げた愚か者の末路さ。

「ん？ おいそこの血の海に沈んでるのは誰だ？」

「気にしないでください。単なるゴミです。」

「ん、そうか。おい田所。モザイクかけとけ。」

「俺にそんな技術はありません！！」

てか直にモザイクかけれるヤツなんか地球上にいないだろ……。居たらあれだ。ツラ被ってるおっさんにつけてやれ。大爆笑間違いないだ。

「ぐ……。ぐぶつ……。お……。俺を無視するな……。

「
・・・モザイク確定のモノが何かほざいたようだが、誰も相手にしない。」

そりゃ誰だつて血塗れの野郎になんか関わりたくないわな。

しばらく呻いていたが、やがて静かになりどこからか来た黒服の連中に袋に入れられて運ばれてった。

・・・安らかに眠ってくれ・・・。

さて、ホームルームが終わって1時間目の授業だ。進行が早いとかの苦情は作者に言えよ。俺に言われても知らん。

1時間目は数学。俺にとっては可もなく不可もないといったところ。舞歌は別のクラスで、香奈先輩や中野なんかもない授業中は俺にとって唯一安らげる場所だ。さらに、今日はいつも騒がしいやつが諸事情によりいなくなったため、よりいっその平和が俺の元に訪れている。

・・・え？ 諸事情じゃないだろって？ 気にすんな。どうせ昼放課には復活してるさ。

そんなことを考えていたらチャイムが鳴り、教室に数学担当の先生が入ってくる。

そして教壇に立つと、第一声を放つ。

「おゝし、それじゃ今日は女子だけ室内で勉強だ。男子は出てけ。邪魔だ。」

・・・あ、この人まともな人間じゃなかったっけ。

そういえば、この数学担当の井野島という教師、真顔で平然と女子

の尻を触ろうとしたり、授業中に「野郎は俺以外皆死ぬ。」とかぶつぶつ呟いているマジもんの変態なのだ。

だから今の言葉もまじめに言っているのだからうけど……。因みに似たようなことは既に何度も言われてるのもう慣れちゃってるクラスメイトは全員しつかりと聞き流して……。

「先生。すいませんがこの窓から飛び降りてもらえませんか？ 頭から。」

……ませんでしたよ。女子の1人が額に青筋立てて切れかかっている。わ、今シャーペン握りつぶしたよオイ。あんなに睨んだら視線だけで人殺せるよ。しかも凄いことさわりと言つてのけたよ。普通あそこまで言わないだろ。

他の皆は口出しできない様子。まあ素手でシャーペン折るようなヤツに話しかけられる剛の者はここにはいないか……。

「何だ青井。照れてるのか？ しょうがないな……。」

しかし、青井と呼ばれた女子から睨まれても井野島は全く動じず、それどころか自惚れた勘違いすらしている。イタイ、イタイよ先生。非常にイタくてあなたを直視できないよ。目に毒だ。

青井の方は……やばい、こつちも直視できない。恐怖で。

いやだつて殺気が具現化してるんだよ？ 窓ガラスにヒビ入ってるし、青井の近くに座ってた数人がプレッシャーに耐え切れなくなつて気絶してってるし。

彼女はどごその世紀末の救世主なのか？ もしくはその兄弟？

実は青井の真横に座ってるのにもかかわらず平然とそんなことを考えつつ、俺は井野島がどうなっているか確認しておく。

「そんなに照れるなよ、ミクヤちゃん。私がきちんとエスコートし

てあげよう。」

「・・・効いてないだとおおおお！？」

嘘だろ！？ あいつはどここの星の超人なんだ！？ もしくは余程バカなのか！？ うんきつとそうだな。

脳内で井野島はバカだということを確信していると、井野島はとんでもない暴拳に出ようとしゃがった。

なんと、青井に顔を近づけているのだ。何をしようとしてるのかは知らないが、それはちとやり過ぎだ。

何をやるにしても、俺にとって余り良い方向には向かないなこれは。

「・・・仕方ないな・・・。」

俺は体の奥底から、隠している力を引き出すようにイメージをする。すると、体のどこかから“力”のようなものが噴出し、俺の体に広まっていく。“力”を少しだけ引き出すとそれを押さえるために脳内で壺に蓋を閉めるイメージを広げ、それによって“力”の流出を止める。

よし、これくらいならいいか。

「こ、来ないでください！！！」

「いいじゃないか。減る物ではないだろう？」

井野島は嫌がる青井に無理やり・・・バナナ食わせようとしてる。右手でしっかり握って、ぐいぐいと青井の口に近づける。

えと・・・何この珍映像？ズームインにでも投稿しろってのか？

そのとき、クラスメイトの誰かが呆然としながらもやたらと聞き取りやすい声で呟く。

「そ、そういえば……、井野島先生って気に入った人にバナナあげるのが趣味だっけ話を聞いたことがある……。」

説明ありがとう未だに名前覚えてないクラスメイトA。ってか井野島は一体なんなんだ？ もう正体が地球外生命体だとしても驚かねえぞ。寧ろ納得しちまう。

「ちよつ、止めてって言うてるでしょ!!」

「いいからいいから。美味しいから食べてみなさい。」

あ、まだやってんだ。青井はどうやら迫力でビビらせるのが精一杯みたいで、あの変態……いや変人……いや珍人類を蹴散らすことはできないようだ。

……やっぱ助けとくか……。

俺は井野島に感知されないよう気をつけつつ、意識を井野島のみ
集中する。

やがて、徐々に周囲の景色が視界から消えていき、次に青井の悲鳴が聞こえなくなる。

そして世界の景色が全て認識できなくなり、自分と井野島だけを認識できるだけになったとき、俺は誰にも聞こえないほど小さな声でそつとある言葉を呟く。

「……*%&#+……。」

俺の口から出たのは、ある一部の人間でしか発音できない特別な言げんだ。教わったのは叔父さんから。

この言葉には途轍もないエネルギーが秘められていて、発音できた者にはその力が分け与えられるという代物だ。

俺はまだ全ての力を引き出す技量は無いし、今はそんなにいら
ない。意識を井野島のみに向けていたのは、こいつ以外に被害が及ばない

よう標的のみ認識するようにして他に散らないようにするためだ。俺の言は井野島の耳へと入り、すぐに効力を発揮する。

即ち、俺が念じておいた『聞いた者の意識を飛ばす』という効力をドサリという音とともに、井野島は白目をむきながら仰向けに倒れた。ただ、バナナを手放して無かったのは凄いと思っちまったんだよな……。

「……え？」

突然井野島が倒れて、勘違いをされた拳句バナナを食わされそうになるというよく分からない目に遭っていた青井は目を丸くしている。

「ど、どうしたんだ……？」

事態を眺めているだけだったクラスメイト達がとたんにざわめき出す。俺は慌てず騒がずに徹し、目立つことのないよう気をつけている。

「取りあえず、保険委員にこいつ持ってかせたらいいんじゃない？」

何かやけに邪魔になっている倒れたままの井野島を座ったまま指差して、俺は提案する。

「そ、そうだね……。保険委員さん、井野島先生を保健室へ。」

俺の提案にクラス委員の……。ごめん、まだ覚えてない。何て名前だったっけな……。

取りあえず、暫定的に委員長でと呼ぶことにしよう。

んで、委員長はすぐに指示を出して保険委員に井野島を連行させた。

ああ……。そういえば、こんな俺の授業風景だったな……

……平和なんてありやしないな……あは……

先生がいなくなって何だか雑談をし始めているクラスの皆を尻目に、俺はなんとなく目頭が熱くなるのを耐えることに集中することにした。

第18話：零時の日常・一時間目の風景（後書き）

作者：イエーイどーも！！ アハハハハハハハ！！！！！！

零時：どもつす。パンチ力の足りない作者がやけにハイになつてますが、気にしないでください。

舞歌：一体どうしたのだ？ 今年夏休みの課題を夏休み中に一切手につけなかったという偉業を成し遂げて逝つてしまっているのか？
香奈：違つみたい。それは宿題の数が少なかったから何とかなつただけみたいだし。

隼太郎：ふむ、どうやら近々就職試験があるため精神的に余裕が無いとのことだ。

小野：あゝもう高3だからなあいつ……。

三上：根性が足りねえなあ。アタシが指導しておくか？

零時：……三上さんと作者が耐え切れないかと……。

香奈：まあこういうのはほっとくのが一番でしょ。

舞歌：そうだな。あそこで踊り出してるダメ作者はほかつて皆で遊びにゆくか。

小野：ヤホー！ー！楽しそー！ー！！！！

三上：じゃあ行くか。ホラ、手前は今からいい店探して来い！

小野：俺すか！？

零時：頑張れ。俺にはどうしようもないんでな。

隼太郎：ハツハツハ！ それでは読者諸君、また会おう！

零時：感想待ってます。んじゃ。

中野：……私達つて、次の出番いつかしら……。

永井：さあな。もしかしたら出番はもう……。

中野：作者のバカヤロー！ー！！！！！！

番外：多くなってきたんで軽く紹介でも……。

作者：「ども」。作者の気持ちを代弁するために感想やあとがきなんかに出てた作者です。」

ハヤマサ：「始めまして。本日より作者のツツコミを代弁するために作られました、ハヤマサです。」

作者：「……何その名前。」

ハヤマサ：「聞くな。聞かないでくれ。」

作者：「……何かハヤマサがブルーになっちまったんで、俺が進めてく。今回は段々と多くなってきた登場キャラクターを一度纏めとこうって作者が思ったんで、キャラクターの紹介を乗っけてくことになったぞ。」

ハヤマサ：「本人は『決してネタが無いため急場凌ぎをしてるわけじゃないぞ!』などと言ってたけどな。」

作者：「……嘘くさ。」

ハヤマサ：「何を今更。さ、とつとと紹介を始めよう。」

作者「ああそだ。あとがきで一度書かれてるメンバーは身長とか書かないんでよろしく。」

ハヤマサ：「ぶつちやけキャラの設定を書き込んでいただけだしな。」

作者：「言つな!」

ハヤマサ：「あ、たまに文章に があるけど、それは俺がツツコミ入れているだけだから気にしないでくれ。」

登場人物その1 鎖川零時

西京高校1年弓道部員。本編の主人公。

外見はちよつと不良っぽい髪型をしている以外はそれほど突出した特長のない普通の高校生。しかし、その中身は理不尽を許さない正義の味方みたいなヤツ。喧嘩・家事・人付き合いの全てにおいて実

力を持つ何気に完璧超人。でも女の子には振り回される弱ヘタレ。片腕が義手という秘密を抱え、過去にも色々とあるのだが本人はそんなことは一切気にせず青春を謳歌している。（気にする余裕が無いだけの気もするが。）

作中に出てくる技は、神滅流と呼ばれる流派の技。零時はこの流派の免許皆伝者。

クッキー作りが意外な趣味。最近自分の周囲に平穩が転がってないか真面目に探してる。多分一生見つからない。

戦闘時は主に徒手空拳。神滅流を技と自慢の運動神経を駆使して暴れまわる。大抵の武器（銃器含む）は扱えるが鞭だけは扱えない。義手は「ごつどハンド」の銘が付けられている。（何故にひらがな！？）

平常時はとてつもなく頑丈なだけの義手だが、製作者である谷田の許可が下りると封じられている高エネルギー体『マカロン』が発動、強大すぎるエネルギーで敵を殲滅する。この『マカロン』というエネルギー体はぶっちゃけなんでもあり。攻撃・防御・回復は勿論、エネルギーを分裂させることもできる。これら以外の用途は多すぎて書けません。

必殺技はジャンプして相手の頭上高くに舞い上がり、片腕に『マカロン』を限界まで凝縮して巨大な腕を具現化し、それを振り下ろす『ギガント・ハンマー』。

「勇者以上魔王以上」という作品の主人公が苦手。

その2 剣野舞歌

西京高校1年帰宅部。ヒロイン。

目つきの悪い不良女子。でも実はとってもピュア。

一目見て好きになってしまった零時に、向ここの気持ちやらなにやらを完璧に無視して一途に思いをぶつけている。たまに物理的に。

昔友人に裏切られいじめに遭っていた時期あり。その所為で軽い人

間不信だが、零時のお陰で少しづつ快方に向かっている。
正直、傍目に見てると凄い迷惑そ．．．いやすいません！（なに
やら殺気を感じたので。）

口調は偉そうだが本人には自覚なし。実は怖いものが苦手で、最近
はぶちぎれた香奈との遭遇が一番の恐怖体験になりつつある。

料理の腕前は壊滅的。目玉焼きをUFOに変えたという伝説すら持
つ。（もはや食いモンちゃうやん。）

戦闘時には我流の体術と愛用の日本刀『散華』を扱う。

必殺技は極限まで精神を集中させ、神速の抜刀によって眼前の対象
を真っ二つにする『カット・イン』。

その3 飯田香奈

西京高校2年弓道部部长。ヒロイン。

普段は誰にでも優しく礼儀正しいのだが、零時のことになる色々
と壊れたりリミッターが外れたりする。ぶっちゃけ暴走する。

零時を弓道部に入れた張本人。理由は無論少しでも多く零時と居る
時間を増やすため。

舞歌という強力なライバルの出現で焦りを覚え始めたが、先日の騒
動の折りに、零時に守ってもらったので少し上機嫌。今はライバル
を蹴落とすのではなく、自分を零時にとって大切なものになしようと
思っている。

料理は出来ない。てかやらせてもらえない。一度だけ味噌汁を作る
うとしたときに、プルトニウムを作ってしまったため。（だから
食いモンを作ろうよ食いモンを。）

戦闘時はどこから取り出したほんのり紅い色が染み付いている釘
バットを使う。

必殺技は特に無し。大抵一心不乱に釘バットを振り回してるだけな
んで。

その4 小野博史

西京高校1年???同好会所属。零時の友人。

零時の悪友にして一番とばっちりを受けるヤツ。でもすぐに復活するため心配してもらえない彼。哀れ。

彼の所属する同好会は学校の生徒会不認可なのと、犯罪紛いのことをやらかすために生徒会にマークされている。月一の割合で大規模な抗争にまで発展し、その度に零時が生徒会側に借り出される。そしてその憂さ晴らしは小野が担当する羽目になる。

綺麗な女の子に目が無いだらしの無いやつだが、実は案外友人思いだったりする。でもそれが分かることが余り無い。(損してるな)

基本戦闘に参加することは無いが、荒事がどうしても必要なときはきちんと闘う。

戦闘時は素手かその場にあるものを片っ端から武器にするストリートファイトのようなスタイルで闘う。何気に強いがあくまで常人レベル。香奈にですら勝てません。

その5 三上可憐

身体的特徴 身長178センチ。肩まで伸びているロングヘア。大抵めんどくさそうな目付きをしている。

特技 アイアンクロー・ネックハンキングツリー・得意教科の指導
趣味 酒宴・零時の手料理を食べること・零時をからかうこと

西京高校1年2組担任。零時の知人。

零時の担任にして何か昔とでもやんちゃしてたような感じの人。つねにヤンキーのような言葉遣いをしており、西京高校生徒と職員の間では“絶対に怒らせてはいけない”と暗黙の了解ができています。でもきちんと生徒の立場に立って物事を考える人なので人気は高い。

零時がお気に入り、初めて会ったときに抱き枕しようとしてひと悶着起こしたり。今でも抱き枕にしようと思ってるらしい。

何気に感想フォームで人気が高い。

何故か自宅に片手でも扱えるよう軽量化された改造チェーンソーが保管されており、たまに彼女の家からけたたましいエンジンの唸り声が聞こえてきては零時の安眠が妨害される。でも零時は何も言わない。聞いてくれないのは分かってるので。

その6 鎖川隼太郎

神滅流33代目現当主。零時の叔父。

身体的特徴 身長180センチ。少し青い髪色。ヘアスタイルは時々変わる。一回アフロだった時期があったが、それは零時に年甲斐もなく悪戯をして、その腹いせに零時にやられたため。

特技 どんな極悪人でもびびらせる・料理という名の錬金術
趣味 甥の成長を見守ること・友人達との酒宴

完璧超人な甥のトンデモ叔父さん。もはや出来ないことは存在しません。常識なんてくそくらえです。 (常識ぐらい持とうよ。)
微妙にナルシストなこの人、実は裏の世界で最強の称号を持っています。零時より強い。

家事が全く出来ない。すると何かが壊れる。物理的にも精神的にも (精神もかよ。)

なので週に3・4回零時が泊まるのが通例になっている。
誰にも話してはいないが実は寂しがりや。なので零時が泊まる日は嬉しくて酒宴を開いてしまう。その度に甥に嫌われているのにも気づかない。 (いや気づこうよ。)

他にも色々あるのだが、これ以上書くと話が変わったてしまうので書けません。(いやどんだけ濃いんだよこの人。)

自作のドリンクが健康の秘訣などと言っているが、本人以外が飲むと3回ほど死ねるぐらいの味のドリンクを飲んで何故平気なのか教えて欲しい。いやホント。

戦闘時は主に2本の斧を所持している。これは素手でやりにくい相手を考慮してのことと、雑魚をびびらせて無駄な交戦を回避するため。実際隼太郎が斧を両手に持って歩くと、余程の猛者でなければ恐怖で逃げ出すことになる。ジェイソンも真っ青。

大抵はこのスタイルだが、本気の場合は素手になって神滅流で文字通り相手を滅する。

必殺技は……ダメだ。俺には言えないよ……。(どうやら余程恥ずかしい名前らしい。俺は知らんが。)

その7 谷田優貴

身体的特徴 身長165センチ。セミロングの髪を後ろで束ねている美女。

特技 治療・義体製作

趣味 自宅の庭で花を育てる・零時をおちよくる

西京高校保険医。色々な意味で危険なニューハーフ。つまり元男。

元男とは思えない色気と体に理性を失いそうになる男子は数知れず。そして思い切って告白するたびに予想以上に毒のある言葉で真っ白になる男子も後を絶たない。

裏の世界で義体師の仕事をしており、零時の義手を作っているのも彼女……いや彼か？(迷うなよ。)

零時の暗い過去を知る数少ない人間の1人。零時が過去に押しつぶされないよう暖かく見守っている兄……いや姉のような存在。

(いやだから迷うなって。)

因みに、学校ではニューハーフということは知られていないので、

『谷田優子』の偽名を使っている。いや流石にばれたらやばいから。

（本編で零時があっさり暴露してたが。）

別の作家さんの作品の主人公と名前が被っていることに作者が気づいたのは、これを書いているときだったそうだ。　（実話だそうだ。）

）

作者：「ま、こんなもんか。」

ハヤマサ：「今回紹介した面子はレギュラー入りが決定した奴らだ。他にも出ているが、そちらは作者が思いつきで出したので再登場するかは未定になってる。」

作者：「またキャラが多くなってきたら紹介書くんで、そんなときは許してくれ。忘れっぽいんでな。」

ハヤマサ：「それではこの辺で。」

作者：「こんな作者だが、見捨てないでくれ！　んじゃバイビー！　！」

ハヤマサ：「それ古!？」

第19話・零時の日常・昼放課（前書き）

今回はちょっと長め。あと意外な奴が出るぜ。

第19話：零時の日常・昼放課

教師って大概無関係の奴にも罰とかとばっちりとか撒くんだよな。

ハヤマサ視点。

アレ？ 何で今回俺の視点なんだ？

いやだつてさ、俺だよ？ ハヤマサだよ？

何であとがきと感想フォーム以外でしか使わないと決めてた俺をここに出すんだよ。しかも俺視点で。

作者だつてこの名前嫌がってたじゃねえか。コロコロさんこのあいつに似てるからつつつて付けられたこの名前。何でわざわざ出すんだよ。

・・・え？ 作中にツツコミが少ないから、普段からツツコミやつてる俺に白羽の矢が？ いやふざけんなよ。こつちも好きでツツコミになつてるわけじゃねえんだよ。周りにボケしかないからなし崩し的に・・・おい、哀れみに満ちた目を向けるな。マジで泣きたくなる。

・・・もういい。早く進めて変えてもらおう。

俺が今居るのは、零時が所属してる1年B組の教室だ。一応俺もこの生徒で零時のクラスメイトということになってる。ご都合主義ここに極まれり、だ。

只今、午前の授業が全て終わって昼放課になっている。俺も小学校から使っている迷彩柄のリュックサックから弁当を取り出し昼飯の準備をしている。

弁当を入れる袋のサイズの都合により使っているフォークを手に取りつつ、俺はこっそり3つほど前の席にいる零時の方に視線を向けてみる。

・・・見事に机に突っ伏したまま身動き一つしていない。何か、死んだ動物でも転がっているような錯覚すら覚えるぞオイ。息してるかどうかすら怪しいぞアレ。

流石に心配になったので、俺は弁当片手に移動する。幸い、零時の前の席のやつは別の席に移動して他のクラスメイトと談笑しながら弁当を食べているので空いている。俺はその席に座ると、冬眠中の蛙より動かない零時を揺すってやる。

「おい、生きてるか？」

「・・・・・・・・NO・・・・・・・・。」

うわ・・・何て弱々しい声だよ。マジ死にかけじゃん。

しかし、いつまでもこんな様子では弁当を食べる所か途中で早退しかねない。そうなっては折角学校に舞台を移した意味が・・・・おっと、つい本音が。

「取りあえず飯を食え。でなきゃ死んじまうぞお前。」

これ本心から言ってる。だってこれだけ呼びかけても顔を上げようとしなないし。腕を枕にしてるから手先の色が尋常じゃない色になってるし。

「・・・・・・・・もう死にたい。」

「死ぬには早すぎるだろ・・・・・・・・。」

もう疲労が溜まりすぎて顔色が青ではなく灰色になってしまってる不幸体質の哀れな主人公に、何を言ってやるべきか考えつつ、俺は

おかずのワインナーを口に運んだ。

そもそも、何故ここまで零時は酷いことになっているか。それは午前授業の2時間目と3時間目にまで遡らなければならない。つーわけで回想モードオン。

〈2時間目〉

「次は科学だったっけ……。確か今日は実験室に移動だな。」

「零時、教科書を見してくれ。家に忘れてきたみたいなんだ。」

「……ハヤマサ、何でお前がここに……。」

「作者に無理やり……。」

「……お疲れ。」(ハヤマサの肩に手を置く。)

「何も言っとな……。あっと、俺はここでは早昌隆はやまたかしということになってるから。」

「微妙に適当っぽい当て字だな。」

「だから言っなって……。お、ついたぞ。実験室……だ……。」

「……。」(実験室の方見て固まる。)

「ん？ どうし……。。」(実験室の方を見て同じように固まる。)

「おや、皆どうしたのかね？ もうすぐチャイムが鳴るぞい？」

「いや、あの……松戸先生。」

「後ろに居るちっこい小人みたいな奴な何ですか……？」

「ああこれか？ これはワシがたった今行った実験によって出来た……。」

「……そうじゃな、『コロポックル』とでも名づけようかの。」

「いや、名前はどうでもいいんですけど……。」

「何で彼等は小さい刀や斧やバットを持ってるんだ？ しかも血が付いているし……！」

「ほっほっほ。このくらい気にするでないぞ。」

「待て！！ アンタの体に巻きついてるそのワイヤーは何だ！？ 良く見ると実験室から伸びてるし……！」

「いやのう……この歳でこんなに残に……ゲフンゲフン。こんなに元気なモンとじゃれあうのはきつくてのう……。」

「今“残忍”って言おうとしたる……！」

「てことは何！？ そいつらについてる血はマジなのか！？」

「じゃから大丈夫じゃと……うお！？」（突然体に絡み付いているワイヤーが引っ張られ床に転倒する。）

「え……！」

「あーれ……。」（床に倒れたまま物凄い勢いで実験室に引きずり込まれる。直後、実験室からなんか“ぐちゃ”とか“どちゃ”とか“メメタア”とかいう効果音が断続的に漏れてくる。）

「……。」

「……さあて、教室に戻るか。」

「え？ これスルー！？」

「俺はお前みたいに常識外の力とか持ってないんだよ！ あんな恐ろしい場所に行けるか……！」

「いやでも……。」

「あの……2人とも……。」

「アレ？ 委員長なんでそんな遠くにいんだ？」

「……おい、零時……。」

「何だ？……つて……。」

（気が付いたら廊下にコロポックルの集団が出てて、ばつちり目が合ってしまった零時と早昌。）

「……。」（零時）

「……………」(早昌)

「……………」(じつと2人を見つめたまま動かないコロポックル達)

「……………」(零時の後ろに回って楯にしようとする早昌)

「……………」(取りあえず後ろのやつに文句言うより早く離れるべきと判断し、ゆっくり後ずさってる)

「……………」(気のせいかな物凄く残忍な笑みを浮かべたように見えるコロポックル達)

「……………!？」(びびって零時の後ろに隠れる)

「……………やば。」(何となくヤな予感がしてる)

「シャガーーーーー!!!!!!」

『ギャーーーーー!!!!!!????????』

この後は零時と協力して何とか鬼ごっこ 2人とも段々とむかつてきてマジギレ エセ妖精をモップの柄でミンチに 皆殺しにした後、吾に返って互いに何やってんだろう……と黄昏る、の順に進めることに成功。エセ妖精どもを全滅させることができた。……いやまあ、最後はぶっちゃけ零時の方が酷かったけどな。鬱の具合が。

余談だが、科学の授業を担当する先ほど実験室に引きずりこまれて生死不明になっていた松戸栄吉先生まつどえいきち。放課後にいつの間にか復活してました。

……一瞬だけクローンという単語が頭に浮かんだ。物凄くありえそうで怖え……。

〈3時間目〉

「ああくそ……今日は一段と酷い。酷すぎる。」

「その点については同情するが、何故に俺を巻き込もうとする。俺は無関係だろう。」

「お前だって俺と同じだろう・・・？」（妙に淀んだ目で早昌を見つめる。）

「止めるそんな目で俺を見るな！少なくとも現実ではそれほどでもないぞ！！」（視線に耐え切れず目をそむける。）

「じゃ、今は？」

「次の授業は何だったっけ？」

「（・・・逃げたか。）確か・・・世界史じゃなかったか？」

「ハハハアーイー！！ ミナサンゲンキデスタカー！？」

「・・・なんて無駄に高いテンションだ・・・。」

「その元気を少しでいいから俺に分けて欲しい・・・。」

「ソレデハミナサン、教科書ヲ開イテクダサイ。」

「いつつも思うんだが、何で金髪碧眼のがっしりした体格の白人が日本の高校で授業教えてるんだ？」

「聞くな。俺はもう慣れたんだ。」

「先生、田所くんが教科書を忘れたそうです。」

「何忘れとんじゃわりやあ！！！」

「口調変わりすぎだろ！！！」

「ワレようもワシの授業で忘れもなんぞしてくれよたなあ。ああ？」

「・・・どうみても外人にしか見えないのになんでやくざ口調になつてんだよ・・・。」（こつそり机の下に隠れようとしている。）

「誰じゃあ！！ 下らんことをほざいたモンはあ！！！」

「あ、あいつです！！」（教科書忘れた奴。）

「あ、てめ・・・！」

「貴様かぁーーーー！！！！」（教壇の下からショットガン取り出して。）

「ちよつと待て！！ それどこから取り出し・・・撃たないで！！ そこからだ俺に巻き添えが・・・だから止めろってー！

「！！！！？？？」

この後、どこからか次々と多種多様な銃を取り出す世界史担当のティーン・マリック先生と、何故か教室内で銃撃戦が繰り広げられる羽目に。まあフルネームでなんとなく納得したただけだな。

授業終了間近になって三上先生が鎮圧のために乗り込んでくるまで、零時は銃弾を避けまくることになり、三上先生が突入してティーン先生を半殺しにした後、某ボクサー漫画のラストのように真っ白になっていた。体力使い切ったらしい。

因みに俺は作者権限で持つてる『ばりやく』というシールド発生装置を使って事なきを得ました。

・・・俺は銃弾に耐えられるような体してねえから。

ま、回想はこんくらいだな。じゃ、本編再開すんぞ。

昼放課は既に10分経過。俺はもう飯を食い終わってるが、相変わらず目の前の生者以下死体未満の物体は自作の弁当をもそもそとつまんでいる。まあ一応食い始めたんだからよしとするか。それにしても・・・なんで昼飯食った後ってこんなにも眠くなるんだろうな・・・。

「ふああ・・・ん？」

俺が眠気に誘われて大あくびをしてみると、ふいに視界になにか気になるものが入ったような・・・。

そちらに目を向けて、俺は教室の入り口で立ち往生しているとある人物の存在を確認する。

・・・そこで立ち往生されると他の奴が入れなくなるんだがな・・・

呆れつつも、未だにそいつに気づいてないらしいニブチンの代わりにそちらへと近づいていく。

「・・・なにやってんのお前？」

「!? ハヤマサ!? 何故お前がここに・・・!?」

「察しろ。んで、何でこんな所で突っ立ってんだ剣野。」

弁当片手に教室の前で入るのを躊躇ってた剣野に率直に理由を尋ねると、剣野は表情を不安げにしながら答えてくれる。

「いや・・・零時と一緒に昼を食べようかと思っていたのが、やけに疲れているようなのでな・・・。」

「・・・あなるほど。自分が入っていったらさらに疲れさせると思ってたのか・・・。」

「・・・やれやれ、こういうときには遠慮するんだな。」

「それはどういう意味・・・うわ!? お、おい!?!」

俺は素早く剣野を背後に回ると、ぐいぐいと教室へ押し込んでいく。

「何をする!!」

「説明メンドイ。いいから行け。」

「だから私が行っては迷惑が・・・。」

「抵抗は無意味だ。ワレニ従ウガイイ。」

「何故いきなり片言になるのだ!?!」

気にすんな。何となくだ。

そうこうしてるうちに、剣野は零時の近くまで押してってやる。だ

つてころでもしなきゃ、放課ぎりぎりまで粘った拳句すごすこと帰る羽目になるんだろっし。

なにやら軽くパニくってる剣野の代わりに、俺は零時を呼んでやる。

「おい零時。剣野と一緒に飯食おうつてさ。」

「……………」

弁当の中身が6割ほど残っている状態で箸が止まったままの零時は、ゆっくりと顔を挙げ、けだるげな瞳を剣野へと向ける。おい剣野。見られただけで震えんな。

「……………」

「あ、え、その…………イヤなら別に……………」

「…………屋上でいいか？」

「へ？ あ、ああ……………」

「じゃ、早く行こうぜ。」

零時は弁当を一旦仕舞うと、しっかりとした声で剣野を促し、自分も席から立ち上がって教室から屋上へと足を向けていく。

剣野は一瞬ぼけっとしてからすぐに覚醒し、嬉しそうな表情を浮かべて教室を出て行く零時についていった。

「…………世話のかかる主人公とヒロインだな……………」

多分、昼放課が終わるぐらいに飯田先輩に絡まれるんだろっが…………俺には被害が無いし、気にしなくてもいいか。

俺は苦笑しながら、もはやすることも無いのでこのまま自分の席で寝るか図書室に向かうか考えることにした。

彼女達は知っているだろうか。自分達の存在は、アイツにとって迷惑ではなく、寧ろ救いになっていることを。

アイツは知っているのだろうか。自分が思っているより、自身を心配するに人間は大勢いるということ。

ま、俺は単なる作者の分身だし、どうでもいいけどな。

第19話：零時の日常・昼放課（後書き）

零時：さてと、今回のあとがきは本編の続きか。

舞歌：うむ、まあ特に言うこともないのだし、のんびり食べることにしよう。

零時：そうだな……。あとがきくらいのにびりと……。

作者：ヘルプミー！！（ドア蹴破って登場。）

零時と舞歌：『却下。』

作者：即答しないで！？ 頼むから助けてくれよー！！

零時：はあ……。で？今度は何やった？（弁当広げてる。）

舞歌：どうせロクなことではないのだろう？（そつと零時の弁当のおかずを狙ってる。）

作者：聞く前から随分酷いつすね……。

零時：いいから早く話せ。（おかずの入ってる弁当を舞歌に差し出す。）

作者：いやあ……。何も言わずにハマサ無理やり出したんで、あいつに追われてるんだわ。

舞歌：ひほうひほくへはふあいは？（意：自業自得では無いか？）

零時：同情できないぞ。あと舞歌、きちんと食ってから喋れ。

舞歌：ん……。分かった。

作者：そんなこと言わずに助けてくれよー。

零時：いやだつて……。もうお前の後ろに仁王立ちしてるぞ？

（作者の後ろを指差す。）

作者：え？（後ろを振り向く。）

ハマサ：（物凄いにこやかな笑顔で腕組みしつつ立ってる。）

作者：……。 （冷や汗を滝のように流してる。）

ハマサ：サテ、逝コウカ？（作者の服を引っつかんで引きずっていく。）

作者：ごめん謝るからー！！力一杯謝るから許してー！！！！

！ いや——————！！！！！！

零時：さてと、騒がしいのもいなくなったし、昼寝でもするかな。
舞歌：（作者が消えていった入り口を見つつ。）・・・南無。

いかん・・・ハママサ使い勝手良すぎ。

これからもどんどん使いそうだなあ・・・。

第20話：零時の日常・生徒会編

零時視点。

只今、昼放課終了5分前。現在位置は、部屋に赤いカーペットが敷かれ、一般の生徒が使うには高そうな机と椅子が並んでいることから、恐らく校舎の3階にある生徒会室。現在の状態、簞巻きにされて床に転がされてます。何故!?

「会長。幾らなんでもここまでする必要は無かったのでは……。」

部屋の奥、机を挟んだ向こう側にいる眼鏡を掛けているインテリっぽい感じの奴が、隣でやたらと豪華で金の掛かっていそうな椅子に座っている女子へ耳打ちしている。てかこの2人が誰だか知ってるんだけどね。あと同情するなら助けてくれ。

「彼はこのくらいでなければここには来てくれませんよ。仮に他の方法を試した所で、最終的には実力行使になってしまうことはあなたもお分かりでしょう?」

いやまあ……、確かに生徒会に呼び出し食らったら速攻で逃げけどな。でもいきなり飯食い終わって舞歌をアイツの教室まで見送って油断しているときに、クロロホルム被せて眠らしてから拉致るってどうよ? ってよくここまで連れてきて誰にもバレなかったな。

「フフ……大変でしたのよ? ここまでどなたにも気づかれないうように運んでくるのわ。」

「待て、人の心を読むな。そして心底楽しそうな笑みを浮かべないでくれ。正直その笑みは怖いぞ。」

「貴様……！ 会長に何たる無礼な……！！！」

「いや無礼つつつたら人を拉致つてここまで強制連行すんのはどうなんだよ。そつちの方がもつと無礼だろ。」

「貴様が逃げるからだろう！！！」

そりゃ逃げますよ。だってアンタらから呼び出されると大概酷い目に遭うもん。アンタラの所為で俺がどんだけ苦労したと思ってるんだ。

「それはあなたが幾ら勧誘しても生徒会「コ」に所属してくれないからです。あなたが所属してくればそれで済むことなのですよ？」

奥の玉座で、女子高生らしからぬ高貴な雰囲気纏わせる、西京高校生徒会会長・御堂要みどうかなめはまるで俺が生徒会に入らないことが信じられないとでも言いたげに首を傾げつつ、俺に話しかける。

会長と初めて言葉を交わしたのはこの学校に入学して3日目。彼女は、放課後下駄箱にいた俺にいきなり話しかけてきて、自分の所属している生徒会へと勧誘してきたのだ。

無論、面倒事は嫌いなので2つ返事で断つたのだが、会長は全く諦めなかった。手を変え品を変え、時には中野や永井を利用してまで俺を生徒会へと引き入れようとしてくる。ぶつちゃけ、生徒会室への強制連行も初めてじゃなかったりするのだが。

……正直、家に来た郵便配達の受け取りのときにサインしようとしたら、生徒会入会届けだったときは危なかった。

今でも、その美貌を武器にして俺を引き入れようとしてくる。

昼間にも関わらずまるで月光のような輝きを放っているような錯覚を受ける見事な腰まで伸びている長い銀髪に、雪のように白い肌。

それらは先天的に紫外線などから身を守る色素が薄いアルビノである御堂だけが持つ特徴であり、なおかつそのことを抜きにしても彼

女は美人だ。恐らく思春期の男子で彼女からの『お願い』を断れる奴はいないだろう。

・・・例外が存在するけどな。

「そのことに関しては何度でも言うぜ。俺は縛られるのが嫌いなんだ。」

俺は簀巻きにされて床に転がされた状態でも、答えを変えようとは思わない。彼女がどれだけ俺にご執心でも、俺は決して曲がらない。何でそんなに頑なに拒むのかって？・・・ま、あえて言うなら『信念』かな。俺という『凶器』で、知り合いを誰も傷つけないようにするためのな。

俺の心中を知る由も無いはずの会長は、まるで俺の心を見透かそうとするかのように、アルビノのために本来は黒目の部分が血のように紅くなっている目で、何も言わずにじっと俺を見つめてくる。ちょっと話は変わるが、この学校において、生徒会はかなりの権力を有している。教職員ですら逆らえないほどの権力を。

その理由は、校風が比較的自由度の高いもののため、それを戒めるためや、生徒の自立心に働きかけるなど様々なものが上げられるのだろうが、御堂先輩が会長を務めている今だけは、もう一つだけ理由が挙げられる。

・・・生徒会長の全ての罪を見透かし、罰を与えるという『レッドアイ』と呼ばれる彼女が・・・。

相手の一挙一動を見逃さず、不審な点があれば即座に詰め寄る。

世界を凍らすような冷たい声で相手の神経をすり減らしていく。因みに彼女の声は何故か周りの関係の無い人間にも被害を及ぼすため、たまに詰め寄られている奴とは別の人間が「ごめんなさい」とか「すまませんでした」とか言っていたりする。しかも涙目。怖あ・・・。

そして、一番に恐れられているのが彼女の目だ。あの紅い目は、心によましいことがある人間には絶大な効果がある。大抵の者はあの

目に睨まれると最早言い訳すらできない。

実際に睨まれた経験のある友人の〇君はこんなことを言っていた。

『いやアレは反則だつて。何か、俺の人生全部を見られてるような目で見られて、しかもその目だけで笑みを浮かべてるんだぜ。もう抵抗する気も起きないつて。』

何故アイツが捕まったのかは聞かないでほしい。喋る気すら起きないから。

御堂視点。

私の目には、床に鎖でぐるぐる巻きにされている鎖川くんが写っています。

その目には、決して何人にも屈することのない強き意思の光が宿っています。私が生きてきた中で一番に強いと思える光が。

けれどもその光を、私は今だけは鬱陶しく思っています。何故なら、その強い意志のために彼は生徒会に入ってくれないのですから。

正直な気持ちを言えば、私が彼をここまで勧誘するのは無意識の内に個人的な気持ちも入ってしまったているのです。しかも最近は、個人的な気持ちの方が強くなっているのです。

何故、私はこんなにも彼を必要としているのでしょうか？ 自分でも良く分からないのですよ。本当に不思議です。

でも、きっかけについては何となくですが見当はついてるんです。多分、きっかけは彼を始めて見た入学式の時。私が在校生の代表

として祝辞を述べるために、体育館の壇上へと上がり、これから自分の後輩となる入学生を見回してみたとき、私は彼を見つけました。・・・彼を始めて見たとき、私は何故かは良く分かりませんがとても驚いてしまいました。

欠伸をしてとても眠そうにしながらも、目には常に強い光が宿っていて、たった数瞬見つめたただけなのに、それだけで彼がどんな人か分かってしまったのです。

そして私はその日のうちに彼について調べてみたのです。驚きました。まさか裏の世界と関係がとは思っていなかったからです。

もつと驚きましたのは、裏の世界における功績についてです。普通裏の世界は悪いことをしているという認識が多いものですが、彼は違っていました。

彼と敵対しているのは大抵が世界規模の犯罪シンジケートや、国際的な規模で動いている秘密結社など、まず犯罪者には恨まれているのです。

しかも、彼は暗殺や非合法の工作活動などは一切せず、要人の護衛や犯罪組織の殲滅、誘拐された被害者の救出や超常現象の解決など、およそ常人では太刀打ちできないにも関わらず不思議と犯罪とは思えないような仕事ばかり選んでいるのです。・・・最後のはアレですが・・・。

さらには、彼は一切人を殺したりはしないのです。どのような悪人も殺さずに制し、等しく報いを受けさせているのです。まるで、漫画に出るような『正義の味方』のように。

そのことを知って、私はすぐに彼を生徒会に入れようと思いましたが、ここでもなければ、校内において彼の真価を發揮できる場は無いからです。

ですが、彼はどうしても入ってはくれませんが。多分彼の経歴からして、そう簡単に入ってくれるとは思っていませんでした。

そこからは彼と私との根比べのようなものでした。私が数々の策を用いて彼を生徒会に入れようとして、彼はそれを自力で何とかして

いく。その繰り返しでした。

彼との勝負も中々楽しかったのですが、私は今年で3年生です。そろそろ後を継いでくれる人を生徒会へ入れておかなければなりません。

最早、最後の切り札を切るしかないようです。正直、これを使うのは複雑なのですが……、確実に彼を引き入れるにはコレしかありません。

そのとき、午後の授業の開始を告げる鐘が鳴り響きます。ああ、授業をサボってしまいました。まあ、一度くらいなら構わないでしょう。

私は心中で決意を固めると、取りあえず邪魔になってしまう私の右腕として良く働いてくれる生徒会役員の高見に部屋から出てもらうことにします。

「……仕方ありませんね。高見。外に出て入り口を見張っていなさい。」

「は……？ い、いきなり何を……。」

私の突然の言葉にやたらとろたえていますね。恐らく私と彼を2人きりにすると危険だと思っているのでしょう。彼はそんなことをするような人ではありませんよ。

「心配ありません。彼に直接交渉するだけですわ。」

高見を安心させるために、笑みを浮かべてそう告げると、彼も渋々納得してくれたようです。不満そうな顔をしながら部屋から出てくれました。ふう、これで準備完了です。

「さて……それでは本題に入りましょうか。」

「……雰囲気がおかしくないですか？ 獲物を狙ってるケモノ

みたいな感じになってましけど……。」

私と2人きりになって、鎖川くんはとても不安そうな表情でこちらを見てきます。大丈夫ですよ。痛いのは私だけですから。別に役得とかそういうことを考えてるわけではありませんよ？ホントですよ？

「すみません……。あの、これから一体なにが……。」

「鎖川くんを確実に引き入れる方法を実践するだけですよ？」

「……。なんで“実践”って言い方をするんですか？　ってちよつと！？　何で服脱いでるんですか！？」

フフフ……。随分と慌てていますね。驚いている顔が少し可愛いです。

しかし、これが彼を引き入れる唯一の方法なのですよ。

「鎖川くんは口で言っても無駄でしょう……。そのことは既に分かっています。なら、鎖川くんが決して私に逆らえないようにすればいいのです。その方法は……。」

「それ以上は言わなくていいです！！　だから脱ぐのを止めて！！　ああスカート下ろそうとしないでくださいはしたないですよ！！　！」

鎖川くんがうるさいので、仕方なく脱ぐのを止めます。といっても既に上半身は下着しかつけていない状態なんですけどね。

鎖川くんは顔を真っ赤にさせてそっぽを向いています。彼も年頃の男子なんですね。これなら私の作戦が通用しそうです。安心しました。

「早く服来て！　誤解されますよ！！」

「構いませんよ？　今日私は鎖川くんと『既成事実』を作ろうと思

つっていたんですから。」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・へ？」

私が今日行おうとしていたことを告げると、鎖川くんは口をあんどりと開けて信じられないことを言われて思考が停止してしまつたようです。

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・今なんと？」

「だから、既成事実を作ろうと言いました。」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・えと、

何故？」

「だから言っているじゃありませんか。鎖川くんを・・・・・・・・いえ、零時くんを引き入れるためですよ。」

そう言うと、私はまだ思考停止中の零時くんに押し掛かります。ちよっとだけ恥ずかしいですが、彼になら、この恥ずかしさだって教えてあげてもいいと思つてます。

何でしょうか。彼の見た目以上に鍛えられている体に触れていると、自分が押さえられないような気がします。

「ちよ・・・・・・・・会長！？ アナタはそんなキャラじゃ・・・・・・・・待つてベルトに手を掛けないでー！ー！ー！ー！」

「フフフ・・・・・・・・。幾ら騒いでもここは防音だから意味は無いですよ？」

「いや！ 笑みが怖いですよ会長！！ そして・・・・・・・・顔に・・・・・・・・！キスしようとしなくて・・・・・・・・！ください・・・・・・・・！！！」

む・・・・・・・・、彼が身をよじつてベルトを外させてくれません。仕方ないのでキスをしようとしても見事に避けられます。

「諦めも肝心ですよ？ 零時くん？」

「そんな可愛い声で言われたって観念しませんよ……てうわ！？」

段々とじれつたくなってきたので、私は零時くんの頭をしっかり両手を捕まえます。これなら避けられる心配はありません。

さあ……お楽しみのお時間ですよ？

「ちょ……ダメですって！！」

「いいんです。私は、零時くんだからこそ、純潔を捧げてもいいと思っっているんですよ？」

「え……う……。。。」

「隙あり」

「あ……ちょ……！！」

私の一言で抵抗が弱まったところを一気に狙います。零時くんの唇に、私の唇が重なるまであと一ミリ……というところでした。

ドガン！！！！！！！！！！！！

突然、生徒会室のドアが部屋の中へ吹き飛ばされるようにして飛んできます。

「え！！！！？？？？」

突然の出来事に、私は先ほど零時くんが浮かべていたような表情を浮かべるしかありません。口を開けたまま啞然としてしまいます。

「………そういえば。」

零時くんは、何か心当たりがあるのか零時くんは諦観の混じっている視線をドアの外へと向けています。

ドアからは・・・誰でしょうか、あの背中から膨大な殺気を漏らしている女性は。正直人間とは思えません。魔王かなにかです。

その人を見て、「やっぱな・・・。」と零時くんが呟きました。誰だか知っているのでしょうか？

「・・・今日の4時間目、三上さんが担当だったかならあ・・・」

「・・・アレは三上先生なのですか？ ホントに？」

「零時く〜。アタシの授業サボって乳繰りあつてるとはいい度胸じゃねえか。ええく〜く〜？」

「・・・本人のようです。」

第21話：零時の日常・魔王の説教編。（前書き）

最近眠くてしょうがない……。

第21話：零時の日常・魔王の説教編。

八ヤマサ視点。

やれやれ・・・、何で俺がこんな面倒なことを・・・。

俺は今、生徒会室の前で漏れ聞こえてくる三上先生のお説教を拝聴している。何故ここに居るかって？ 簡単だ、俺は鐘が鳴っても顔を見せなかったお馬鹿さんを見つけるために駆りだされたんだ。しかもあいつを見つけたのは俺だし。

いや、始めはあいつが大人の階段登ろうとしてるんで、教えずにほかつとこうかと思つてたんだが・・・。

・・・生徒会室に聞き耳立ててたら、いつの間にか人の形をした怪物が・・・背後に・・・。

ええもう俺はヘタレですよ。もうそれでいいですよ。あんな世紀末霸王みたいなオーラ出してる人に勝てるか。逆らったらあべし！とかぶべら！とか言わされて粉々にされてしまうんだぞ！

・・・ん？ いつの間にか声が止んでるな。やつと収まったか？

気になつてそ〜つと扉を開き、中を覗き込んで・・・。

・・・すぐに閉める。マツハの動きで閉める！ あんなのは見てはいけない！！ 脳が恐怖でおかしくなつてしまふ！！

たつた今直視した映像が、一生モノのトラウマになることを確信しつつ、俺は視界に焼きついて離れない凄惨な映像を頭を振って消し去ろうと頑張る。

中でその凄惨な映像を本人の意思に関係なく作らされる羽目になっている友人にご冥福を祈りつつ・・・。

御堂視点。

現在、私は床に正座しながらカタカタと怯えている小動物のように震えています。理由ですか？ それはもちろん……。

「よくもまあアタシの授業フケてこんなところで乳繰りあうなんて素敵なことやらかしてくれたもんだね……？」

「だから……それには……理由が……。」

「理由……？ 言い訳の間違いじゃないのかい……？」

……私のすぐ傍で、髪の毛をサヤ人のように逆立てている三上先生が原因です。というか、元凶は私なのですけど先ほどから零時くんしか責められていません。

お陰で先生のお説教……というには攻撃力が高いような気がします。ねちねちねち心にぐさりと突き刺さる言葉を延々と繰り返しつつ、あまりの精神的ダメージに零時くんが気絶しそうになると窓ガラスが割れるほどの大音量の大声でたたき起こすのです。あ、因みにここ、生徒会室の窓ガラスはもうありませんよ。みんな粉々に割れて下へ落ちていきましたから。風通しがとてもよくなりましたね。あははは。

「お前が壊れてどうすんだ……。」

「あ……。」

横から零時くんにツッコミを入れられて、何とか正気を取り戻します。危機一髪でした。もう少しで延々と笑い続けるキイさんになっってしまうところでしたから。

「す、すみません……。お恥ずかしい所を……。」

「ええよええよこんくらい。もう怒ってないし。」(さっきもつと

恥ずかしいことしてたしね。) 心の声

やはり彼はとてもいい人です。あんなことをしようとした私を許してくれるなんて、どれだけ大きい心の持ち主なのでしょう。……
・目が虚ろになっていて、とても辛そうなのが痛々しいのですけど。

「大丈夫ですか？ 先ほどから絶望のオーラが出ていますが……」

「大丈夫だ。多分あと10分ぐらいで俺の意識は完全に消えるから。作者のCDプレーヤーみたいに突然途切れるから。」

そ、それは大丈夫ではないのでは……。寧ろとても危ない状態では……。

「大丈夫だ!! 俺のCDプレーヤーは先日落としたときに蓋が取れたが、今でも普通に使っている!! だからそいつも何だかんだ言って最後まで苦しむことにぶごお!？」

「人様の思考に入ってる暇があったらもつとましなことをしろ。」
「クリームがあ!! クリームが目にいいいい!!!!!!」

……。誰でしょうか、今私の脳内でコントのようなことをした人達は……。顔が同じだった気がします……。あと、バラエティ番組で見ますクリームのたっぷり乗っているパイ皿を顔に当てるのはどうなんでしょうか……。

あ、今気づきましたが三上先生が無視されていると思ったのでしようか……。物凄く怖い顔で私を睨んで……。

コレ『睨む』なんてレベルじゃないですね。『視線で殺す』レベルですね。ほら見てくださいよ。私今震えていますよ？ 震度4くらいの勢いでガタガタ震えていますよ？ 私がいかに怯えているか分かりますよね？

突然生徒会室の扉が吹き飛んだ。さっきので一枚無くなっていたのが、これでもう一枚も無くなって……いや使い物にならなくなってしまうたな。あ、扉壁に刺さってる。半分ぐらい埋まってる。ってんなこと言ってる場合ではないな。何があったのか確認しなければ。

とりあえずとばっちりを食らわないようそ〜っと生徒会室を覗き込んでみると……。

……床に倒れ込んでる生徒会長と……三上先生が視界に入ってくる。アラ？ 何で三上先生まで倒れてるんだ？

「おい……。」

「ん、生きてたか零時。」

「半分死んでる。脚が痺れて動かせれないし。」

あゝ流石に20分三上先生の説教聴きながらの正座はきつかったか……。

「仕方ないな……。」

俺はポケットからラベルに『根性でどうにかしやがれ』と書かれている一本のスプレーを取り出すと、零時へと吹きかける。

実はこれ、作者専用アイテムの【お疲れさま〜ず】というスプレーなのだ。効果は疲労・負傷回復に建築物の修理なんかもできたりする。ただ、自転車のパンクには効かないという謎の弱点があるのだが。

「悪い、助かったわ。」

スプレーでどうにか回復した零時は、俺に礼を言つと目を覚ます気配の無い会長と三上先生を担ぎ出す。どうやら保健室にでも連れて

行くようだ。

これだけ迷惑かけられたのに、わざわざ保健室に連れて行く奴は中々いないぞ。誰だって放っておくだろ。」

「・・・相変わらず、面倒ごとばかり引き付けてるな。」

「もう諦めた。お前だってそうだろ？」

「・・・言わないでくれ。」

最後にさりげなくへこまされつつ、このまま教室に戻るのも癪だったので、零時についていくことにするか。

「・・・それにしても。あれだけ騒いだというのに何の放送も掛からないとは・・・。」

つくづく「こは」はとんでもないところだな。

第21話：零時の日常・魔王の説教編。（後書き）

舞歌：さて、本編で作者が息絶えてしまったので私達だけでここに
いる羽目になっているのだが……。

香奈：……。 （無言で釘バットの製作をしている。）

隼太郎：……。 （無言で手斧を研いでいる。）

小野：……。 （無言で地面に向かってぶつぶつ呟いている。）

中野：……。 （無言でサンドバッグに蹴りを叩きつけてい
る。）

谷田：出番が無い人達の溜まり場ができちゃってるわね。

舞歌：……。正直今すぐ逃げ出したいのだが……。

谷田：無理ね。下手に動いたら標的にされるわよ？

舞歌：助けてくれ零時……。

谷田：アラ？何かあるわね？

舞歌：置手紙のようだが……。

谷田：えっと……。『しばらくしたら、登場キャラでまだ登場

予定のある奴らを全部出す話を書くよ』だそうよ。

香奈・小野・隼太郎・中野：『ギラン！！！！！！』 （欲望に満ちた

目を光らせている。）

舞歌：ひっ!?!?

谷田：……。大丈夫かしら。

第22話：そして明日へと向かっていく。

零時視点。

「ふわあ〜あぁ・・・。」

つと、随分大きな欠伸しちまったな。すまん、午後は大体眠気に襲われるんでな。今日は一段と酷かったし。学校でこんな疲れたの、始業式で起こったある騒動を鎮静させるために奔走したとき以来だ。あぁ、その話についてはまた今度な。つまり作者の気が向いたらってことだ。気長に待っててくれ。そんなヤツいないんだろうけど。

「失敬な！　もしかしたら待ってる人がいるかもしれないだろうが！！」

・・・待て、何でお前が教室こいにいる。ハマサかと思ったら手前作者じゃねーか。わざわざ制服まで着込んでいやがるし。どうやったんだ。

「カカカ！！　俺は作者だぞ！！　この世界において不可能は・・・。」

ものすつつつごく偉そうに喋り始めた作者を鬱陶しく思い窓から捨てるか喉に貫手かましてしばらく呼吸困難にさせるか迷っていると、作者の後ろに誰かが回りこんでいる。くそ、作者が邪魔で誰か分かるん。

無論、喋るのに夢中の作者はそれに全然気づいていない。あ、作者の首掴んだ。

「ぬおお!?　だ、誰ですか!?!」

後半びびって敬語になってる作者が慌てて後ろに目をやると、そこには見た人全員の背筋が凍りそうな笑顔を浮かべている香奈先輩の姿が。　てかよく見たら、釘バツト片手に持つてる。話が逸れるけど、アレ何であんなに血が付いてるのかを教えて欲しい。明らかに10人20人何てレベルじゃありえないくらい血に染まってんだだけだ。

「そんなこと考えてる暇があるなら俺を助ける!!　いや助けてくださいお願いだから早くー!!」

何故か笑顔のままゆっくりと近づいてくる香奈先輩から距離を取っている内に窓際へと追い詰められてしまい、俺に助けを求めてくる涙目の作者。　まあここで助けたらもう少し待遇良くなるかもしれないし、ここは人肌脱ぐか……。

「だが断る!!!」

「ええー!!!???」

だって……、自分より不幸な目に遭ってる奴を逃すようなマネできないんだもん!!　もっと不幸な目に遭って欲しいんだよ!!!

「しもたあ!!!　よく見たら凄く濁った目してたわこいつ!!!」

銀　の万屋さんより酷いでコレ!!!」

あはははは。そんなことを気にするとも思ってるのか?　今の俺は濁った目に淀んだ心、堕ちた魂の3拍子揃ってるんだぜ?おっと、俺に気を取られてる間に香奈先輩が……。

「それじゃ零時くん、部活に行こっか。」

とてもにこやかな笑顔で部活へと誘ってくる先輩に逆らう術なんて持っていないんだ、俺は。

八ヤマサ視点。

「全く。無駄な仕事を増やすな。俺とて限度というものがある。」

俺は先ほど確保してきた、モザイク付きミンチから駄目な人間へとクラスチェンジした作者に愚痴っている。愚痴らずやってけるかこんなこと。

「仮にも貴様はこの『校長』なのだから、もう少ししっかりしてくれ。『理事長』の俺に余計な仕事があるんだ。」

「いいじゃんかよ。その分お前は教員に好かれてんじゃん。俺は誰からも嫌われてるし……。」

「お前の日頃の行いが悪いからだろ。いつとも仕事ほったらかして教頭や神崎かんさきさんに押し付けてるだろ。」

ああ、俺実は作者に頼まれてここの理事任されてるんだわ。正確に言えば作者がサボり続けて被害を受けてる教頭（40歳独身男性。通称バーコード軍曹。）と何故か作者の仕事が回ってくる神崎さん（事務員。24歳独身女性。）に土下座されて頼まれたのもあるけど。

「いやほら・・・、暴れん坊將軍みたいにさ、校内回って不良とかと対決したかったんだよ良い所見せたかったんだよ！」

「逆ギレすんな。そして現実を直視しろお前喧嘩できないだろ。」

「おごー！」

いきなりキレようとした作者を肘打ちで黙らして、きちんと現実を見るよう促す。後書きや感想フォーム以外で作者権限を使えるのは俺だけだ。作者は単に不死身なだけ。ただ、作者は臧太郎さんを味方につけてるから、時々無茶を押し通しやがる。それには注意しないといけない。

「い、いきなり顎狙うのは無いだろ・・・。」

「脳震盪狙っただけだ。寧ろ下を狙わなかったことに感謝して欲しい。」

「ハッ!？」

すぐさま己の分身を隠した作者。顔が隙だらけになったんで右フックにより昏倒させてやる。さて、とつとつこいつを校長室に連れてくか。

首の後ろの襟を掴んで引きずりながら、校長室へと向かう。すれ違ふ人全員目を逸らす、今更そんなことは気にせんわ。

「・・・ん?」

少しして校長室の前に到着し扉を開けようと手を伸ばすが、そのとき何となく廊下側の窓から校庭へ目を向けて見たんだ。

そしたら、情けない面の零時が剣野と飯田先輩に挟まれて困ってたよ。それを見て思わず笑っちまった。

「くくく……。相変わらず可哀相な奴だ。」

まあ、だからこそアイツは色んな奴に好かれるんだろうがな。思わず笑い声が抑えられず少しだけ漏らしてから、俺はいつもはうんざりとした気分を通っている校長室の扉を機嫌よく開ける。さあて、とつとと片付けて帰るかね。

零時視点。

「零時は私と帰るのだ。」

「零時くんは私と部活に行くのよ！ アナタは一人で寂しく帰ってなさい！！」

「部活なんぞ2・3日休んでも構わないだろう。それに零時は部活では退屈そうにしている。」

「な！？ そんな事無いわよ！！」

「いいや、零時が恐ろしく射が上手いので、他人に見せないようにしているのだろう。」

「！？ そ、そそそんなわけ無いわよ……。？」

「フッフッフ。私と先輩には『零時が好き』だという共通点があるのだぞ？ それくらい簡単に推察できる。」

「う……。ううううううー！！！！！！」

「ちょ、先輩獣みたいなの唸り声上げて飛び掛るのは止めてー！！
！ しかも標的俺ー！！！！！！！！」

もう何でこんな素早く窮地に陥るの俺！？ さっき先輩と部活に向かったら舞歌に会って、そんで一気にこんな状況！！ 最早運命

かコレ!?!?!?

つておわつと!?!? アブネ今掠った!! 釘バツト掠った!!

「ちょ、先輩危ないですつて!! コレ見てくださいよ制服破れましたよ!?!」

「うるさい!! 良いから殴られなさい!!」

「理不尽だ!?!?!?!?!」

舞歌視点。

早いな……。パワーはともかく、スピードは以前とは段違いだ。先輩は常人では無いことは承知の事実だが、これほどとは……。む、零時が回避した一撃が

「舞歌感嘆してないでヘルプ!?!」

仕方が無い……。私も参戦するか!

手に持っていた通学鞆から護身用の脇差を抜き放ち先輩へと接近、そしてすれ違いざまに抜刀する。勿論峰ではないぞ?

「はああ!?!?!?!」

「!?!」

普通ならば反応はおるか目で追うことすらできないタイミングなのだが、あっさりとバツトで防がれてしまったな。恐ろしい反射神経だ。

「邪魔する気！？ だったら容赦しないわよ！！」

「フ……。こちらで零時を傷つけるつもりならば容赦はしないぞ。」

脇差の切っ先を先輩へ向けて見栄を切る。先輩は私の堂々とした姿に僅かに怯むが、頭を振ってすぐさま切り替えを行うとこちらへと飛び掛ってくる。

いいだろう。思う存分お相手しよう！

「いや待てジャンル違うから落ち着けよお前ら————！！！！！！」

本日もまた、街に騒動の音が響いていく。破碎音殴打音悲鳴怒号……そして笑い声。

その中心にいる少年に、平穩は存在しない。ただ毎日を騒がしく過ごすのが彼の宿命だ。だが、彼は一度もその境遇を後悔してはいな

第22話：そして明日へと向かっていく。（後書き）

三上：これで一段落ってどこか。

谷田：長かったわね。

小野：あり？　なんかここ少くないですか？

三上：ああ、零時は剣野と飯田を止めるのに忙しくて来れない。作者はハヤマサに捕まって事務仕事手伝わされてる。他も全員用事で来れないってよ。

谷田：で、暇を持て余してた私達が次回予告を・・・というわけなの。

小野：・・・俺好きで暇人じゃないんですけど・・・。

三上：本編に出てないのはアタシも同じだろ。

小野：う・・・！

谷田：さ、そんなことは置いておいて、次回予告にしましょう。

三上：えーと、次回からは学校行事を舞台にするらしいぞ。作中では一応5月の中旬から開始になるから、6月の終わりまで時間を進めるらしいぜ。

小野：何でも友人からの強い要望だったさ。

谷田：私の活躍があるそうね。フフ・・・楽しみ

三上：・・・アンタが動く時って大概零時が被害に遭うんだっけ・・・。

小野：・・・それはもう諦めましょう・・・。

谷田：それでは今回はこの辺りで。次回また会いましょう（投げキッス。）

小野：ごはあ！！！！

三上：感想とか貰えたら嬉しいぜ！　じゃあな！！！！

作者：まだ終わらないのかーーーーー！！！！

ハヤマサ：いいから手を動かせ！！　俺も帰りたいわ！！！！

第23話：衝撃のNO・1クラス決定戦！ その1（前書き）

今回は話を素早く進めるために、無駄に長いです。
すんまへん……。

第23話：衝撃のNO・1クラス決定戦！ その1

八ヤマサ視点。

午前7時。教員と部活動を行う生徒ぐらいしか登校してこない時間帯にもかかわらず、西京高校校長室からはある種の近寄りがたい気配が滲み出ていた。

触れれば誰であろうとも災厄に見舞われる、そんな不吉な気配が。

「・・・本当にやるのか・・・コレ・・・。」

俺は今、校長室にいる。今朝の内に溜まっている書類を片付けておこうといつもより早く家を出発し先ほどここに着いたのだが、校長室には珍しく先客が居たのだ。しかも2人。

1人は、校長室に自分から来ること事態が槍が空から降ってくるよりありえない作者。そして、もう1人の人物は俺の良く知る人物で彼の姿を見つけた時点で俺はこれから面倒事が始まることを直感で察知した。そして、2人から渡された一冊の冊子の内容を確認して、俺は自分のカンのよさをどっかに埋めてこようかよ本気で考える。こんなんアリか・・・。

「勿論！ というか、既に手筈は整えてあったり。」

「ハッハッハ。私の知り合いにも声をかけておいたからな。恐らくは数日中にも準備は整うと思われるぞ。」

校長室の椅子に座り、得意げにふんぞり返っている自分と同じ顔の人物・・・西京高校校長にして、俺とは兄弟のような関係である作者を、怒りと憎しみと、若干の諦観が混じった視線を投げしておく。作者の横でさもおかしそうに笑っている人物は・・・無

視だ。関わったら確実に後悔する。

くそう……、作者だけなら最悪零時に手伝ってもらえばどうにかなるんだが、この人が相手じゃどうしようもない。

「一応聞くが……こんなとんでもない事、家事に疲れた主婦の料理より粗末なお前の頭で考え付いたのか？ 正直に言え。誰かに入れ知恵されたる。」

「そ、その例えは酷くない……？」

作者が涙目で抗議してくるが構う物か。酷くない。全く酷くない。寧ろ優しい方だ。

「知るか。いいから答えろ。」

普段は確実に使わない、ドスの利いた声で作者に脅しを掛ける。自分でも機嫌が悪くなっているのが自覚できてるが、あまりにもキレかかっているので制御できん。嫌ならば早く吐け。

だが、余程話しくい相手から提供されたらしくここまでしても、普段は命乞いなどで無駄に動き回っている奴の口がもごもごと喋るのを躊躇っている。いいから話せ。じゃないと貴様の魂を体から放すぞ。

「わ、分かった！ 言うからその手に持ったそのやけに刀身が波打ってる鎌を下ろせ！！ どころか持ってきたんだそんなの！！」

「アレ、そのソファに置いてあったんだが。お前のじゃないのか？」

「ああすまない。私の持ち物だ。」

『アンタのかよ……?!?!?!』

何故こんなものを持つてるんだ！ あとこんな危険な物を学校に持

つてくるな!!! 何だかオドロオドロしい気配出してるぞコレ!
!.....勝手に借りておいて言うのもアレだが。

「取りあえずコレは処分で.....。」

「この後仕事で使うのだが.....。」

「イヤ要らないだろコレ! コレで草刈はできないだろ!! 絶対
何となく持つてこうと思っただら!!」

「.....。」

「凶星なんだな!? そうなんだな!?」

「ハツハツハ。細かいことばかり気にしていると禿げるぞ2人とも。」

『気にするわあ!!!!!!』

しばらくの間、俺は鎌なんて物騒な物を所持していた駄目用務員を
説教。作者は鎌を処分しに部屋から出て行った。あ、コラ逃げよう
とすんな。

説教が始まる前からトズラしようとするため、仕方なく作者専用
アイテム『ばりやー』にて拘束しておく。流石にこれは破られん
だる。

「さて、それでは説教を始めるか.....。」

「ま、まあ待ちたまえ。その前に一つ伝えなければならぬことが
あるんだ。」

何だ一体? 言っとくが、単なる時間稼ぎならば『ばりやー』の大
きさ狭めてお前を潰すぞ? 事故に遭った野良猫のように無残な屍
に変えてしまっぞ?

「まあアレを見たまえ。そうすればすぐに分かる。」

そう言うと、駄目用務員は校長室の窓を指差す。頭上に？を浮かべつつも、言う通りに窓を眺めてみると……。

……猛スピードで走り去っていく作者の姿が目飛び込んでくる。しかも凄い悪がきじみた顔で。気のせいか「やーいやーい！！ハヤマサの大間抜けー！！！」何て小学生みたな捨て台詞聞こえてくるし。

「……………」

「ハッハッハ。逃げに関して彼は随分腕が良いようだ。ハッハッハ。」

……おし分かった。取りあえず今の状況を整理しようか。

校長室にて作者の馬鹿げた企画を知る 駄目用務員が鎌を所持していたので作者が処分しに行き、俺は説教を 作者逃亡しかもかなりむかつく逃げ方で。

こうなったわけだな？ じゃあ取りあえず……アイツぶつ殺しに行こうか。うん今日こそアイツの息の根を止めよう。もう一生「ごめんなさい」しか言えなくなるように改造してこよう。

ついに奴の滅殺を決断した俺は、校長室の窓を勢いよく開け放って外へと飛び出す。そして着地と同時にコンクリートの地面に跡が付く位に強く踏み出し、脳内で様々な殺し方を思い描きながらカー・ル スヤベ ・ ヨン ンも真つ青なスピードで作者を追いかける。すれ違った女子が悲鳴を上げてたが、全く気に留めません。

さあ作者よ……。今日がお前の命日だ。アハハはハハはハハは母！！！！！！！！

校長室の机に置かれたプリントの束。表紙には『私立西京高等学校・第一回No.1クラス決定戦について』と書かれおり、その下にはこう書かれていた。

主催者・最高責任者・・・校長

現場責任者・・・鎖川隼太郎

考案者・・・N・Hさん。（作者の友人）

零時視点。

今日から6月だ。制服が夏服に変わっても全然違和感の無い時期だ。つーか今年も暑いな。

舞歌との出会いから1週間。相変わらずドタバタした日々送ってるぜ。

先日約束通りに舞歌とのデートへ行って来たぜ。デートつつても

ただ街をぶらついたただけだけど、いやー異性と2人きりなんて初めてだったんで正直緊張してたわ。まあ俺だけじゃなくて舞歌もだったけど。

ちよつと恥ずかしそうに顔を赤らめてたのに凄いドキドキしてたのは秘密だ。恥ずかしいんでな。あ、おいバラすなよ。もしバラしたら・・・ただじゃおかねえ。

キンコーンカーンコーン。

いつの間にか鐘が鳴っている。教室の時計を見ると、どうやら予鈴らしい。教室内にもほとんどのクラスメイトが揃ってきている。だが、いつもならば既に俺に絡んできて床に這いつくばってる筈の小野の姿が見えない。ハヤマサは先ほど携帯に連絡があって今日は休むらしい。病気でも患わせたのだろうか。何ていうか、心労で倒れたとか思ってしまう自分がいる。

香奈先輩はさつきまで部活行ってたからもう会ったし、舞歌はさつきから5分おきにメールが来るから心配ない。・・・彼女はストーリーカー何でしょうか。あ、また着信が。そろそろ着信制限掛けとくべきかな・・・。

てつきりまた舞歌が「・・・。」としか書いてないメールを送って来たのかと思ううんざりしていたら違ってた。どうやら小野からのメールのようだ。

一体何の用だ？ 不思議に思いつつも携帯開いて確認してみる。件名は「すまん！」だった。・・・何かやらかしたか？

内容を見てみるが、何かしらの理由で学校に遅れるから伝えたい欲しいとの事で、理由については一切分からないようにしてある。アイツホントに何やってんだ？

兎にも角にも、取りあえず一時間目の英語はヒマになることが決定してしまった。アレ嫌いだからまともに関心と思わないんだよな
あ・・・。

一時間目をサボるべきか寝て過ごすべきか思案していると、本鈴が鳴り出す。あ、もうこんな時間か。携帯しまつとかないと。この前不用意に三上さんの前で使ってた馬鹿が真つ二つにへし折られてたしな。

鞆に携帯をしまい終わると同時に本鈴が鳴り、それが鳴り終わるとドアを開けて三上さんが教室へと入ってくる。・・・ん？ 何であんなにめんどくさそうな顔してるんだ？ ため息まで吐いてるし。何故かかなり疲れた様子の三上さんに疑問を感じていると、三上さんが教壇の前に立ち、開口一番妙なことを言い出す。

「おはようさん。今日は残念なことに、手前らに面倒なことを話すことになつちまつた。許せ。」

大抵面倒だからと言ってさくさくと物事を進めていく三上さんには珍しく、要領を得ない話し方にクラスがにわか騒がしくなる。

こんなに三上さんが言いよどむからには何かあると皆薄々感じているのだ。もっとも、俺は他の皆とは比べ物にならないくらい悪い予感がしているのだが。

いや、本当に何となくなんだが・・・、妙に作者と叔父さんの顔が浮かんで消えてくんだよ。コレはあれか。虫の知らせってやつか。

秒単位で増していく不安で背中に大量の汗を掻きつつ、表面は平静を装って口を閉じたまま三上さんの次の言葉を待つ。三上さんはクラスの皆が自然に静かになるのを待ってから、重い口を開いた。

「・・・あ・・・・・・・・。今朝校長から直々に話があつてね。」

行事？ 一体なんの？

教室内の全員が同じ事を考えているんだろつな。一部は授業無くなつてラッキーと思つてるのもいるかな。

だが！俺は全く喜べないぞ！！ 何故ならば、その行事はわざわざ校長から述べられているんだぞ！つまり、作者が何か企んでいるということだ！！

それに気づいている俺はもう不安で一杯一杯。作者が絡んでしまつたらまず無事には終わることは無い。確実に周囲に多大な迷惑を縦横無尽に撒き散らしたあと、皆に血祭りに上げられるんだ。しかも懲りない。

もう俺は何が来ても驚けそうにない程沈んだ気分のまま、三上さんの次の言葉を耳にする。

「……行事は、『西京高校No.1クラス決定戦』。校内で一番凄いクラスを決める大会だつてさ。」

最早投げやりな感じになつてしまっている三上さんの言葉に、クラス全員が全く同じ事を考えた。

……何ですと??????

……1年B組が初めて一つになった瞬間だつたそうだ……。

とりあえず、何か死神にでも転職しちまった様子のハヤマサに話しかけてみる。一応こちらへ振り向いてくれたが、目が猛烈に怖い。完全に据わってるもん。しかも戦闘力も上がってるみたいだ。この雰囲気はサ ヤ人ですら怯むぞ。

ハヤマサは俺を見て、背筋が凍るような笑みを浮かべながら一言一言に100人ぐらい呪い殺せそんな怨念を込めて言葉を紡いでいく。

「フフフフフ……。この生きていける価値の無イクサレ外道ヲあるべき場所へ返そうとしテイるだけダ。邪魔をスるナよ？」

「……おい、戻って来い。」

怖いんですけど。つい足が後ろに下がってしまうぐらい怖いんですけど！！

もう何かダークサイドへ傾いてしまっているハヤマサから話を聞きますのは無理だと判断し、俺は長時間逆さづりのままにされていたのか、顔が尋常じゃないぐらい真っ赤になったまま呟き続けている作者の方へと話し掛けた。

「おい。まだ生きてるかー？」

「ごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさい」

「……アレ？ 零時。」

「何とか正気に戻ったか……。なんで、コイツは一体何なんだ？」

俺は作者の目の前に教室にて配られた「第1回西京高校No.1クラス決定戦のしおり」と書かれた冊子突きつける。内容は今回の……ええ名前が長い！！こんな『決定戦』だけでいいだろ！！

んで、しおりには『決定戦』についての簡単な説明が載ってる。こ

れによると、どうやら種目は1種目だけで【障害物レース】らしい。誰でも良いから一番にゴールへ辿り着いた人のクラスが優勝とのことだ。

ただ、レースのルートが随分と広い。学校外に出て、街の外れにある山にまで行かなければならない。しかもゴールは山の向こうにあるから山越えしないといけないし。

「こんなのどうやって行うんだ。商店街までルートになってるけど、これって町の組合に許可いるんじゃないかねえのか？」

「そ、その辺は問題ない……。臆太郎にて、手伝ってもらってるから……うう……。」

「……だから叔父さんの名前が載ってるのか……。」

逆さのまま苦しそうにしている作者の口からは、この企画の裏に叔父さんがいることを再確認する。いや、冊子もらってすぐに気づいたんだけどね。名前書いてあったから。

「ち、因みに……、俺は誘ったりはしていないぞ……。」

お、俺が友人からこの企画を提案されたときに向こうから手伝わせてくれて……。」

「そ、それマジか……？」

「マジだ……。あと、そろそろ助けて……。意識が……。」

弱々しい声で助けを求めてくる作者シカトし、俺はこの企画が既に取り消すことのできない状態であることを認識して舌打ちする。

叔父さんが絡んでいることは、確実にバラエティ番組クラスの障害物が来るな……。いや寧ろそれだけならまだマジか。最悪死人が出るようなトラップが来るかも……。

「うわっ……。明後日休もう……。」

「や、休んだ場合は谷田先生が来るぞ……。」

「ギャアア休めねえ!!! 休んだら悪魔が家に襲撃してくる!!!

!!!……いや待て! 谷田も手伝ってんのか!？」

「じ、自主参加だ……。」

「オーマイガー!!!」

なんてこった!!! これじゃマジで逃げられねえぞ!!! 畜生叔父さんめ! 今度あつたらただじゃおかねえぞ!!!

「くっそ……仕方ない。一旦クラスに戻るか……。」

「ま、待って……。縄解いてって……。頼むから……。」

「お前はそこで一回死んで転生するまで反省してろ。」

「つか元々俺はお前を殺る……。では無くて、ぶちのめすためにココに来たんだぞ? 解くわけないだろ。」

「じゃ、そゆわけで。あとは頼んだぞ八ヤマサ。」

「任せておケ。コイツノ魂を完全に消滅させテみセルさ。八八は八

八は……。」

「……ま、まあ程ほどにな。」

体から淀んだオーラを滲ませている八ヤマサは、どっから持ってきたのか刀身が波打っているデカイ鎌を携えて作者へと近づいていく。棺桶片手に。

最早手の施しようが無いと判断して、俺はそそくさと校長室を抜け出した。

……部屋から出て扉を閉めると中から悲鳴が聞こえてくるが、耳を両手で塞いで聞こえないフリをする。もう俺には関係ありません

んから。

「しっかしまあ……どうすつかねえ……」

校長室へ行つて『決定戦』を止めさせようと思つてたんだが、アレじゃ作者は使い物にならないだろうし、ハママサはしばらくの間近づくと何か刈られそうだしなあ……。叔父さんはまず止められないし。

わくこれ八方塞がりだわ。もう明後日が無事に済むよう祈るしかないなあ……。

まだ当日になつたわけでも無いのに、既に疲労でため息が出しながら俺は教室へと戻つていった……。

あ、作者は次の日校庭で頭に有刺鉄線巻かれて十字架に掛けられたまま放置されてるのを発見されたぞ。谷田さんが診察したけど、「魂が無くなってるから蘇生は無理ね。」とか言われたあとどっかに連れてかれてった。さて、ロボになつて帰ってくるかゾンビになつて復活するか、どっちかね。

第23話：衝撃のNO・1クラス決定戦！ その1（後書き）

零時：遂に始まったか……。

舞歌：確か、この話は作者の学校で10月はじめに体育祭が行われたときから考えられていたらしいな。

香奈：まとまるまで随分長かったわね……。

三上：ホントは体育祭としてやるらしかったぜ？ ただ、作中の定期的に無理があったからこんな企画になっちまったらしい。

零時：……今までのんびり書いてたツケが……。

舞歌：今更言つてもづしようにも無いな。

香奈：……それじゃ、次回のことに切り替えましょうか。

三上：次回からはもう企画開始だったね。

小野：展開早くないすか？

零時：友人に催促されてるってよ。

舞歌：これで大丈夫なのだろうか……。

香奈：今更遅いと思うわよ……。

三上：そんじゃまあ、この辺でお開きにすつかねえ。

小野：俺全然話してないんですけど……。

零時：また今度な。そんじゃ、この辺で。

舞歌：次回楽しみにしてくれ。

香奈：さよ～なら～。

第24話：ついに開催！！！！（前書き）

長い。無駄に長い。

これでもまだ始まるだけなのに……。これからどれだけ続くんだらうか……。

第24話：ついに開催！！！！

零時視点。

空には様々な色を放つ花火が打ち上げられ、どこからかラッパや太鼓によるファンファーレの音楽すら聞こえてくる。ここは学校なのに。どこぞの派手なお祭りってわけじゃないんだが……。時折ざわざわと聞こえてくる少々興奮気味の声とは対照的に、俺のテンションはマックスまで急降下していた。

「……遂にこの日が来てしまったのか……。」

そう、今日は『西京高校No.1クラス決定戦』の当日なのだ。そのため生徒は全員白の半袖の体操服にハーフパンツの格好だ。一部にジャージを着ていたり、何を血迷ったか上半身裸のバカもいるが今上半身裸になってポージングしてたやたらと筋肉質な奴が風紀委員……良く見たら中野と永井の2人に注意されてる。しかも突然逆ギレして2人に襲い掛かってた。バカだ。あの2人不良数人に囲まれても返り討ちにできるのに。

あ、パニックった中野が殴り倒して……顔面に連続ストンピングかよえげつない。あーあー、ありや競技参加無理だな。顔面原型無いもん。いくら突然筋肉の塊に襲われそうになっただからってあんなに蹴り続けるもんか？

永井も傍にいるなら早く止めてやれよ。無表情のまま名簿になんか書き込んでないでさ。

「何を見ているのだ零時？」

顔をグシャグシャにされた哀れな肉ダルマが、正気に戻った中野

によって呼びだされた黒服の連中によってどこかへ運ばれていくのを眺めていたら、誰かに声を掛けられる。この声は・・・舞歌か。

「ん、いや。特に何も・・・。」

「そうか？ 何やら非常に同情めいた視線になっていたが・・・。」

「・・・気にすんな。猛獣に襲われてる人が居たんでな。」

「も、猛獣がか？」

周りに居るかもと思ったのか、舞歌は急いで周囲を警戒し始める。心配ないって。猛獣はもう次の獲物を探しに行ったから。

「・・・何か失礼なこと考えてない？」

「うおお！？」

いつの間にか、先ほど流血ファイト、またの名を私刑リンチを行っていたもうじゅ・・・じゃなくて中野が俺の目の前に出現していた。いつの間に。

「い、いきなり目の前に出現するな！ 心臓に悪いだろ！！」

「気づかない方が悪いのよ！」

「こっちが気づけるように気遣うのも必要だと思っただが！？」

「そんなことしたらこっさり近づけないじゃない！」

「貴様狙ってやがったのか！！ ええいそこに直れ！ 俺の拳骨で

お前の歪んだ性根を矯正してくれる！！」

「零時、それなら私が・・・。」

「お前は止せ舞歌！ その刀で何をするつもりだ！ てかどこから出したんだ！！」

中野との言い争いに夢中になってたら舞歌が物騒なモン出してたよ。何よその危険な雰囲気出してる太刀は。斬られたら体じゃなくて魂

真つ二つにされそうなんですけど。

「案ずるな。この霊刀『真斬』^{まきり}は肉体ではなく精神を斬る。即ち、この刀に斬られた者は心を斬られるのだ。」

「・・・それってどう考えても危険なんじゃないの・・・。」

「何、良くて心神喪失。悪ければ植物状態になるだけだ。死にはしないから安心するがいい。」

『安心できるかあ！！！！』

思わず中野と2人でツツコミを入れてしまつ。どつちにしろ一生病院から出られなくなるじゃねーか！！　そこまできついのは流石に要りませんよ！！

「大丈夫だ。痛みは無い。一撃で仕留めて・・・。」

「ちょ、ちよつと！？　何でそんなに濃い殺気飛ばしながらこつちににじり寄ってくるのよ！？」

「私の中の、良からぬものが、君を殺せと告げてくる・・・。」

「そんな声に従ってんじゃねえ！！！！」

何だか麻薬中毒者などが聞いてそうな電波を受信している様子の舞歌。だああ止せって！　刀を抜こうとするな！！

もう何だかやるのが斬るといふよりKILL^{キル}になつちやってる舞歌が刀を抜こうとするのを阻止していると、突然グラウンドに設置されているスピーカーから放送が聞こえてくる。

『え、これより開会式を始めますので、生徒の皆さんは所属しているクラスに並んじやってください。特に、1年B組の鎖川零時くん。校医の谷田さんより、【早く並ばないと食べちゃうわよ】との伝言を受け取っておりますので急いでください。私のすぐ横で谷田校医が飢えた肉食獣のような目で待ち構えております。』

ゾクウウ!!?? 背筋に寒気が!! ひいい!!??? な、何かすっごい怖い視線感じるんだけど!? だ、駄目だ向こうに顔を向けられない!! きつと今まで生きてきた中でトップ10に入るくらい恐ろしいものを見る羽目になる!!

ここでもたついていたら俺は確実に谷田さんに食われてしまう。良く分かっていない中野と舞歌には悪いが、先に行かせて・・・。

『零時く〜ん。舞歌ちゃんと美弥ちゃんきちんとクラスに連れてかないと、食べちゃうわよお〜〜?』

「さあ2人ともクラスへ戻ろうか! ほらほらもうすぐ始まるから急いで急いでお願いだから急いでくれー!!!!!!」

後半が懇願に変わってしまったっている俺の叫びに気圧されたのか、2人は頭上に?を浮かべながらも曖昧な返事を返して自分達のクラスへと向かっていった。あ、危ねえ……。もう少しでこの作品が終わるところだったぜ。そして多分ノクターンノベルズへ移動・・・。

「そんなことには絶対にならんぞ。」

「のわああ!?! ってハヤマサかよ!?!」

今度はハヤマサが後ろから急に放し掛けてきやがったよ。お陰でまた心臓が……。今日はひたすら脅かされ続ける日なのか?

「ハヤマサ……。頼む、後ろから急に話しかけてくるな。心臓が止まったぞ。」

「お前が来るのが遅過ぎるからだ。もう始まるぞ。」

「え、マジ? んじゃとつと並ばねーと。」

流石にそろそろ並ばなければまずいだろう。俺は八ヤマサとともにクラスの列の並びへと入っていく。普通ならこういうときは背の順やクラス番号などで列に並ぶ場所は決められているものだが、生憎とこのクラスは不真面目な奴が多い。そのため、皆好き勝手に並んでいたりする。さすがに一列にはしているが。さて、俺はどこに座ろうか……。

「おーい零時！ こっちこっち！」

そのとき、列の真ん中ぐらいから聞き覚えの有る声が聞こえてくる。見ると、小野が手を振りながらこちらに呼びかけてきている。

俺と八ヤマサはそれを右から左へ受け流した。（約：面倒なんで無視。）

「ちよちよちよ！！？ 華麗に無視しないでくれよ！！！」

そのまま後ろの方へ座り込もうとすると、小野が慌てた様子で立ち上がりこちらへ駆け寄ってくる。うわメンドクサ。八ヤマサも俺とおんなじ顔してるし。

「オイオイいきなり無視かよ！ 幾らなんでも扱いヒデーぞ！」

「お前と話すと疲れるんだ。これから丸一日恐ろしく疲れるだろうから無駄な消耗は控えたいんだよ。」

「良いじゃん別に！ そんなに疲れるわけじゃないだろ！？」

「具体的に言えば、オリンピックで金メダル取るより疲れる。」

「俺との会話は世界クラスで疲れるのか！！！！？」

「というか、何気に金メダルを取れるって言ったな……。」

あーあー2方向から同時に話しかけないでくれ。俺は聖徳太子じゃねえから一度に処理しきれねえって。落ち着けお前ら。

「お前が前言撤回するまで落ち着かんわ！　ハハハハハハ！！」
「ちょ、おま近いって……。」

話に熱が籠って段々と前のめり姿勢になって顔が近づいてくる小野を片手で押さえるが、本人は全く気にした様子も無く近づいてくる。だーもう鬱陶しい！

「ちょっとどっか行ってる！！」

「え、あ、ちょ、何を……あ、アアアアああー……！！！」

俺は小野の服を思い切り引っつかむと、渾身の力を込めてどっかへ放り投げてやった。小野は情けない叫び声を上げ綺麗な放物線を描きながら学校外へと消えていった。・アレだ、落下地点から車のブレーキ音とか派手な破砕音だとか悲鳴やらなにやらが聞こえてくるけど気にしない。どうせしばらくしたら何食わぬ顔で復活するから。

ハヤマサは少し不機嫌そうに

「……お前酷いな。」

「あいつはいいんだよ。……お、そろそろ始まるみたいだぜ？」

「……（まあいいか。）」

ハヤマサもなんだかんだ言っても本気で小野の心配はしてないらしい。あっさり引き下がってその場に座り込んだ。まあ作者の分身だしな。小野があれくらいじゃ死なないのは分かっているのだ。

俺もハヤマサのすぐ前に座り込み、開会式が始まるのをじっと待つことにする。やがて、スピーカーから放送が聞こえてきた。

キーンコーンカーンコーーーン。

『只今より開会式を始めます。生徒の皆さんはひざまずいてください。』

全校生徒が一斉にずっこけた瞬間です。誰だこんな電波発言する奴放送委員にしたの。教職員ですらこけないにしても驚愕の表情で固まってるよ。

ショックがでかかったのか、大半の生徒が中々起き上がろうとしなかったが、時間が経つと回復してきたのか声が上がってくる。

「……いやひざまずくのはいらないだろ!?!」

「誰だ放送してるの!?!」

「女王様ですかおたくは!?!」

「ごめん。俺Mなんで跪ひざまずいてる。」

「それわざわざ言うことじゃないだろ!?!」

他のクラスからツッコミの嵐だなオイ。てか変態混ざってんじやんか。……ってさつき中野に半殺しにされた筋肉野郎かよ!?! 気色わる!?!

俺が校内にド変態がいたことに衝撃を受けていると、グラウンドに設置されている簡易テントからどたばたと騒がしい音が聞こえてくる。大方先ほどの放送を行った放送委員が怒られてるんだろぅが……ってアラ? いつの間にか八ヤマサがいないな。

俺の後ろに居た筈なのに、一体どこへ……。

『い、痛いですよ理事長!?! 何で殴るんですか!?!』

『自分の胸に手を当てて考えるド阿呆!?! 放送委員のくせして何やってやがる!?!……!?!』

『え? ん……?』

『……いや、やっぱやるな。貴様がすると物凄くバカっぽく見える。』

『うわひどーい！！！！ やらせといてそんなこと言うんですかー！？』

『貴様があんなことを大音量の放送で言うからだろうが！！！！』
『いったーい！！！！』

……どうやらあちらで頑張ってるらしいようで……。この高校での理事長大変なんだな。変なのとばかり面識持ちちゃって可哀想に。

『お前に言われたくないぞ零時！！！！』

油断して他人事だと思ってたたらたわざわざ放送使ってたまで反論されてしまった。つーか何で俺の考えることが分かったんだ……。読心術か？いやまた作者専用アイテムを使ったということも……。様々な憶測を考えると、今度は少々年齢を感じさせる声による放送が聞こえてきた。声からするに、恐らく教頭だろう。きつとハマサにでも頼まれたに違いない。ご苦労さん。

『……え〜お騒がせしました。それでは改めて開会式を始めたいと思います。それでは開会の言葉を。校長先生、お願いします。』
「分カリマシタ。」

教頭が話し終わると、校長こと作者が返事をしてからグラウンドに設置されている壇上へと上がって……。ちよつと待て。アイツあんなメタリックな肌色してたか？顔ツギハギだらけだしこめかみにボルトぶつ刺さってるし。しかも唇の端から顎にかけて溝入ってるし。

あれじゃね？ どう見てもサイボーグかアンドロイドになってねー

か？

てつきり昨日礫にされてたんで包帯でぐるぐる巻きにされてるのか
と思っただら、どうやら無理やりにも出席させるために改造さ
れたらしい。でも可哀想だとか全く思わないけどな。

某物まね芸人のロボツトダンスのようにギクシヤクした動きで階段
を上がりきった作者は、マイクの前に立つと口を下顎ごと下げて喋
り出した。うん、生徒皆めっちゃ驚いてるね。

『皆サン、今日ハトテモ良い天気デスネ！ 私ハ今回ノ『第1回西
京高校No.1クラス決定戦』ガ無事開催デキテ、トテモ嬉シイデ
ス！！』

サイボーグになった作者は片言で喋っていく。これ読者の皆さん見
にくいだろ。

『今更デスガコノ大会ノルールヲ説明シマス！』

コノ大会ハ町内全体ヲ使ツタ大規模ナ障害物レースデス！ 生徒ノ
皆サンハスタート地点デアルココカラ、冊子ニ書カレテイル所定ノ
コースヲ通ツテ町外レニアルゴールヲ目指シテモライマス！！
コースノ途中ニハ様々ナトラップヤ障害ガアリマスガ、皆サンニハ
ソノ全テヲ超エテイタダキマス！ 途中デコースヲ変エタリ、車ヤ
バイクナドヲ使用シテズルシヨウモノナラ、ソノ人ニハ一生消エナ
イトラウマヲ刻ミマスノデ覚悟シテクダサイ！！』

マイクから流れてくる今回のトンデモ行事の説明に、俺は改めて驚
愕と呆れがない交ぜになる。よくもまあこんなこと実現できたもん
だ・・・。

しかもルール破りはトラウマ決定かよ。どんだけ違反に厳しいんだ
よ。

『デスガ、ソノ困難ヲ超エテ見事ニゴールヘ一番乗リヲ果タシテ優勝スレバ、優勝シタクラスニ八豪華賞品ガ。見事ニ勝利ヲ勝ち取ツタ生徒ニ八、私ノカデドンナ願イデモ叶エルコトガデキマスヨ！！』

皆サン、頑張ツテクダサイ！！！！』

『ウオオオオオオーーーーー！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！』

作者の説明が終わると同時に、多くの生徒からの大歓声が盛大に響く。多分野郎の比率が多いんだろうが。

そう、実は今回この大会で優勝・・・つまり一番でゴールに辿り着いた人物には作者の力で一つ願い事を叶えて貰えるのだ。とんでもねえな。

お陰で、生徒間の盛り上がりは尋常じゃねえ。下心丸出しな男子・ぶつぶつと何かを呟いている女子・「零時殺・・・零時殺・・・・・・」を怨念が滲み出てそうな表情でぶつぶつ言ってる額にI・K・F・C（飯田香奈ファンクラブの略）と書かれた鉢巻をしている男子など、異様な気配がグラウンドに渦巻いている。

・・・てか、何か俺に殺気向けてくる連中がいるんだが。しかもかなりの数。鬱陶しいんだけどな。

殺気を向けてくる連中をどうするか考えようとした時、俺は何気無く横に目を向けて・・・・・・とんでもないモノを見てしまつて大後悔時代に突入しました。

「（この大会で優勝して零時と・・・・・・・・・・フ、フフフフフフフフフ・・・・・・）」

別のクラスで他の人とは比べ物にならない紫色の禍々しい欲望のオラガ立ち上っている舞歌。人目を気にせずに浮かべている邪悪な

笑みが周囲のクラスメイトを遠ざけていることに全く気づいてない。
うっわぁ……。

流石に長時間直視しているのはきついので、また別の場所へと目を向けると……。

「（これはチャンスなのよ……。零時くと結ばれるチャンス……。他の人達を蹴散らしても頑張るのよ私……。うふふふふふふ。）」

こちらではうって変わって不気味なほどに静かな様子だ。……。香奈先輩が何をどう間違えたか殺気を撒き散らしてるので誰も喋れないだけなだけだな。あ、何人が気絶し出した。

これから親の仇でも討ちに行くような気迫の先輩からも目を背け、仕方なくまた別の方向に目を向けると……。

「（ふふふ……。私では優勝は無理ですが、これだけ大規模な大会ならば混乱が起きるのは必至。その隙を狙って零時くと……。）」

獲物を狙う猛禽類のような目でこちらを見つめてくる生徒会長が。昏間にもかかわらず目が光っているように見える。マジ怖いよー！！！！

これで3方向を封じられてしまった。ど、どないせえいうねん！！！！これどないせえいうねん！！！！後は後ろしかない……。。

「零時ー！！ 手前よくも道路なんか放ってくれやがったなー！！！！」

先ほどぶん投げた小野が復活していた。良かった！！ホントにこいつで良かった！！！！

「このお礼は存分に……って零時？ 何でそんなほっとした顔してるんだ？」

「……今お前が親友で良かったと心の底から思ってるよ……」

「はあ？」

小野が分けが分からないといった様子だが気にしない。今はこの平穩を噛み締めたいんだよフレンド……。

『……エーソレデハ、長々ト話シヲスルノモ何ナノデ、ソロソロ開始シタイカト思イマス。コノママノ状態デ、合図ガ出次第スタートシテクダサイ。』

あ、段々纏められなくなったからいきなり始め出したな。ま、いいけど。

作者が壇上上がったまま、腕を上げて……手首が真横に開いてそこからどう見てもライフルの銃口としか思えないものが出てきたため全員が静かになる。

「いや待て、どこまで改造されたんだお前！」

『氣ニシテハイケマセン。』

思わずツッコミを入れたがスルーされた。気にするってそこは。

俺はさらにツッコミを入れようとしたが、作者がそろそろ始めようとしたので発言の機会を逃してしまった。

『ソレデハ始メマスヨ。ヨーイ……』

作者が手首の銃を空へ構えて出すと、生徒は皆外へと続く校門の方

・ ・ ・ 死人出ないだろーなコレ ・ ・ ・ 。

【レース開始。】

第24話：ついに開催!!! (後書き)

作者：サテ、遂ニ始マツタワケダガ……。

零時：まだメカのまんまなのかよ……。

ハヤマサ：しばらくはこのままだそうだ。少々やり過ぎたな……。

零時：やりすぎなってレベルじゃないだろコレ……。

作者：細カイトハ気ニスルナ。

零時：お前のことなんですけど!!!

ハヤマサ：まあ作者については置いておこう。言い出したらきりが無いぞ。

零時：……そうだな。

作者：デハ次回予告デモ。

ハヤマサ：次回からは本格的なアクションが出てくる予定だ。友人N・Hから提供されたトラップが出てくるぞ。

零時：この企画どれくらい長引くのかねえ……。

ハヤマサ：……5話は続くかと。

作者：最悪、モット長ク続ク可能性ガアルガ。

零時：もう終わろう!!!これ以上話してたらどんどん悪くなっちまう!!!

ハヤマサ：それではこの辺で。さらばだ。

作者：次回マデニ八元ニ戻ツテオクゼ。

零時：お前もうそのまんまでいいよ……。

第25話：第一チェックポイント・ナマモノはまずいだろ。(前書き)

予定より遥かに長くなってしまった・・・。
しかもこれでも切つてある方だし・・・。

第25話：第一チェックポイント・ナマモノはまずいだろ。

零時視点。

ふう……。正門から出てそれなりに走ったが、まだ大丈夫だな。まあ今日はいつもみたいの手を抜いてるわけじゃなくて、何が起きてもいいよう有る程度本気になってるからな。このくらいじゃ疲労なんて起きねえ。

俺は同じクラスであるハマサ・小野と行動を共にしながら指定されているコースを走っている。この辺りは高校から少し離れた住宅街だ。普段ならばペット連れで散歩しているオバサンがチラホラと見えるだけなのだが、今日だけは体操服姿で走っている学生が多く見える。無論俺もその内の1人なのだが。

少々遅れたが読者の皆にコースについて説明するぜ。この障害物レースは学校側より渡された冊子に記されているコースを通っていき最終的にはゴールへ辿り着くという感じだ。

ただ、コースの途中には障害があり、それをクリアしなければならぬ。でなければ反則として取られ直ちに叔父さんのツテで協力してもらっている謎の黒子集団に連れて行かれることになるのだ。

因みに、スタート直後に自転車をおうとした愚か者がいたが、それは5人ほどの黒子に連れて行かれたな。そのお陰か、他に乗り物をおうとするものはいなくなったが。

流石に黒子に連れて行かれるのは誰でも嫌だろうしな。

「最初の障害物ってまだなのかよ？」

先ほどから先行しているハマサの左後ろをついてきている小野が不満げな口調で呟く。かれこれ14、5分も走っているのに未だに

障害が見えないので少々つまらなく思っているようだ。どうせ障害物を見たら逃げようとするだろうに。

「ちよつと待て。今確認する。」

先頭を走っているハママサが背中へと手を回し、そのまま服の中へと手を突っ込む。すると、少しの間ガサゴソと音をたてた後に今回の行事の冊子が出てくる。

「どこに入れてんだよ。」

「細かいことは気にするな。．．．ふむ、どうやらあと2、300m先にあるようだ。ルートが少々曲がりくねっているので時間がかかるが。」

「えーマジかよ！ ならとつと行こうぜ！俺も走るのが飽きてしようがねえよ！！」

「お前のその考えなしの頭を時たま物凄く羨ましく感じるよ．．．。」

ハママサを抜いて勝手に先へと進んでいく能気な脳みそを持つ小野に1割の羨望と9割の同情を混ぜた視線を送りながら、俺は仕方なくはぐれないよう小野の後ろへとついていく。

．．．さて、最初の障害ってのはどんなかね．．．。

数分後。

「なあ……」

「……なんだ？」

「……コレか？最初の障害って。」

「……恐らくは……。地図にはここだと書かれているからな……」

「……俺、さっき言った事取り消すわ……」

俺達は今、第一障害物を見上げながら呆然としている。そう見上げているのだ。

前方には街中に作られた縦幅10数m、横幅100mはあるだろうかという巨大な崖が出現しているのだ。ありえねえ！。

斬新な形のマンションか何かだと思ったかっただが、残念なことにもどう見てもロッククライミングしてくれといってるような荒々しい岩肌の崖だし、ハヤマサの冊子に載ってる地図を見ると、ここで間違いないようだ。

「うっわーマジかよ……。ロッククライミングなんて最近やってねえぜ？」

「まだ経験があるだけマシだろう。俺は初体験だ。」

「あ、俺登った経験は無いけど、おんなじぐらいの高さから落とされた経験あるぜ？」

「……」

「な、なあ無言になるのはやめようぜ……。あと同情の視線が飛んでくるのは何故？ ねえちょっと？ おーい……。？」

そんなことを自慢している時点でお前はもう駄目なんだよ……。可哀相な友人から目を逸らし、改めて前方の崖を見てみる。

やはり高い。下には安全に配慮してるのか警察なんかかたまに使った衝撃を吸収するどでかいマットが敷かれているが、それでも怖い物は怖いだろう。現に崖下には余りの高さに登ることを躊躇ってしま

って立ち往生しちまつてる連中が何十人もいるし。

「うわ〜高いなこりゃ・・・。」

「少なくとも学校行事で登るレベルは超えているな。」

「・・・あ、俺家に忘れ物してたわ。帰って良い？」

『却下だ。』

今更になって逃げ出そうとするな。黒子さんに連れてかれる羽目になるぞ。第一、お前だけ楽するなんて許すと思ってるのか？

逃亡を希望してくる小野を2人で切捨てていると、空からヘリの物と思われるローター音が聞こえてくる。え、何テレビ中継でもしてんの？

不思議に思っ頭上を見上げてみると・・・。

『皆さんどーもー！！ 私は鎖川隼太郎さん提供のヘリによる司会・実況をさせていただきます、西京高校3年放送委員長の知瑠矢^{ちるや}ミコでーす！！！！ 皆さんが無様に消えていく様をしつかり実況するのでよろしくー！！』

ヘリに設置されているスピーカーから、元気と悪意がタップリのハスキーボイスが響いてくる。てか、この声開会式のとくにハママサに怒られてた奴の声じゃん。ああ、ハママサが1人ずつこけてるし。

「大丈夫かー？」

「・・・このまま死んでしまいたい・・・。」

大分参ってらっしゃるようで。よっぽど精神にダメージがきたのか、地面に両手ついて跪くような格好のままテンションが急激に下降してってる。なんか放つとくと地面にめり込んでいきそうだな。

『えーでは、第一エックポイントに辿り着いた人達に説明を致しまーす。見ての通り、前方には白人と黒人の間にある人種差別のように高くそびえ立つ崖がありまーす。皆さんにはこの崖を自分の力で越えてもらいまーす!』

「微妙な例えをするな。」

『なお、崖の向こうには底なし沼がありまして、中央にある足場に上手く乗らないと沈んじゃいますから気をつけてくださーい! 因みに沈んだら自力では絶対上がってこれませんよー!』

「シカトすんなコラア!! てかソレ死人出るんじゃないのか!?
せめてコントとかで使うネバネバ地帯で済ませようぜ!!!」

「つーかあんな高さから飛んだらぜってー着地の反動で体勢崩して落ちると思うんですけどー!!!?」

「その前にどうやって底なし沼なんて作ったんだ……。」

俺、小野、辛うじて復活したハマサの順にツッコミを入れていくが、ヘリの知瑠矢には聞こえた様子はない。てか絶対シカトしてるだけだ。確実に。

『あ、因みに底なし沼に落ちても大丈夫でーす! 黒子さんに救助されてかいぞ……じゃなかった蘇生手術が行われますから死んじやったりしませーん。安心してくださーい!!』

「……安心できるかー!!!!!!!!!」

1パーセントも信頼できそうに無い知瑠矢の言葉に思わず3人でツッコミを入れちゃったよ。しかしこれでも知瑠矢は聞こえないフリをしてしまい何の効果も与えられなかったんだが。

『あ、そうそう言い忘れてましたが、第1と第2チェックポイント
は一度に40人ほどしか挑めませんよー。人が多すぎると混雑し
て大変なことになってしまおうのでー！ でわ、頑張ってくださいーい
！！ー！』

無責任な言葉を最後に告げていくと、知瑠矢の乗っているヘリから
開始を告げるかのように笛の音が響く。あ、行けっか。逝って来
いっつての。

思わず俺はがっくりと肩を落としてしまふ。すると、小野が何か思
いついたのか手を叩いて声を上げる。

「・・・やるしかないのか・・・。」

「い、いや待て！ 零時ならこの崖に人が通れる穴でも作れるんじ
やないのか！？」

「ナイスアイデアだ小野。」

強引だがかなり楽ができる小野の考えに八ヤマサが賛同する。あ、
それいいね。確かにあれくらいなら何とかぶち抜けるかもしれん。
拳を少し痛めるかもしれんが、まあいいだろ。俺は早速風穴を開け
てやろうと腕を回して気合を入れる。・・・が。

【ザザザザザザザザザザザザザザ！！！！】

「「「「「「「「「「」」」」」」」」

30人ぐらいの黒子さんに囲まれてしまいました。わーこわー。
しかも囲まれたのは俺だけじゃなく、小野と八ヤマサも一緒に囲ま
れてる。あれ、これってまさか・・・。

「あの・・・もしかして、壊すのって反則になるのか？」

「……………(コクコク)。」

親切(?)な1人の黒子さんが俺の言葉を肯定してくれた。どうやらこの障害物レース、ショートカットとかのズルは何が何でも認めないらしい。フーか喋ろうよ。

いや、義手のリミッター解除すれば簡単に蹴散らせるだろうけど、流石にそこまで派手にするつもりは無いからな。仕方ないから諦めよう。

「ハア……………。しょうがない、登るか……………」

「えー!? マジかよー俺登りたくねーって!!」

「……………すんませーん、こいつさつき崖に穴開けようとしてましたー。」

「よーしそれじゃ気合入れて登るかー!!」

小野がまだわがままを言うてくるので、適当にでまかせを言う。すると、どこかへ去ろうとしていた黒子さんたちが一斉に小野へと目を向ける。黒頭巾で顔隠れてるのに、目だけ光ってるよ。こわあ。小野はそれにびびって即座に前言を撤回し、崖下へと向かっていった。チキンだなあアイツ。

「零時、俺達もとつと行くぞ。」

「ま、こんなところで時間つぶしてるのも何だしな。」

ハヤマサに促され、俺はがけ下へと向かう。

「……………間近で見ると、やっぱり高いな……………」

崖下へと着いた俺達は改めて崖を見上げてみる。やはり、マットが敷いてあるからといって平気で登れるような高さじゃないなコレ。

「な、なあ・・・棄権していいか？」

「あそこで待機している黒子達に連れて行かれないのならそうしろ。」

「うう・・・。」

ここまで来てなお諦めの悪い小野を、ハマサが少し離れた所でこちらを監視している黒子さんたちを指差すことで切り捨てる。往生際悪すぎだぞ小野・・・。

「つべこべ言ってもしかたねえ。さくさくいっちまおうぜ。」

俺はそういうとロッククライムができるようにわざと突起や出っ張りが多い岩肌を、簡単に崩れたりしないか確認しつつ登っていく。

「ほら、行くぞ小野。」

「うう・・・こええなあ・・・。」

続いてハマサが躊躇することなく出っ張りに掴まりどんどん登っていき、小野もようやく観念したのか弱気なことを言いながらも登り出していく。

俺達が登り出したことで、登ることを躊躇って崖下でたむろしていた他の奴らも焦り出し続々と登り始めだした。まあ俺は別のことを考えてたんで気にしてなかったんだがな。

「くっ……ロッククライムとは中々きついものなのだ……」

「まあ経験なしの素人がいきなりやるようなことじゃねえなあ……」

今3分の1を登りきったところだ。今の所俺が一番先行しているよ
うで、俺のすぐ下に零時、あとは別の学年・クラスの連中が追いつ
がっているという感じだ。因みに小野なら大分下だ。途中で怖くな
って動きが止まっていたからな。

俺は疲労をなるべく感じないようにするため、すぐ下の零時と話を
しながら

「お前はそれほどきつくなさそうだな。」

「伊達に体鍛えてあるわけじゃないんでな。」

そう言っつて顔を上げると、こちらへ口の端を吊り上げて笑みを浮か
べてくる。余裕があつて羨ましい限りだ。その余裕を少し分けてく
れ。

そんなことを思いつつ、俺はさらに上がるために次の出っ張りを掴
み体を上げようとして……。

【ガコン。】

「……ん？」

妙な手ごたえに疑問符を浮かべる。良く見ると、たつた今掴んで力
を込めた出っ張りが何故か少しだけ下へと下がっており、しかも何
だかゴゴゴゴなんて音まで聞こえてくる。

……これはアレか、やってしまったのか。

【ゴゴゴゴゴゴ・・・。】

まるで俺の考えが正解だと言わんばかりに、崖の上部に大きなクレパスが開いていく。どうやら、トラップの類らしい。一体何が起くるのか・・。

思わず警戒してそのまま動かずにいると、完全に開ききったクレパスの中から貴下音が聞こえてくる。何かが出てくるのか？

じっと見ていると、クレパスからマジックハンドに掴まれた料理なんかに使う銀色のボウルが出てくる。それも一つではなく、大量にだ。

どうやら下の方にいる連中はいきなり出てきたボウルに困惑しているようだ。何故ここで出てきたのか分からないので仕方ないが。

「……………」

しかし、俺には見えていた。あの銀色のボウルから、ウネウネしてたりシャーとか言ってるっしやる細長い爬虫類がはみ出たのを。

10中8・9あのボウルはひっくり返されるのだろうな。そういうトラップなのだろうから。俺は下へ振り向かずに零時へ話しかける。若干泣きそうな心境で。

「……………零時。」

「……………なんだ？」

「……………泣いていいか？」

「……………泣いても意味無いぞ……………」

うん、分かっているさ。けど、人間にはどうしても堪えきれないときがあるんだよ…………。

半泣き状態で霞む視界の中、俺は銀色のボウルがひっくり返され、

中に入っていた爬虫類や両生類などのゲテモノがこちらへ落下して
きているのが見えた・・・。

第26話：あの人は卑怯だ。（前書き）

最近自動車学校行ってますが、今年中に仮免ゲットできるかすげえ不安……。つーか無理かも……。

第26話：あの人は卑怯だ。

零時視点

「くっそ鬱陶しい!!」

頭上からは続々と蛇やら蛙やらトカゲやらのナマモノが大量に落とされてくる。俺は左手を出っ張りから離して迎撃に使ってるからどうにかなっているが、下にいる連中は大分パニックに陥ってるようで、悲鳴や慌てた声が聞こえてきたりするが、それもほとんど無くなっている。

あ、ハヤマサは『ばりやく』で何とか防ぎながら上に登ってってる。いいねーあんな便利な作者シロモノ権限使えて。

「キヤアアア!!!??」

「うわあああああ.....」

あ、今誰か落ちてった。下見て確認してみたらもう30人ぐらいがおっこちてる。あーあー黒子さんたちに連れてかれてったよ。一体どんな目に遭うんだか.....

【ウィーーン。】

「んお?」

下へと気を取られていると、どこからか機械音聞こえてくる。音が小さいのでどうやらかなり近くから聞こえてきてるみたいだ。多分このゲテモノパーティーとは別のトラップが作動してるんだろすが、今度は一体なん.....。

「ゲコゲコ。」

ぶええええ！！？？ く、口に蛙が！！ 蛙があああ！！！！

「！？ 零時大丈夫か！？」

ハヤマサが心配そうに声を掛けてくるが、残念ながら返事を返す余裕は無い。というより口に蛙入ってるから喋れねーよー！！！！

顔は崖の方を見ていたのに何故かピンポイントで口の中に蛙が落ちてきやがったよ。ギャアア口の中に気色悪い感触がー！！ 変な液体出しとるー！！！！？？ てか人の口の中で鳴くなー！！！！！！
うわああああ！！！！！！

「消える両生類ー！！！！！！！！！！」

「ゲコオー！！！！！！！！！！」

俺は大急ぎで口から蛙を引っ張り出すと、もうごんだけ絶好調のときでも出せないような力で蛙をどっかへぶん投げた。何で驚愕の声出しながら飛んでくんだよ！ お前まさか叔父さんの手の者か！？

【ガコン。】

「あれ、何この準備完了みたいな音？」

蛙に気を取られていたのですぐに気づけなかったのが仇になった。俺が明後日の方向に消えていった蛙から崖へと目を移すと、そこには黒光りする銃口のような筒が出現している。さっきまでの機械音はこれだったのか！！

「しま……【ドバシユウ!!!】ぐほおお!!!??」

自分の迂闊さを呪うヒマもなく、銃口から出された超高压の水撃を胸に食らい、俺はなす術なく崖から両手を離してしまった。

（畜生……！ あのタイミングで来たってことはやはりあの蛙は俺を狙ったトラップだったか……！ 油断したぜ……！！）

「零時!!!」

ハヤマサの声が再び聞こえる。周囲の景色がゆっくりと流れていく中俺は悔しさで歯噛みしつつも素早くこの状況を打破する手を考える。

（足場はなし。道具もねえ。そして崖から大分離れちまつてる。これから状況を好転させんのはかなり厳しいが……。）

「不可能じゃねえぜ！」

俺は呼吸を整えると、両足に体内に流れる力を集めるイメージをする。そうすることにより、両足に氣を溜め込み次に繰り出す技の準備をしておく。

そして、既に2、3mは離れている先ほど水撃を食らわしてくれた銃口を睨みつけると、両足に込めていた氣を爆発させるように放出する。

「<飛燕脚・翔>!!!」

足の裏から爆発したかのように放出された氣により、落下していた俺の体はまるで打ち上げられたかのように飛翔し、崖へと戻っていく。そして先ほど居た場所よりもさらに上へと来ると、素早く両手

を伸ばして手短な出っ張りを掴む。

「よっとー!」

掴まった出っ張りはハヤマサのように仕掛けの施してあるものではなく、普通の物のようで特に動いたりはしなかった。ふう……。何とかなつたぜ。

「ノオオオオオー!!!??」

「!? 今度は何だよ!?」

何とか崖に掴まることができほっとしていると、上から叫び声が微かにだが先ほど俺が食らった水撃の音が聞こえたので、俺と同じく吹き飛ばされたんだろう。

誰がやられたのか確認するため顔を上げると、丁度落ちてくるヤツと目がバッチリ合ってしまった。……。つーか落ちてるのハヤマサじゃねーか!!!!!!

「どああ!!!!??」

咄嗟に左手で落下するハヤマサの足を掴んで落下を止めてやるが、何分ハヤマサは落下していたのだ。その衝撃は当然俺に回ってくる。

「ぐお!??」

「どぶ!??」

その衝撃により、両足がやっと引っ掛けた足場から離れてしまい、ハヤマサの足を掴んでいるために片手でしか出っ張りを掴むことができない。これじゃ上がること下がることもできねえ。

「うぐぐ……。」

ハヤマサが反動で岩肌におもつくそ顔面ぶつけてたが、その辺は助けてやったんだから勘弁してほしい。落ちるよりマシだろ。

「だ、大丈夫か？」

「ひゃ、ひゃんほか……。」

声をかけると、ハヤマサは逆さまの状態でも鼻を押さえながら無事を伝えてくる。

「んじやとつとどつかに掴まってくれ。この状態じゃ動けねえんだよ。」

「わ、分かった……。よ……。ほつ……。」

ハヤマサは返事を返すと、ぶらさがったままの状態から手を伸ばして手短な出っ張りを掴もうともがき始める。俺はハヤマサが足場を確保するまで何もできないため、適当にぼけつとしとこつと、上を向く。

「れ・い・じ・く……ん」

……。アレアレ？ 何だかこの場に絶対出現しそうにない人物が頂上で俺を見下ろしてましたね？ 幻覚かな？ さっきの蛙が毒撒いてったのかな？

幻覚だと決め込み、瞬きしてみるが……。

「ふ〜んふ〜んふ〜んふ〜ん」

……。ハイ現実ですね。とっても楽しそうに鼻歌歌いながら、体に

地面まで下ろしたザイルを結びつけている谷田がいる……結びつけて？

ちよつと待てや。何でザイルなんか体に結び付けてんだよ。登山やるわけじゃないんだし……ってオイまさか……!!
谷田が何をしようとしているのか気づいた俺は顔が青ざめる。

「ちよ……！ 待った待った止めてよして止めて……!!」

「んふん……。やめないわよ　それえ……!!」

俺の魂の叫びも空しく、谷田は四肢を大きく広げて空中へと身を乗り出す。ぶつちやけ白衣着たまま飛びました。ワオ。

「零時くくくくくくくくくん……!!……!!」

重力と欲望に従って、谷田は真つ直ぐに俺へと落下してくる。物凄いご機嫌な笑顔でこちらへ向かってくる谷田を見て、俺は……。

「ギャアアアアアア……!!??　来るな……!!……!!……!!」

恐慌状態になってますた。いやさ、捕まったら多分大会終了まで何か18禁なモノを搾り取られそうです。つーか普通に怖くてさ。
アレだ、ほら、肉食獣に追っかけられてる草食獣の気分だよ。捕まったら食われます。生きたまま。

「うおお……!!……!!」

「な、ちよ、零時何をす……!!……!!??」

けどさ、草食動物だって抵抗はするだろ？俺もまあ抵抗したんだけ

どな……。抵抗の方法が良くなかったぜ……。俺は気が動転してて、左手で掴んでる『モノ』が何かド忘れしたまま、ソレを思いっきり谷田にぶん投げたのだ。そう、いつもは絶対出さないような、乗用車とか放り投げられるくらいのバカ力で。

「……………あ。」

「Noooooooooo!!!!!!!!!!!!!!!!!!」

俺の手から放れたハヤマサは、涙目で何故か英語で叫びながら砲弾のような速度で落下途中の谷田へと突っ込んでいく。ああ……。ハヤマサの涙が軌跡を描いてるよ……。無論、落下状態の谷田にきりもみ回転をしながら猛スピードで迫ってくるハヤマサを回避する術は無い。谷田とハヤマサは空中で思い切りぶつかった。

「キヤアア!!」

「どぶはああ!???」

谷田の甲高い悲鳴とハヤマサの情けない声が同時に響く……。が、どっちかつつーと谷田の方が酷いな。咄嗟とはいえ顔面から突っ込んできたハヤマサを肘で受け止めてやがる。受け止めるじゃねーか。返り討ちにしてるつつつた方があってるな。

……元を正せばハヤマサブン投げた俺の所為何だけどな。だが効果はあった。ハヤマサがぶつかった衝撃により、谷田の落下コースが俺の位置からずれたのだ。

「ああ〜んそんなあ〜……………」

「……………」

残念そうな表情で落下していく谷田と、顎にキツイのを食らったた

め意識を完全に刈り取られているハヤマサが俺の横を落下していった。

ハヤマサよ、お前の死は無駄にはせん……。 (注・死んでません)

「おっし、今のうちに登つとかねーと。」

俺は気持ちを切り替え、ハヤマサを投げて自由になった左手で少し上の出っ張りに掴まると、ぶら下がり状態になっていた両足も引っ掛けると、トラップが無いか確認しつつ慎重に上へと進んでいく。結果何事も無く頂上まであともう少しというところまで辿り着けたが、そのとき妙なことに気づいた。

「……アレ？ このザイル……。」

俺の左横にある、谷田が体に結び付けていたザイル。これが揺れているのだ。ただ揺れているだけなら問題は無い。風かなんかで揺れているのだと普通は無視するだろう。

だが、ザイルの揺れ方が不自然なのだ。ザイルはピンと張っていて、まるで何かが登って来ているような感じで……。

「!?!?」

何かに気づいた俺は急いで下に視線を向ける。すると……。

「うふふ……。まだ終わってないわよ……。」

「嘘お!?!?」

ザイルに掴まって自衛隊員も真つ青なスピードでよじ登ってくる谷田が。未だかつてあれほど恐ろしい笑顔を見たことはありません。バツクに豹のイメージが浮かんでいる!?!?—か何であんな早く登

れるの!?

崖に掴まってるから逃げ場はなし。使えるのは精々片腕ぐらい。頂上にも上つても恐らく谷田は追いかけてくる。この状況でどうすれば谷田をやり過ごせる!?

コマンド

たたかう

まほう

アイテム

はなす

神滅流を使う

「!!! コレだああ!!!」

俺は谷田が掴まっているザイルに目をつけると、左手に氣を通わせて思い切り横に振るう。

「<瞬刃>!!!」

すると、手に纏われていた氣が手の動きに合わせて三日月型の刃となって腕から飛び出し、軌道上に存在したザイルを簡単に切り裂いた。

「ハラ?」

谷田は掴まっていたザイルが途中で切られたため再び重力に捕まってしまう、突然起きた出来事に反応しきれず啞然とした表情のまま落下していった。

「あ〜れ〜れ〜れ．．．．．」

今度は谷田が下のマットまで落下したのをきちんと見送って、それから登るのを再開する。つっても、もう目と鼻の先なんだがな。頂上。

「いよっ、と．．．．．」

俺は右手を頂上に掛けると、一気に体を持ち上げて上がりきる。そして、足が頂上に到達すると、俺は立ち上がって崖の向こう側を見る。

．．．．うん、まあこのまま普通に下りるとは思ってなかったけどさ．．．．。コレは無いんじゃないか？コレは．．．．。崖の向こう．．．．。さらなる先のルートへと通じる道の前には、紫色の沼地が広がっていた。沼地は横幅が崖と同じぐらいでどうやら沼地に設置されてるいくつかの足場を経由して沼地を突破しなければならぬようだ。

「おいおい勘弁してくれよ．．．．。」

第1障害物はまだ終わりを迎えないようだ．．．．。

「待て次回!」

「ここが終わるのかよ!」?

第27話：エロパワーは不可能を可能にする。・・・ワケないだろ。

(前書き

皆さん、明けましておめでとー！ー！！！！！！

・・・遅いですよね。もう10日以上経つてますもんね・・・。

第27話：エロパワーは不可能を可能にする。……ワケないだろ。

零時視点。

「うわ……、これどうやって突破すっかなあ……。」

俺は眼下の紫色でポコポコ煮立ってる底なし沼を眺めつつ嘆息する。
……何でマグマみてーに煮立ってるんだよ！ ホントに底なし沼
なのかコレ！？

現在俺は崖の頂上にて立ち往生中。何だか昔どっかの絵本で見た地
獄の釜みてーになってるよ。別に悪いことしてないぜ？ホントに。

「ぐ、ぐぬぬ……。」

後ろから声があるので振り返ってみると、ちょうど遅れていた小野
が息を切らせながら頂上に到達する所だった。落ちてなかったんだ
な。

「な、何とかな……。途中で野球部のヤツを足場にして落下を止
めて崖に掴まったんだ……。」

「……他の部員に仕返しされるんじゃないね？」

野球部の奴らって連帯感強いからなー。金属バット持って追いか
けられて俺は助けんぞ。メンドイからな。

「あ、そついや途中でハマサと谷田さんが落ちてったけど、何か
あったのか？」

「……。」

陸野の一言に、俺は思いっきり凍りついた。忘レテタ。

(やっべー！！！！！ そういやそうだった！！！！！)

俺は慌てて登ってきた崖の方に駆け寄り下を見てみる。すると、目的の人物は案外簡単に見つけることができた。……まあ、崖を登りながら大型の肉食獣がビビリそうな殺気混じりの目で睨んでくるからな。簡単に見つかりますよそりゃあ。

「……………」

「…………ごめん。」

とりあえず謝っておく。するとどうだろうか、殺気が幾5割ぐらい増えたような気がする！……………って駄目だろコレじゃ！？その後俺は何とか上手い言い訳を考えようとしたんだが、ハヤマサの殺気混じりの視線により妨害され何も思いつけず。だってものっそい怖いんだモンあいつの視線！

結局、俺は土下座の状態でハヤマサが登ってくるのを待つという結論に達しました。多分助からないだろうけど。

……神様仏様ガンジー様、誰でも良いからこの窮地を潜り抜ける方法を教えてください。後生ですから！！！！

↓数分後。崖を登っている野球部部員2名の会話↓

『まったく、めんどくせえなあ……。』

『そう言うなって。優勝できたら何でも叶えて貰えるんだぜ？』

『けどよお……。さっきの先輩みたく足場にされて落とされた拳
句に黒子に連れてかれるかも知れねえんだぜ？ 俺はごめんだぜ。』

『ま、まあ大丈夫だろ。別に変なとこに連れてかれて改造されるわ
けじゃな【ヌチャ】……。ん？ 何かココやけにヌルヌルして
んな？』

『……。お前、その手についてるの血じゃね？』

『ゲ！？ ホントだ！！！ 　　って何で血が！？』

『お、おい見ろ！ 頂上に誰か倒れてるぞ！！ アレから流れとる
！？』

『うわマジかよ！？ 何か壮絶な表情で倒れてんじゃん！！』

『や、やっぱ俺棄権するわ！ それ【ズル】じゃああ！？？』

足を滑らせた。

『宮元——————！！！！！！』

小野視点。

何てことだ……。クラスメイトがついに殺人を犯してしまうところを目撃することになるなんて……。

俺の目の前には、先ほど鬼……も逃げ出すような迫力で頂上へと上がってきたハヤマサがある場所へ視線を向けながら肩を上下させています。何故か全身に返り血のようなモノを浴びた状態で。ヒイツ。

そして、ハヤマサの視線の先にはたった今殺害されたクラスメイトの鎖川零時（17）が崖に血を垂れ流しにしつつ横たわっております。その表情は、突然の出来事に恐怖を顔に張り付かせたまま固まっております、被害者がどれほど恐ろしい死に方に遭ったかを想像させます。

かくいう私も、その現場を見ていたので怖くてたまりません。何だよあの動きは。

「オウ神よ……。どうかこの哀れな子羊を救い給え……。」
「……死んで……。ねえぞ……！」

あ、生きてた。

思わず胸の前で十字切ってたら零時のヤツが復活します。身も心もズタボロにされてた零時は何とか体を起こそうとするがダメージが随分とデカイらしく、すぐに崩れ落ちてしまった。

「オイオイ大丈夫か？ 生まれたての小鹿みてーに弱々しいぞ？」
「逆に……聞か……無事に……見えるか……？」
「いや全く。」

こんなボロボロで無事なわけ無いよな！。そうだよな！。

「フン、生きてるだけありがたいと思っただけなんだがな。」

零時をボコボコにした犯人はまだ不機嫌そうなまんまだし。これだけやっててもまだ手加減してたのか？ 俺だったらとつくに死んでる

と思うんだけど。まあこの常識外の2人と一般人の俺を比べちゃ駄目か。

俺はそこまで考えて一旦2人について考えるのを止めると、崖下に広がっている底なし沼を見下ろしてみる。改めて見ると凄いなコレ。・。・。

「どうやって突破すんだコレ？」

「恐らくあの足場に飛び乗って行くのだろうが・。・。」

俺とハヤマサが底なし沼に浮いている足場を見てそう判断すると、後ろから零時が横槍を入れてくる。

「？ 何か気になることでもあんのか？」

「まあ・。・。ちよつとな・。・。」

まだ倒れたままの零時は何故か遠い目をしたまま回答をはぐらかした。俺とようやく元の調子に戻り始めているハヤマサは互いに首を傾げながら顔を見合わせる。

「せいやー!!」

と、その時突然そ底なし沼のある方の崖からやたらと気合の籠った声が聞こえてくる。俺とハヤマサが崖下を見ると、どうやら俺達3人がもたついている間に先に下りていった奴らが底なし沼へとチャレンジしたらしい。〈I・K・F・C〉と書かれたたすきをかけているどっかのクラス男子が崖から手を離して飛んでいた。何だ、飯田先輩のファンか。

「すげー。先陣切るとか勇氣あるなー。」
「あの位置なら無事に足場へ飛び移れるな。参考にしよう。」

俺とハヤマサは思わず感嘆の声を漏らす。ああでも、飯田先輩のフアンならあのくらい平気か。何せ会員になるには『飯田香奈のため』に命を賭けられる』ことが条件だっつーし。

そここうしているうちに、IKFC会員の男子は足場に着地。が、何故かその男子は着地時の体勢から立ち上がるうとして動きを止める。足でも捻ったのか？

俺が不思議に思っていると、

【チュドーーーーー！！！！！】

「ウツギヤーーーーー！！！！！」

『ええーーーーー！！！！！?????』

何か爆発したんですけどー！！??? え? え? 何々何々
!?!?!? 自爆テロ!? それとも爆撃!? 何が起きたんだ
あ!?!?!?

「落ち着けい!?!!」

【ゴッ!】

「の!?!?」

ハヤマサが咄嗟に拳骨を叩き込んでくれたお陰で俺は何とか正気に戻りました。でも痛い。

「もちつと優しく……。」

「お前にそんな遠慮はいらん。うるさいからな。」

絶望した!?! 優しさゼロの友人に絶望した!?!!

「・・・ボケる余力あんなら俺をそっちまで引っ張ってくれよ・・・」

相変わらず体が動かせない零時が呆れた口調で呟く。酷いわ！！
私はただ自分の心境を正確に表現してるだけ・・・。

「今すぐ黙って俺を引っ張ってくか、後で底なし沼に叩き落されるか選べ。」

「サーイエツサー！！」

俺はすぐさま零時の胸辺りを抱えると底なし沼の方へと引っ張っていく。だって怖いんだもの！！！ 目が本気と書いてマジと読むみたいな感じになってるんだもの！！！！

・・・さて、読者の皆さんにウザいと言われる前に口調を戻すか・・・。

俺が零時を抱えて沼の方を見ると、いつの間にか先ほど爆発した男子生徒がいなくなっている。アレ？ どこいったんだ？

「爆風で飛んでったのか？」

「粉々になっただんじゃねーか？」

どっちにしる死んじやってますね彼。

「先ほどの男子ならあそこだが。」

そう言ったハヤマサの指差す先には、沼の水面から突き出ている誰かの腕が。

「・・・・・・・・」

「・・・まあ、恐らく予想通りだ。」

思わず固まってしまった俺達に、ハヤマサは現実を突きつけてくる。

「爆発を食らった男子は意識を失った状態で体を黒コゲ、頭をドレツドヘアーに変化させて口から見るからに人体に有害そうな真つ黒な煙を吐きつつ沼に落下。そのまま沈んでいったが途中で意識を取り戻したのか片腕があやうって出てきたんだ。」

「止めてー！ー！ そんな淡々と細かく説明しないでー！ー！ー！」
「つーか助けようとは思わなかったのか・・・。」

ハヤマサによる事細かな説明に思わず俺は耳を塞いで蹲る。零時が多少動かせるようになってきた体で若干ハヤマサから距離を取りつつ白い目を向けてる。

「この距離じゃ俺ではどうしようもない。過ぎたことに捕らわれるより、今の俺達のことを考えよう。」

「いやでも・・・。」

「それ以上ぐだぐだ抜かすようならここから叩き落すが。」

「さあ一緒に考えようー！ー！」

何で今日はハヤマサがこんなに怖くなってるんだろうか。あれか、ストレスか。まあそんなことは一旦置いておこう。きちんと考えないと俺の身が危ない。

というわけで、男三人その場に座り込んで（一名倒れてるけど。）作戦会議をすることに。

「しかし足場にもトラップとは念が入っているな。」

「あいや叔父さんの仕業だな。多分下の足場の大半はトラップ仕掛けてあんど。」

「ええ〜・・・、マジい〜?」

「マジだ。恐らく叔父さんのことだから、かなりの種類のトラップがあるぞ。」

「例えばどんな?」

何となく俺は気になって零時にトラップについて聞いてみた。やっぱり何があるか少しでも知つといた方がいいじゃん? 零時なら製作者の身内なんだし、信憑性高いだろうしな。

零時は何故か思案顔で黙り込んだんだが、「・・・別にいいか。」と呟くと俺にトラップについての考察を話してくれた。

「多分・・・叔父さんのことだから、肉体的にも精神的にもキツイのを仕掛けてあると思う。」

「精神的にキツイって・・・?」

「あ〜・・・、カンだけど、(ピー)を(ピー)したり(ピー)して(ブッパラパー)なんかするかもな。・・・ああ、(ピー)から(ドーン)が出て(デストロイ)されるかも。」

「知りたくなかった新事実!!!」

何でこの子もこんな冷静に話せるの!? ある意味死ぬよりつらいよコレ!? 途中で絶対性別の壁が薄くなってしまう事態が起こる!!!

八ヤマサだつて顔真っ青だよ!!! さっきまでの勢いどっかに逃げちやつたよ!!!

「・・・よく分かるな・・・。」

「・・・昔、修行の一環で似たようなことが・・・。」

あ、経験者だつたんだ。道理で詳しく知ってるわけだ。

「で。そのときは最終的にどうなったんだ？ やっぱお前が無事終
わらせたんだよな？」

「……………」

何で零時は顔を背けたんだろうか……。ちよつとー。こつち向い
てよこつちー。人と話をするときは相手の目を見るもんだろー？

「お前は人間じゃないからいいだろ。」

「あつれー！！？？ 俺いつから人間止めてたっけー！！？
??？」

「違つだろつ零時。人間“未満”だろつ。」

「何未満つて！？ 俺一体何！？」

何だか自分という生き物が何なのか分からなくなってきたよ。この
2人の所為で。

「さ、そろそろ冗談は止めて真剣に考えよう。ちよつと時間をロス
し過ぎてる。」

「良かった冗談か……………」

「未満は冗談だ。」

「最後に謎が残ってしまった！！」

零時視点。

あゝくそ、まだ体が口クに動かせねえ……。俺が悪いのは分かってるけど、ちったあ手加減してくれっつーんだよ……。

俺は珍しくツッコミ役になっている小野に珍獣でも見るかのような目を向けつつ、首しか動かせない状況に舌打ちする。これじゃあここを下りることすらできねえ。まあハママサの本気のく技くを食らったらこんなもんじゃ済まないだろうが。それにしたって……。心の中で愚痴を漏らしていると、俺の心の声が届いてしまったのか、ハママサが頭を抱えて大仰に驚いている小野から俺に視線を向けてきた。

「おい零時。そこで寝転がってる暇があるならお前も考えろ。」

「いや好きで寝転がってるわけじゃねえから。これお前の所為だから。」

「む？ まだ仕置きが足りなかったか。」

「オーケー分かった。もうこの話題には触れないから拳を鳴らすのは止めよう！ てかまた話が脱線してるから！！」

「……そうだな。」

俺が声を張り上げて説得するとハママサは流石にこれ以上長引かせるのはマズイと思ったのか、物凄く間を置いてから拳を下ろした。出来ればすぐに降ろして欲しかったが、ここは我慢だ。流石にもうボコられるのは勘弁したいからな。

「それで？ どうやって突破する？」

俺の目の前に何故かヤンキー座りで座り込んだハママサは先ほどと

同じような言葉を言ってくる。因みに小野は少し離れた場所で「俺って一体……。」などとぶつぶつ呟いている。キシヨイから他人のふりだ。

俺は脳内で叔父さんについての情報と、似たような仕掛けがあった修行のときのことを思い出しながら考えを述べていく。

「ん……。多分叔父さんのことだからトラップの配置に何かしらの法則があるな。」

「法則？」

「ああ。俺みたいに慣れてるヤツならともかく、素人相手にランダムじゃキツイからな。多分結構簡単な法則が……。」

……あ。

「？ どうした？」

突然話の途中で固まってしまった俺に、ハヤマサは首を傾げる。

「いや……。多分なんだけど、法則分かったかも。」

「本当か！？ で、どんなだ！？！？！」

「待ってって。まだ確証は無いんだよ。」

あくまで叔父さんの物凄い感性を知ってる俺だから思いついたことだけど、合ってるかどうかは確認できないしな……。

「なら、確認すればいいのでは無いか？」

「どうやってだ？ 俺はまだ体が動かせねえし、お前が特攻するのか？」

「俺はごめんだ。だからここは……。」

そう言うと、ハヤマサは横目である人物を見ている。その視線の先には、ようやく『気持ち悪い人』から『普通のバカ』に戻った小野がいた。

「……あの……すいません……。」

「どうした？ 何かあったか？」

「……なんで俺はハヤマサに襟を掴まれてるんでしょうか？ あと、ハヤマサはどうして俺を投げ飛ばすかのような姿勢に？」

「んなもんお前を投げ飛ばすからに決まってるだろ。」

「説明ありがとう零時。でも何故俺はそんな目に遭っているのですよるか……!!???」

あ、耐え切れずに絶叫した。

「いや、実は零時がああ足場のトラップはある法則で設置されていると言うのでな。少しお前に確かめてもらおうかと。」

「自分で行こうぜそう言うのは!? 失敗したら俺死んじやうぜ!」

『不死身のお前なら大丈夫だ。』

「そんな所で同調しないで!」

あーもううるせえなあ。仕方ない、取っておきの切り札を出すか。

「おい小野。」

「ハッ!? 零時やつぱり俺を助けてくれ・・・!!」

「お前が逝ってくれたら叔父さん秘蔵のエロ本コレクションを横流ししよう。」

「おっしやあとつとと飛ばせやハヤマサあ!!!!!!!!!!」

バカは扱いやすくて助かるぜ。丁度処分にも困ってたし。

目に真つ赤なエロパワーの炎を宿した超人、<エロリスト小野>は気合の籠りまくってる声でハヤマサを急かす。今やヤツは火の中だろつと水の中だろつと底なし沼の中だろつと突き進んでいけるだろう。途中で我に変えって死ぬんだろつけど。

「おしつ、それじゃあ行くぞー。」

「オラ逝つたらー!!!!!!」

ハヤマサの掛け声に小野が大声で応じると、ハヤマサは一本背負いの要領で小野を背負い思い切りブン投げた。それはもう凄い勢いで、この時点で失敗が一つ。小野を投げるときに、ハヤマサは上手く放せなかったのか少し遅めに手を離れたんだ。すると、前へと向いていたはずの勢いは下へと向かってしまう。

つまり、小野は勢いが良すぎて頭から真つ直ぐ落ちて行ってしまったのだ。

「あ。」

流石にハヤマサも小野を沼に沈めようなどとは思ってはいなかったらしく、失敗したという風な声を漏らしていた。

だが、俺達の心配は杞憂だった。今の小野は、人間の限界を超えた存在、エロリスト小野だった。

「フハハハハこの程度お!!!!!!」

何故か不適な笑い声を上げる小野は、クルリと空中で体勢を立て直すと真下にある足場へと狙いを定めた。今の小野の身体能力での位置なら確実に着地できるだろう。だが、傍観していた俺と投げたハマサは微妙な顔をしていた。

実は、ハマサはもう一つ致命的なミスを犯していたのだ。

先ほども言ったように、ハマサは放すタイミングをミスって小野を頭からブン投げたのだ。つまり、当初の移動距離よりも若干飛距離が短い。

結果小野が現在乗っている足場は……………。

「フフフどうした2人も!? 俺の華麗な着地を見て驚きが隠せない【シュルシュルシュル。】アレレ!? 何でミミスみたいな触手が俺の体に絡まってきてるんだ!？」

トラップ付きの足場でした。アハハハ。

「しまったな。これではまた誰かを試すしか無いぞ。」

「そこで俺を見るんじゃないやねえよハマサ。さっき爆発した足場から行けばいいだろ?」

「そうするか。…………で? お前はまだ動けないのか?」

「ようやく手足が動くようになってきた。…………力はほとんど入らないけど。」

「…………しょうがない、おぶってやろう。」

「すまん。」

「ねえちよつと……!!?!?!?!? あからさまに俺が存在無視しないで……!!?!?!?!? つかー助けて……!!?!?!?!?」

『聞こえない。』

「聞こえてるじゃ・・・アア止めて！！　そこは親にも・・・
アアン感じちやうううううう！！！！！！」

俺とハヤマサは段々と口調が変わっていく小野の悲鳴をBGMにして、崖を下りていった。

その後、俺のトラップの配置に関する予感は見事に的中し、俺とハヤマサは何とか無事に第1関門を突破することに成功した。

・・・小野は何度かこちらに助けを求めてきたが、しばらくすると沼地へと引き込まれていったらしい。姿が消えていた。

・・・エロ本でもお供えしよう。

第27話：エロパワーは不可能を可能にする。……ワケないだろ。

(後書き

零時：読者の皆さん、お久しぶりです。

ハヤマサ：前回の更新から1ヶ月近く間が空いてしまっって申し訳ない。謝罪は作者に……。作者はどこだ？

零時：……。向こうの部屋で女性陣に処刑されてる。

(隣の部屋から悲鳴が聞こえてくる。)

ハヤマサ：……。いつものことか。

零時：そういうことだ。

隼太郎：ハッハッハ！ ではそろそろシメに入るとするかね！

ハヤマサ：あー読者の皆さん。こんな適当な作品が見捨てないで欲しい。

零時：次回からは第2障害物に入るぜ。少し待ってて欲しい。

『ま、待って！ せめて弁明を聞いて……。！』

『弁明？ 新しくXbox360を買ってずっとゲームをしていたことか？』

『……。』 (冷や汗ダラダラ)

『それとも冬休み中毎日昼の12時まで寝たことか？ アア？』

『……。』 (冷や汗ドバドバ)

『何か言い訳はある？』

『すみませんでしたあ！！』 (土下座)

『……。』 誰が許すかあ！！……！』

『いやああああああ……。』

(複数の打撃音)

ハヤマサ：……。

零時：……。ホントに大丈夫かな……。

第28話：おんぶは兄弟にされるのが一番落ち着く（前書き）

関係ない話だけど、今週ランボー・最後の戦場借りてみました。

久しぶりに・・・なんと言うか見る価値のある映画だと思いました。

スタローンカッコイイぜ！！

ただ、近年稀に見るほどのスプラッタ映画でもありました。人間

バラバラになってた・・・。

興味があつたら見ることをお勧めします。グロイの嫌いな方には

お勧めできないが。

多分コレ見たらキレてくるだろう友人に予防線。映画見たのは一昨日だ。

第28話：おんぶは兄弟にされるのが一番落ち着く

ハヤマサ視点。

「……………」

「……………」

……………周囲の視線が気になる。

今、俺は体が満足に動かせない零時を背負いながら走っている。多少疲れるが、俺の所為でもあるから無下には扱えない。…………正直きちんと息の根を止めておくべきだったろうかと自問したりしたが。

「今不穏な事考えたる。」

「そんな訳ないだろう。」

耳元の不機嫌そうな声に、なるべく慌てないよう心がけつつ返事を返す。その様子から、零時の方も周囲の視線を感じていることが窺える。

注目を浴びるのも無理は無いだろう。零時の体操服は俺が半殺しにしたとき巻き添えてボロボロになっている。これでは目立つことこの上ない。周りにいる第1関門を抜けてきた他の奴らもついつい目を移してしまうのだろう。

しかも、零時はそれなりに顔立ちが良く、体も鍛え上げられている。女子やそっちの趣味を持つ男子などが熱の籠った視線で凝視してくる。これでは気になって仕方が無い。

「……………いつそのこと放っていくか……………」

「本音が出てきてんぞコラ。」

・・・しまったつい。

とまあこんな感じで零時を減らず口を叩きあいながら周囲の視線をやり過ぎし、一人一人を担ぎながら走っている途中で何度も休憩をしたがそれでも着実に進んでいくと、いつの間にか第2関門に到着していた。

「・・・進行早っ。」

「それは言っな。」

ほんとにダベりながら零時を担いで移動してるだけだったんだ。わざわざそのときのことを書いてもつまらんさ。

ま、そんなことは置いておくとして。今は次の障害物に注意を向けよう。

零時視点。

ハママサにおぶさっているだけというのも退屈なので、とりあえず体のどこが動くか確認してみるか。

首・・・問題なし。ちゅーか首から上だけはずっとまともに動かせるんだよな。

右腕・・・まともに動かせる。よっし、何とか迎撃程度はできそうだな。

左腕・・・動かせるが力が入らん。仕方ないのでおどろおどろし

い声を出しながらハヤマサの視界へ突き出してみる。
頭部による頭突きが返ってきました。痛い。

後

「次変なマネをした場合はゴミ箱へ放るぞ。」

「すみませんもうしないんで廃棄処分は勘弁してください。」

まともに動かせるようになった右腕で最初に行ったことは、片手だけの謝罪だった。・・・自重しよう。

「・・・ん？」

直撃を食らって結構痛む顎をさすっていると、進行方向に二つほど妙な物体があることに気づく。一つは、『この先第2関門』と書かれた木製の看板。何故かカラーズプレーで「ゴートウーヘル!!」と大きく書かれているので読みにくい。誰だ書いたの。そして、もう一つの物体が・・・。

「・・・先輩だな。」

「・・・先輩ですな。」

すらりと伸びたポニーテールに、小柄な体にはちと不釣合いに思える肉付きの良い体。

そして気絶しているにもかかわらずしっかりと右手に握り締められているほんのり紅い『釘バット』。

・・・香奈先輩が倒れてる。

「何故こんなところで倒れているんだ・・・。」

ハヤマサが呆然と呟く。俺も知りたいわ。

こういう場面では普通起こしに行くのが通例だが、生憎と俺は体が

満足に動かないので無理。ハヤマサは先輩から2メートル以上離れた場所から近づこうともしない。多分本能が危険を告げているんだろう。

「ここはスルーしてくべきじゃねえか？ 触らぬ神に何とやらって言うだろ。」

「いや・・・、だがこのまま放っておくのもどうかと・・・。」

「・・・じゃどうすんだよ？」

見て見ぬフリができないのはハヤマサの悪い癖だ。早く立ち去ればいいのにモタモタしてるので、俺は若干イラついてきてる。

文句の一つでも言っただろうかと思いい俺が口を開こうとしたとき、突然ハヤマサが顔を上げたのだ。

「あー!!」

「おごおー!？」

お陰でまたハヤマサの後頭部が俺の顔面に直撃する羽目に。いきなりのごとで身構えることすらできず、思い切り食らってしまう。心なしかさつきよりも痛い。

「~~~~~っ!! テメ、幾らなんでもマジ切れっぞ!!!!」

「す、すまん許せ! 状況を切り抜ける妙案を思いついたのでついはしゃいでしまったんだ!!」

頭突きの仕返しに顎でハヤマサの肩をぐりぐりしていると、とんでもないことを言っただけ。ほほう。その言葉は本当だろうか。嘘だったら承知しねえ。

「で、妙案ってのあ何だ？」

俺が懐疑的な視線をハヤマサの後頭部に向けつつ言い放つと、ハヤマサは珍しくニヤリという感じの笑みを俺へと浮かべてきた。

「何、簡単なことだ。」

そう言うと、ハヤマサは俺の袖を掴んで……。ってオイちょっと待て!?

「何する気……!!」

「面倒ごとは嫌いだな!! お前に任せる!!」

「ぐああ!!」

ハヤマサは唯一動く俺の右腕を左手で封じ、右手で襟元を掴むと背負い投げの要領で俺を放り投げやがった。お前柔道なんてどこで覚えやがったんだよ!!!!??

俺は体をしたたかに打ち付けつつ見事に香奈先輩の横へと投げ飛ばされ、ハヤマサはかつてない速さを発揮して俺の横を通り過ぎていく。

「て、てめえ待ちやがれえええええ!!!!!!」

渾身の叫びは、ハヤマサのにこやかな笑顔でシカトされました。このとき、俺はハヤマサが作者とダブって見えたことを告白する。と、いうか、作者の爽やかな笑顔が空に浮かんでるように見えたよ。そのまま走り去ろうとするが、俺がこんな仕打ちを受けて黙っているような人間ではないことをアイツは忘れてる。逃すかコラア!!

「オラア! <エナジーシュート>!!」

俺は右腕に氣を集中させると、こちらを見向きもせず走り去ろうとしていた。ハヤマサに向けて撃ちだした。撃ち出された氣は俺の拳より一回り大きめの弾丸のような形に変形し、真つ直ぐにハヤマサへと突き進んでいく。

「くっ!!」

大分距離が開いていたためハヤマサはすぐに気づいたが、俺の<エナジーシユート>は弾速が早い。咄嗟に身を捻って俺の<エナジーシヨット>を避けようとする。

<ぱりや>を使わなかったのは、直感で<ぱりや>を使うと間に合わないと思ったからだろう。その判断はあまり修羅場慣れしていないハヤマサにしては賢明な判断だ。

・・・だが、俺がその程度を予測しなかったとでも？

「甘えよ！ シヨット!!」

掛け声とともに指を鳴らすと、氣で作られた弾丸が突如として小さな球体となって散らばり、それぞれがまるで意思を持っているかのごとくハヤマサに襲い掛かっていく。

「な!?! そんなんありかほおお!!!!」

体中にまんべんなく大量の小さな氣弾を食らったハヤマサは、2mほど吹き飛ばされた後地面に倒れ込んだまま動かなくなった。多分痛みで氣絶したんだろう。

「へっ、ざまあみやがれってんだ。」

良い子の皆は、困つてるときに友人を生贄に捧げるようなマネをす

るなよ？ あそこで転がってる奴みたい酷い目に遭うからな？

これ試験に出るから覚えておくように。

・・・何の試験かは聞くなよ。

「あーでも、これからどうすっかなあ・・・。」

ハマサはしばらく目を覚まさないだろうし、俺はまだ右腕しか動かせない。しかも丁度今、周囲には誰もいないのだ。これではレス続行は無理だろう。

ていうか何でこういうときにあの知瑠矢とかいうのが乗ってるのざつたいヘリがいねーんだよ。いたら墮としてでも救助させてやるのに。

無いものねだりをしてもしようもなく、俺は地面に大の字に転がったまま、ため息をついた。その時、ふと先輩はどうしているのか気になり、俺は首を動かして先輩が倒れている所を向いてみるすると・・・。

「あ、零時くん!！」

・・・いつの間にか起きてらっしゃったよ。 オーマイゴッド。

「フンフンフン」

実の上機嫌な先輩。鼻歌まで歌ってらっしゃるよこの方は。

「……ご機嫌ですね……」

「だって零時くんがこんなに近いんだもん」

「……そうですか……」

そう、香奈先輩がこんなにも上機嫌なのは、俺が香奈先輩におぶさつてもらっているため、体を密着させているからだ。すっげえ恥ずかしい。

しかも、先輩は俺の臀部に手を回して俺をおんぶしているのだが、その手がたまに妙な感じに動くのだ。……セクハラ？

「あの、先輩……」

「何？」

「……俺の尻撫で回すの止めてもらえます？ かなり恥ずいんですけど……」

「えー？ いいでしょ減る物でもないし。」

「俺の心が磨り減るんです！！ 頼むからヤメテ！！」

「零時くんが可愛いから止ーめない」

「鬼いー！！」

……先輩は意識を取り戻してすぐに喜色満面の表情で俺目掛けて飛び掛ってきた。無論、右腕しか動かせない上に異性を殴るこ

とをよしとしない俺にはどうすることもできず、あっさりと捕まる羽目に。

俺がまともに動けないことに気づいた先輩はここぞとばかりに頬擦りしたり服を脱がそうとしたり……。右腕一本で凌ぐのは本当に大変だった。ホントに。

最終的に頭突きで黙らせてからの説得で何とか大人しくなってくれたが、今度は俺が動けないからと言って無理やりお姫様抱っこをしようとしてくるので焦った。普通逆だろ。

で、ここも頭突きから説得へ持つていくコンボでどうにかお姫様抱っこは取り下げてもらい、おんぶにしてもらったのだ。

因みに。先輩の釘バットは俺が持っている。……何か手に持った瞬間どつかで聞いたことあるような音楽が聞こえてきて手から放れなくなっただけ。これ大丈夫だよな？

「……本当に厄日だ……。」

「そう？ 私は凄く良い日だと思うけど？」

そりゃ先輩は実害被ってませんからね、と言おうとしたが止めた。

先輩は俺と一緒にいられるのが本当に嬉しいようで、さつきから笑顔のまま。流石にコレを壊すようなマネはできそうにない。

まあ先輩の背中中は居心地良いし、体が動くまでなら乗っててもいいかもと思ってる。

「そう言われると嬉しいなあ……。えへへ……。」

「何当然のごとく人の思考読んでんですか。ああもうだらしない口開けてないで。」

「えへへ……。」

ああトリップしちゃってる。誰かー。この人戻してあげてー。

「つて先輩！ 通り過ぎてますつて！！」
「ふええ！？ あ、ご、ごめん！！」

先輩が朝日のようなぼかぼかした笑顔のままトリップしている間に、第2閉門の会場入り口と思われる場所を通り過ぎてしまっていた。

慌てて釘バットで軽く先輩を叩いてそのことを知らせる。先輩はすぐに正気に戻ってくれ、その場で謝りつつ、Uターンして会場入り口へと戻る。

会場の入り口は、地下へと続くト階段らしきもので、横に「ここからイケ。」と書かれた看板があった。・・・何故カチナ！？ 漢字にしてくれないと意味が分からんよ！！ 未知の恐怖を味わう可能性を考える羽目になっちゃうよ！！

「すつげえ入りたくない！！ 先輩帰りましょう！！」

「だが断る！！」

「悪魔あー！！！！！！」

ダメだ！！ この人とことん俺を追い詰めるつもりだ！！ くそ、何でこんなときに体が動かないんだよー！！！！ つーか釘バット離れねー！！ これ呪われとるー！！？

俺はせめてもの抵抗に右腕を振り回したり、手が完全にパーの形になっっているにもかかわらず手から全く離れない釘バットにビビったりしている内に、先輩はトンネルへと入り込んでしまっていた。

こうなつては最早どうしようもない。諦めるしかないだろう。

俺はどう頑張つても取れない釘バットを握り直すと、階段を下りた先に出現した大きな両開きの扉を睨む。どうやら横のボタンを押して開かれるタイプらしい。 妙に近代的。

「もう何がきても驚かねえぞ・・・。」

「・・・多分零時くんがそう言うのも予想されてると思う・・・。」

ぐ！痛いところを突いてくるな先輩……。否定できない俺。だって作者だけならまだしも叔父さんとかN・Hさんとかが絡んでるんだ。俺の予想なんぞ軽くぶち抜いてくれるだろう。

「それじゃあ開けるね。」

「ああ待つて！！まだ心の準備があ……。！！！」

俺の懇願は綺麗にシカトされ、先輩はあっさり『開』の文字が書かれたボタンを押してしまった。左右に開かれていく扉の向こうには。。。。。

「。。。。んなアホな。。。。。」

「。。。。すごお。。。。。」

扉の先は、とても地下に作られたとは思えないような広さのトンネルとなっていた。たった数日でどうやってこんな広さのトンネルを掘ったのかは聞かないでくれ。俺には心当たりが多すぎるんだ。だが、トンネル内にはさらに異様な設備が設置してある。それは、俺達がこの中に入ってから聞こえている馬鹿でかい騒音の音源でもあった。

「。。。。煩いな。」

「ホントだね。。。。。」

トンネルの地面には出口まで続いているのであろう恐ろしく長いベルトコンベアが設置されており、丁度入り口側へ押し戻すようにコンベアが動いている。

そして、その左右には笑ってしまうような大きさの【扇風機】が台風のような突風をたたき出していた。

・
・
・
・
・
これを越えて行けと!?

第28話：おんぶは兄弟にされるのが一番落ち着く（後書き）

作者：・・・1ヶ月も空けてしまった・・・。

舞歌：何か言い訳はあるか？

三上：特にアタシらを全く出してないことについてよあ。

作者：・・・先生は次回出そうかと・・・。

舞歌：よし分かった。今すぐ断頭台へ送ろう。

作者：いやああ！！ 何でそんな簡単に死刑に向かうのおお！！??

小野：とりあえず日本国内には無いな。

零時：突っ込むとこ別にあると思うぞ・・・。

ハヤマサ：普通に切腹させた方が早い気がするが・・・。

香奈：作者と舞歌さんは放っておいて、私達で次回予告でもしよーよ！

小野：先輩テンション高いなあ。

ハヤマサ：久しぶりに本編でまともな出演があったからな。機嫌よくなるだろう。

零時：じゃ、さくつと予告を。次回は作者が凄い人物を出そうかと思ってるらしい。

小野：あくまで思ってるだけらしいけど。

香奈：一体誰なのかな？

ハヤマサ：それは次回になるまでのお楽しみだ。ではこの辺で。

小野：イエス、ウイーキャン！！

零時：帰れド阿呆！！

舞歌：では臆太郎さんによるトップロープ上からのギロチンドロップで。

作者：やべえ！！ 顔面ごと潰される！！

臆太郎：ハッハッハッハッハ！！ それでは行くぞお！！ トウ！！

作者：ひいひいー！！！！？？ 誰か助けて【ドグシヤアー！！！！】
舞歌：・・・地獄に堕ちるがいい・・・。南無・・・。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4728e/>

鎖川零時の日常！！

2010年10月12日09時18分発行